

放浪記（初出）

林芙美子

青空文庫

秋が来たんだ

十月×日

一尺四方の四角な天窓を眺めて、始めて紫色に澄んだ空を見た。

秋が来たんだ。コック部屋で御飯を食べながら私は遠い田舎の秋をどんなにか恋しく懷しく思った。

秋はいゝな……。

今日も一人の女が来た。マシマロのように白っぽい一寸面白そうな女。厭になつてしまふ、なぜか人が恋しい。

そのくせ、どの客の顔も一つの商品に見えて、どの客の顔も疲れている。なんでもいゝ私は雑誌を読む真似をして、じつと色んな事を考えていた。やり切れない。

なんとかしなくては、全く自分で自分を朽ちさせてしまうようだ。

十月×日

広い食堂の中を片づけてしまつて始めて自分の体になつたような気がする。真実に何か書きたい。それは毎日毎晩思いながら、考えながら、部屋へ帰るんだが、一日中立つているので疲れて夢も見ずに寝てしまう。

淋しいなあ。ほんとにつまらないなあ……。住込は辛い。その内通いにするように部屋を探そうと思うが、何分出る事も出来ない。

夜、寝てしまうのがおしくて、暗い部屋の中でじつと目を開けていると、溝の処だろう、チロチロ……虫が鳴いている。

冷い涙が不甲斐なく流れて、泣くまいと思つてもせぐりあげる涙をどうする事も出来ない。何とかしなくてはと思ひながら、古い蚊帳の中に、樺太の女や、金沢の女達三人枕を並べているのが、何だか店に晒らされた茄子のようで佗しい。

「虫が鳴いてるよう……。」

そつと私が隣のお秋さんにつぶやくと、

「ほんとにこんな晩は酒でも呑んで寝たいね。」

梯子段の下に枕をしていた、お俊さんまでが、

「へん、あの人でも思い出したかい……。」

皆淋しいお山の閑古鳥。

何か書きたい。何か読みたい。ひやひやとした風が蚊帳の裾を吹く、十二時だ。

十月×日

少しばかりのお小遣いが貯ったので、久し振りに日本髪に結う。

日本髪はいゝな、キリゝと元結いを締めてもらうと眉毛が引きしまって、たつぷりと水を含ませた鬢出しで前髪をかき上げると、ふっさりと額に垂れて、違った人のように美しくなる。

鏡に色目をつかったって、鏡が惚れてくれるばかり。日本髪は女らしいね、こんなに綺麗に髪が結べた日にやあ、何処かい行きたい。汽車に乗って遠くい遠くい行きたい。

隣の本屋で銀貨を一円札に替えてもらって故里のお母さんの手紙の中に入れてやった。喜ぶだろう。

手紙の中からお札が出て来る事は私でも嬉しいもの……。

ドラ焼きを買って皆と食べた。

今日はひどい嵐、雨が降る。

こんな日は淋しい。足がガラスのように固く冷える。

十月×日

静かな晩だ。

「お前どこだね国は？」

金庫の前に寝ている年取った主人が、此間来た俊ちゃんに話かける。寝ながら他人の話を聞くのも面白い。

「私でしか……樺太です。豊原つて御存知ですか？」

「樺太から？ お前一人で来たのかね。」

「えゝ！」

「あれまあ、お前きつい女だね。」

「長い事函館の青柳町にもいた事があります。」

「いゝ所に居たんだね、俺も北海道だよ。」

「そうでしょうと思いました。言葉にあちらの訛がありますもの。」

啄木の歌を思い出して真実俊ちゃんが好きになった。

函館の青柳町こそ悲しけれ

友の恋歌

矢車の花。

いゝね。生きている事もいゝね。真実に何だか人生も楽しいものゝように思えて来た。

皆いゝ人達ばかりだ。

初秋だ、うすら冷い風が吹く。

佗しいなりに何だか女らしい情熱が燃えて来る。

十月×日

お母さんが例のリウマチで、体具合が悪いと云つて来た。

もらいがちつとも無い。

客の切れ間に童話を書く、題「魚になった子供の話」十一枚。

何とかして国へ送つてあげよう。老いて金もなく頼る者もない事は、どんなに悲惨な事だろう。

可哀想なお母さん、ちつとも金を無心して下さらないので余計どうしていらつしやるかと心配します。

「その内お前さん、俺んとこへ遊びに行かないか、田舎はいゝよ。」

三年も此家で女給をしているお計ちゃんが男のような口のきゝかたでさそつてくれた。

「えゝ……行くとも、何日でも泊めてくれて？」

私はそれまで少し金を貯めよう。

いゝなあ、こんな処の女達の方がよっぽど親切で思いやりがある。

「私しあ、もうもう愛だの恋だの、貴女に惚れました、一生捨てないのなんて馬鹿らしい真平だよ。あゝこんな世の中でお前さん！ そんな約束なんて何もなりはしないよ。私をこんなにした男は今、代議士なんてやつてるけど子供を生ませると、ぷいさ。私達が私生児を生めば皆そいつがモダンガールさ、いゝ面の皮さ……馬鹿馬鹿しいね浮世は、今の世は真心なんてものは、葉にしたくもないよ。私がこうして三年もこんな仕事をしてるのは、私の子供が可愛いからさ……ハッハッ……。」

お計さんの話を聞いていると、ジリジリとしていた気持が、トンと明るくなる。素的にいゝ人だ。

十月×日

ガラス窓を、眺めていると、雨が電車のように過ぎて行つた。

今日は少しかせいだ。

俊ちゃん是不景気だつてこぼしている。でも扇風機の台に腰を掛けて、憂鬱そうに身の上話をしたが、正直な人だ。

浅草の大きいカフェーに居て、友達にいじめられて出て来たんだが、浅草の占師に見てもらつたら、神田の小川町あたりがいゝつて云つたので来たのだと云っていた。

お計さんが、

「おい、こゝは錦町になつてるんだよ。」

と云つたら、

「あらそうかしら……。」

とつまらなさそうな顔をしていた。

此の家では一番美しくて、一番正直で一番面白い話を持っていた。

メリービツクホードの瞳を持つて、スワンソンのような体つきをしていた。

十月×日

仕事をしまつて湯にはいるとせいせいする。広い食堂を片づけている間に、コックや皿洗い達が先湯をつかつて、二階の広座敷へ寝てしまうと、私達はいつまでも湯を楽しむ事が出来た。

湯につかっていると、一寸も腰掛けられない私達は、皆疲れているのでうつとりしてしまう。

秋ちゃんが唄い出すと、私は莫塵の上にゴロリと寝そべって、皆が湯から上ってしまうまで、聞きとれているのだった。

貴女一人に身も世も捨てた

私しや初恋しぼんだ花よ。

何だか真実に可愛がつてくれる人が欲しくなった。
だが、男の人は嘘つきが多いな。

金を貯めて呑気な旅でもしよう。

——此秋ちゃんについては面白い話がある。

秋ちゃんは大変言葉が美しいので、昼間の三十銭の定食組みの大学生達は、マーガレットのようにカンゲイした。

十九で処女で、大学生が好き。

私は皆の後から秋ちゃんのたくみに動く瞳を見ていた。目の縁の黒ずんだそして生活に疲れた衿首の皺を見ていると、けっして十九の女の持つ若さではなかった。

其の来た晩に、皆で風呂にはいる時、秋ちゃんは佗しそうにしよんぼり廊下の隅に立っていた。

「おい！ 秋ちゃん、風呂へはいつて汗を流さないと体がくさってしまうよ。」

お計さんはキュキュ歯ブラシを使いながら大声で呼びたてた。

やがて秋ちゃんは手拭で胸を隠すと、そつと二坪ばかりの風呂場へはいつて来た。

「お前さん！ 赤ん坊を生んだ事があるだろう……。」

——庭は一面に真白だ！

お前忘れやしないだろうね、リユーバ？ ほら、あの長い並木道が、まるで延ばした帯革のように、何処までも真直ぐに続いて、月夜の晩にはキラキラ光る。

お前覚えていいるだろう？ 忘れやしないだろう？

——……………

——そうだよ。此桜の園まで借金のかたに売られてしまうのだからね、どうも不思議だと云つて見た処で仕方がない……。

と、桜の園のガーエフの独白を別れたあの男はよく云っていた。

私は何だか塩っぱい追憶に耽つて、歪んだガラス窓の白々とした月を見ていた時だった。

お計さんの癩高い声に驚いてお秋さんを見た。

「えゝ私ね、二ツになる男の子があるのよ。」

秋ちゃんは何のためらいもなく、乳房を開いてドボン！ と湯煙をあげた。

「うふ……私処女よ、もおかしいものだね。私しやお前さんが来た時から睨んでいたよ。」

だがお前さんだって何か悲しい事情があつて来たんだらうに、亭主はどうしたの。」

「肺が悪くて、赤ん坊と家にいるのよ。」

不幸な女が、あそこにもこゝにもうろうろしている。

「あら！ 私も子供を持った事があるのよ。」

肥つてモデルのようにしなしなした手足を洗つていた俊ちゃんがトンキョウに叫んだ。

「私のは三日めでおろしてしまつたのよ。だつて癩にさわつたからさホッホ……。私は豊原の町中で誰も知らない者が無い程華美な暮しをしていたのよ、私がお嫁に行つた家は地主だつたけど、ひらけていて私にピアノをならわしてくれたの、ピアノの教師つても東京から流れて来たピアノ弾きよ、そいつにすっかり欺されてしまつて、私子供を孕んでしまつたの。そいつの子供だつてことは、ちゃんと分つてゐるから云つてやつたわ、そしたらそいつの言い分がいゝじあないの——旦那さんの子にしときなさい——だつてさ、だから私口惜しくて、そんな奴の子供なんか生んじやあ大変だと思つて辛子を茶碗一杯といて呑んだわよホッホ……。どこまで逃げたつて追つかけて行つて、人の前でツバを引っかけてやるつもりさ。」

「まあ……。」

「えらいね、あんたは……」

仲間らしい讃辞がしばしは止まなかった。

お計さんは飛び上って風呂水を何度も何度も、俊ちゃんの背に掛けてやった。

私は息づまるような切なさで聞いていた。

弱い私、弱い私……私はツバを引つけてやるべき、裏切った男の頭をかぞえた。

お話にならない大馬鹿者は私だ！ 人のいゝって云う事が何の気安めになろうか――。

十月×日

……ふと目を覚ますと、俊ちゃんはまだもう仕度をしていた。

「寝すぎたよ、早くしないと駄目だよ。」

湯殿に皆荷物を運ぶと、私はホツとした。

博多帯を音のしないように締めて、髪をつくろうと、私はそっと二人分の下駄を土間からもって来た。朝の七時だと云うのに、料理場は鼠がチロチロして、人のいゝ主人の鼾も平かだ。

お計さんは子供の病気で昨夜千葉へ帰ってしまった。

真実に、学生や定食の客ばかりでは、どうする事も出来なかった。

止めたい止めたいと俊ちゃん二人でひそひそ語りあっていたものゝ、みすみす忙がしい昼間の学生連と、少い女給の事を思うと、やっぱり弱気の二人は我慢しなければならなかった。

金が這入らなくて道楽にこんな仕事も出来ない私達は、逃走するより外なかった。

朝の誰もいない広々とした食堂の中は恐ろしく深閑として、食堂のセメントの池に、赤い金魚がピチピチはねている丈で、灰色に汚れた空気がよどんでいた。

路地口の窓を開けて、俊ちゃんは男のようにピョイと飛び降りると、湯殿の高窓から降した信玄袋を取りに行った。

私は二三冊の本と化粧道具を包んだ小さな包みきりだった。

「まあこんなにあるの……。」

俊ちゃんはお上りさんのような格好で、蛇の目の傘と空色のパラソル、それに樽のような信玄袋を持って、まるで切実な一つの漫画だった。

小川町の停留所で四五台の電車を待ったが、登校時間だったのか来る電車は学生で満員だった。

往來の人に笑われながら、朝のすがすがしい光りをあびていると顔も洗わない昨夜からの私達は、インバイのようにも見えたろう。

たまりかねて、二人はそばやに飛び込むと始めてつっぱった足を延した。そば屋の出前持の親切で、円タクを一台頼んでもらうと、二人は約束しておいた新宿の八百屋の二階へ越して行つた。

自動車に乗っていると、全く生きる事に自信が持てなくなった。

ぺしゃんこに疲れ果てゝしまつて、水がやけに飲みたかつた。

「大丈夫よ！ あんな家なんか出て来た方がいゝのよ。自分の意志通りに動けば私は後悔なんてしないよ。」

「元氣を出して働くよ、あんたは一生懸命勉強するといゝわ……。」

私は目を伏せていると、サンサンと涙があふれて、たとえ俊ちゃんの言つた事が、センチメンタルな少女らしい夢のようなことであっても今のたよりない身には、只わけもなく嬉しかった。

あゝ！ 国へ帰ろう……お母さんの胸ん中へ走って帰ろう……自動車の窓から、朝の健康な青空を見た。走って行く屋根を見た。

鉄色にさびた街路樹の梢にしみじみ雀のつぶてを見た。

うらぶれて異土のかたゐとならふとも

故里は遠きにありて思ふもの……

かつてこんな詩を読んで感心した事があつた。

十一月×日

愁々とした風が吹くようになった。

俊ちゃんはあるの御亭主に連れられて樺太に帰ってしまった。

——寒むくなるから……——と云つて、八端のドテラをかたみに置いて東京をたつてしまった。

私は朝から何も食べない。童話や詩を三ツ四ツ売ってみた所で、白いおまんまが、一ケ

月のどへ通るわけでもなかった。

お腹がすくと一緒に、頭がモウロウとして、私は私の思想にもカビを生やしてしまった。あゝ私の頭にはプロレタリアもブルジョアもない。たった一握りの白い握り飯が食べた

い。

いつそ狂人になって街頭に吠えようか。

「飯を食わせて下さい。」

眉をひそめる人達の事を思うと、いつそ荒海のはげしい情熱の中へ身をまかせようか。夕方になると、世俗の一切を集めて茶碗のカチカチと云う音が下から聞えて来る。グウグウ鳴る腹の音を聞くと、私は子供のように悲しくなって、遠くに明い廓の女郎達がふつと羨ましくなった。

沢山の本も今はもう二三冊になって、ビール箱には、善藏の「子を連れて」だの「労働者セイリヨフ」直哉の「和解」がさゝくれてボサリとしていた。

「又、料理店でも行つてかせぐかな。」

ちんとあきらめてしまった私は、おきやがりこぼしのように変にフラフラした体を起し

て、齒ブラシや石鹼や手拭を袖に入ると、風の吹く夕べの街へ出た。

——女給入用——のビラの出ていそうなカフェーを次から次へ野良犬のように尋ねて……只食う為に、何よりもかによりも私の胃の腑は何か固形物を慾しがっていた。

あゝどんなにしても食わなければならない。街中が美味そうな食物じゃあないか！

明日は雨かも知れない。重たい風が漂々と吹く度に、昂奮した私の鼻穴に、すがすがしい秋の果実店からあんなに芳烈な匂いがする。

——一九二八・九——

濁り酒

十月×日

焼栗の声がなつかしい頃になった。

廓を流して行く焼栗のにぶい声を聞いていると、ほろほろと淋しくなつて暗い部屋の中に、私はしょんぼりじつと窓を見ていた。

私は小さい時から、冬になりかけると、よく歯が痛んだ。

まだ母親に甘えている時は、畳に転々泣き叫び、ビタビタの梅干を顔一杯塗つて貰つては、しゃつくりをして泣いていた私だった。

だが、ようやく人生も半ば近くに達し、旅の空の、こうした佗しいカフェーの二階に、歯を病んで寝ていると、じき故郷の野や山や海や、別れた人達の顔を思出す。

水つぼい瞳を向けてお話をするの、様は、歪んだ窓外の漂々としたお月様ばかり……。

「まだ痛む……。」「

そつと上つて来たお君さんの大きいひさし髪が、月の光りで、黒々と私の上におおいかぶさると、今朝から何も食べない私の鼻穴に、ポンと海苔の香をたゞよわせて、お君さんは枕元にそつと寿司皿を置いた。そして黙つて、私のみひらいた目を見ていた。

優しい心づかいだ……。わけもなく、涙がにじんで、薄い蒲団の下からそつと財布を出す
と、君ちゃんは、

「馬鹿ね！」

厚紙でも叩くようなかるい痛さで、お君さんは、ポンと私の手を打つと、蒲団の裾をジ
タジタとおさえてそつと又、裏梯子を降りて行つた。

あゝなつかしい世界だ。

十月×日

風が吹く。

夜明近く水色の細い蛇が、スイスイと地を這っている夢を見た。

それにとぎ色の腰紐が結ばれていて、妙に起るとから、胸さわぎのするようないゝ事が、素的に楽しい事があるような気がする。

朝の掃除がすんで、じつと鏡を見てみると、蒼くむくんだ顔は、生活に疲れ荒さんで、私はあゝと長い溜息をついて、壁の中にでもはいってしまったかった。

今朝も泥のような味噌汁と、残り飯かと思うと、支那そばでも食べたいなあと思った。私は何も塗らない、ぼんやりとした顔を見てみると、急に焦々として、唇に紅々と、ベにを引いてみた。

あの人はどうしているかしら……AもBもCも、切れ掛った鎖をそつと掴もうとしたが、お前達はやっぱり風景の中の並樹だよ……。

神経衰弱になったのか、何枚も皿を持つ事が恐ろしくなった。

のれん越しにすがすがしい朝の盛塩を見ると、女学生の群にけとばされて、さっと散つては山がずるずるとひくくなつて行く。

私が此家に来て二週間、もらいはかなりある。

朋輩が二人。

お初ちゃんと言う女は、名のように初々しくて、銀杏返しのよく似合うほんとに可愛いこだった。

「私は四谷で生れたのだけど、十二の時、よその叔父さんに連れられて、満洲にさらわれて行つたのよ。私芸者屋にじき売られたから、その叔父さんの顔もじき忘れっちまったけど……私その桃千代と云う娘と、よく広いつるつるした廊下をすべりっこしたわ、まるで鏡みたいだった。

内地から芝居が来ると、毛布をかぶって、長靴をはいて見にいったわ、土が凍ってしまふと、下駄で歩けるのよ、だけとお風呂から上ると、鬢の毛がピンとして、おかしいわよ。

私六年ばかりいたけど、満洲の新聞社の人に連れて帰ってもらったのよ。」

客の飲み食いして行つた後の、テーブルにこぼれた酒で字を書きながら、可愛らしいお初ちゃんは、重たい口で、こんな事を云つた。

も一人私より一日早くはいつたお君さんは脊の高い母性的な、氣立のいゝ女だった。

廓の出口にある此店は、案外しつとり落ついていて、私は二人の女達ともじき仲よくなれた。

こんな処に働いている女達は、始めどんな意地悪くコチコチに要心して、仲よくなつてくれなくつても、一度何かのはずみでか、真心を見せると、他愛もなく、すぐまいつてしまつて、十年の知己のように、まるで姉妹以上になつてしまう。

客が途絶えると、私達はよくかたつむりのようにまるくなった。

十一月×日

どんよりとした空。

君ちゃんとさしむかいで、じつとしていると、むかあしかいだ事のある、何か黄ろっぱい花の匂いがする。

夕方、電車通りの風呂から帰って来ると、いつも呑んだくれの大学生の水野さんが、初ちゃんに酒をつがして呑んでいた。

「あんたはとうと裸を見られたわよ。」

お初ちゃんがニタニタ笑いながら、鬢窓に櫛を入れている私の顔を鏡越しに見て、こう言った。

「あんたが風呂に行くとすぐ水野さんが来て、あんたの事聞いたから、風呂って云ったの……」

呑んだくれの大学生は、風のように細い手を振りながら、頭をトントン叩いていた。

「嘘だよ!」

「アラ! 今言ったじゃないの……水野さんてば、電車通りへいそいで行つたから、どうしたのかと、思つてたら、帰つて来て、水野さん、女湯をあけたんですって、そしたら番台でこっちは女湯ですよッ! と言つたつてさ、そしたら、あゝ病院とまちがえましたつてじつとしてたら、丁度あんたが、裸になった処だつて、水野さんそれやあ大喜びなの……」

∴。
」

「へん！ 随分助平な話ね。」

私はやけに頬紅をはくと、大学生は薄いコンニャクのような手を合わせて、

「怒った？ かにんしてね！」

裸が見たけりやあ、お天陽様の下に真裸で転って見せるよッ！ とよっぽど、吐鳴ってやりたかった。

一晚中気分が重つくるしくつて、私はうで卵を七ツ八ツパッチンパッチンテーブルへぶっつけてわった。

十一月×日

秋刀魚を焼く匂いは季節の呼び声だ。

夕方になると、廊の中は今日も秋刀魚の臭い、お女郎は毎日秋刀魚じゃあ、体中うろこが浮いてくるだろう……

夜霧が白い白い、電信柱の細っこい姿が針のように影を引いて、のれんの外にたつて、ゴウゴウ走って行く電車を見ていると、なぜかうらやましくなって鼻の中がジンと熱くなる。

蓄音器のこわれたゼンマイは昨日もかつぽれ今日もかつぽれだ。

生きる事が実際退屈になった。

こんな処で働いていると、荒さんで荒さんで、私は万引でもしたくなる。女馬賊にでもなりたくなる。

インバイにでもなりたくなる。

若い姉さんなぜ泣くの

薄情男が恋ひしいの……

誰も彼も、誰も彼も、ワツハ！　ワツハ！　あゝ地球よパンパンと真二つになれツ、私を嘲笑っている顔が幾つもうようよしてゐる。

「キングオブキングを十杯飲んでごらん、拾円のかけだ！」

どつかの呑気坊主が、厭にキンキラ顔を光らせて、いれずみのような拾円札を、ピラリツとテーブルに吸いつかせた。

「何でもない事だ！」

私はあさましい姿を白々と電気の下に晒して、そのウイスキーを十杯けろりと呑み干した。

キンキラ坊主は呆然と私を見ていたが、負けおしむくさい笑いを浮べて、おうように消えてしまった。

喜んだのはカフエーの主人ばかり、へえへえ、一杯一円のキングオブを十杯もあの娘が呑んでくれたんですからね……ペツペツペツだ。ツバを吐いてやりたいね。

瞳が炎える。

誰も彼も憎い奴ばかりだ。

あゝ私は貞操のない女でござんす。一ツ裸踊りでもしてお目にかかけましょうか、お上品

なお方達、へえ、てんでに眉をひそめて、星よ月よ花よか！

私は野そだち、誰にも世話にならないで生きて行こうと思えば、オイオイ泣いてはいられない。男から食わしてもらおうと思えば、私はその何十倍か働かねばならない。

眞実同志よと叫ぶ友達でさえ嘲笑う。

歌をきけば梅川よ

しばし情を捨てよかし

いづこも恋にたはむれて

それ忠兵衛の夢がたり

詩をうたつて、いゝ気持で、私はかざり窓を開けて夜霧をいっぱい吸った。あんな安っぽい安ウイスキー十杯で酔うなんて……あああの夜空を見上げて御覧、絢爛がかゝったな、虹がかゝった。

君ちゃんが、大きい目をして、それでいゝのか、それで胸が痛まないのか、貴女の心のためはせぬかと、私をグイグイ掴んでいる。

やさしや年もうら若く

まだ初恋のまぢりなく

手に手をとりにて行く人よ

なにを隠るるその姿

かつて好きだった歌ほれば涙におぼれて、私の体と心は遠い遠い地の果にず……とあとしざりしでした。

そろそろ時計のねじがゆるみ出すと、れいの月はおぼろに白魚の声色屋のこまちやくれた子供が、

「ねえ旦那！ おぼしめしで……ねえ旦那おぼしめしで……。」

もうそんな影のうすい不具なんか出してしまいなさい！

何だかそんな可憐な子供達のさゝくれたお白粉の濃い顔を見ると、たまらない程、私も誰かにすがりつきたくなった。

十一月×日

奥で三度三度御飯を食べると、きげんが悪いし、と云って客におごらせる事は大きらいだ。

二時がカンバンだつて云つても、遊廓がえりの客がたてこむと、夜明までも知らん顔をして主人はのれんを引つこめようもしない。

コンクリートのゆかが、妙にビンビンして動脈がみんな凍つてしまいそうに肌が粟立つてくる。

酔っぱい酒の匂いがムンムンして焦々する。

「厭になつてしまうわ……。」

初ちゃんは袖をビールでビタビタにしたのをしぼりながら、呆然とつつ立っていた。

「ビール！」

もう四時も過ぎて、ほんとになつかしく、遠くの方で鶏の鳴く声がする。

コケコツコオ！　ゴトゴト新宿駅の汽車の汽笛が鳴ると、一番最後に、私の番で、銀流しみたいな男がはいって来た。

「ビールだ！」

仕方なしに、私はビールを抜くと、コップに並々とついだ。厭にトゲトゲと天井ばかりみていた男は、その一杯のビールをグイと呑み干すと、いかにも空々しく、

「何だ！　ゑびすか、気に喰わねえ。」

捨ぜりふを残すと、いかにもあつさりと、霧の濃い舗道へ出てしまった。啞然とした私は、急にムカムカとすると、のこりのビールびんをさげて、その男の後を追った。

銀行の横を曲ろうとしたその男の黒い影へ私は思い切りビールびんをハッシと投げつけた。

「ビールが呑みたきや、ほら呑ましてやるよッ。」

けたゝましい音をたてゝ、ビールびんは、思い切りよく、こなごなにこわれて、しづきが飛んだ。

「何を！」

「馬鹿ッ！」

「俺はテロリストだよ。」

「へえ、そんなテロリストがあるの……案外つままないテロリストだね。」

心配して走って来たお君ちゃんや、二三人の自動車の運転手達が来ると、面白いテロリ

ストはボアンと路地の中へ消えてしまった。

こんな商売なんて止めようかなア……。

それでも、北海道から来たお父さんの手紙には、御難つゞきで、今は帰る旅費もないから、送ってくれと云う長い手紙を読んだ、寒さにはじきへこたれるお父さん、どんなにしても四五十円は送ってあげよう。

も少し働いたら、私も北海道へ渡って、お父さん達といっそ行商してまわってみようか……。

のりかゝった船だよ。

ポツポツ湯気のたつおでん屋の屋台に首を突込んで、箸につみれを突きさした初ちゃんが店の灯を消して一生懸命茶飯をたべていた。

私も昂奮した後のふるえを沈めながら、エプロンを君ちゃんにはずしてもらおうと、おでんを肴に、寝しなの濁り酒を楽しんだ。

——一九二八・一二——

一人旅

十二月×日

浅草はいゝ。

浅草はいつでもよいところだ……。

テンポの早い灯の中をグルリ、グルリ、私は放浪のカチウシヤ。

長い事クリームを塗らない顔は瀬戸物のように固くって安酒に酔った私は誰もおそろしいものがない。

テヘ！ 一人の酔いどれ女でござんす。

酒に酔えば泣きじょうご、痺れて手も足もばらばらになってしまいそうなこのいゝ気持。

酒でも呑まなければあんまり世間は馬鹿らしくて、まともな顔をしては通れない。

あの人が外に女が出来たとて、それが何であろ、真実は悲しいんだけど、酒は広い世間を御らんと云う。

町の灯がふつと切れて暗くなると、活動小屋の壁に歪んだ顔をくつつけて、あゝあすら勉強しようと思う。

夢の中からでも聞えて来るような小屋の中の楽隊にあんまり自分が若すぎて、なぜかやけくそにあいそがつきてしまう。

早く年をとつて、いゝものが書きたい。

年をとる事はいゝな。

酒に酔いつぶれている自分をふいと見返ると、大道の猿芝居じゃないが、全く頬かぶりして歩きたくなる。

浅草は酒を呑むによいところ。

浅草は酒にさめてもよいところだ。

一杯五錢の甘酒！ 一杯五錢のしる粉！ 一串二錢の焼鳥は何と肩のはらない御馳走だろ……。

漂々と吹く金魚のような芝居小屋の旗、その旗の中にはかつて愛した男の名もさらされて、わっは……わっは……あのいつもの声で私を嘲笑している。

さあ皆さん御きげんよう……何年ぶりかで見上げる夜空の寒いこと、私の肩掛は人絹がまざっているのでござります。他人が肩に手をかけたように、スイスイと肌に風が通りますよ。

十二月×日

朝の寢床の中で、まず煙草をくゆらす事は淋しがりの女にとって此上もないよきなくさめ、ゆらりゆらり輪をかいて浮いてゆくむらさき色のけむりはいゝ。お天陽様の光りを頭いっぱいあびて、さて今日はいゝ事がありますように。

赤だの黒だの桃色だの黄いろだの疲れた着物を三畳の部屋いっぱいぬぎちらして、女一

人のきやすさに、うつらうつら私はひだまりの亀の子。

カフエーだの牛屋だのめんどくさい事より、いつそ屋台でも出しておでん屋でもしようか。誰が笑おうと彼が悪口を云おうと、赤い尻からげで、あら、えっさっさだ！ 一ツ屋台でも出して何とか此年のけじめをつけよう。

コンニャク、いゝね厚く切ってピンとくいちぎって見たい……がんどき竹輪につみれ、辛子のひりゝツとした奴に、口にふくむような酒をつかつて、青々としたほうれん草のひたしか……元氣を出そう。

或ところまで来るとペツチャンコにくずれてしまう、たとえそれがつまらない事だつても、そんな事の空想は、子供のようにうれしくなる。

貧乏な父や母にすぎるわけにもゆかないし、と云つて転々と動いたところで、月に本が一二冊買えるきり、わけもなく飲んで食つて通つてしまう。三畳の間をかりて最少限度の生活はしていても貯えもかぼそくなつてしまった。

こんなに生活方針がたゞなく真暗闇になると、泥棒にでもはいりたくなる。だが目が近いのでいっぺんにつかまってしまふ事を思うと、ふいとおかしくなって、冷い壁にカラカラと私の笑いがはねかえる。

何とかして金がほしい……私の濁った錯覚は他愛もなく夢におぼれて、夕方までぐっすりねむってしまった。

十二月×日

お君さんが誘いに来て、二人は又何かいゝ商売をみつけようと、小さい新聞の切抜きをもつて、私達は横浜行きの省線に乗った。

今まで働いていたカフェーが淋びれると、お君さんも一緒にそこを止めてしまつて、お君さんは、長い事板橋の御亭主のそこへ歸つていた。

お君さんの御亭主はお君さんより卅あまりも年が上で、始め板橋のその家へたずねて行つた時、私はお君さんのお父つあんかと思つた。お君さんの養母やお君さんの子供や何だ

かごたごたしたその家庭は、めんどくさがりやの私にはちよいとわかりかねた。

お君さんもそんな事はだまっている。

私もそんな事を聞くのは腹がいたくなる。二人共だまって、電車から降りると、青い青い海を見はらしながら丘へ出た。

「久し振りよ海は……。」

「寒いけど……いゝわね海は……。」

「いゝとも、こんなに男らしい海を見ると、裸になって飛びこんでみたいね。まるで青色がとけてるようじゃないか。」

「ほんと！ おっかないわ……。」

ネクタイをひらひらさせた二人の西洋人が、雁木に腰をかけて波の荒い風景にみいつていた。

「ホテルってあすこよー！」

目のはやい君ちゃんがみつけたのは、白いあひるの小屋のような小さな酒場だった。二

階の歪んだ窓には汚点だらけな毛布が青い太陽にてらされて、いいようのない幻滅だった。

「かえろう！」

「ホテルってこんなの……。」

朱色の着物を着た可愛らしい女が、ホテルのポーチで黒い犬をあやして一人でキャツキヤツ笑っていた。

「がっかりした……。」

二人共又おしだまって向うの向うの寒い茫々とした海を見た。

鳥になりたい。

小さいカバンでもさげて旅をするといっだろう……君ちゃんの日本風なひさし髪が風に
あれて、雪の降る日の柳のようにいじらしく見えた。

十二月×日

風が鳴る白い空だ

冬のステキに冷い海だ

狂人だってキリキリ舞いをして

目のさめそうな大海原だ
四国まで一本筋の航路だ

毛布が二十銭お菓子が十銭

三等客室はくたばりかけたどじょう鍋のように
ものすごいフットウだ

しぶきだ雨のようなしぶきだ

みはるかす白い空を眺め

十一銭在中の財布を握っていた。

あゝバットでも吸いたい

オオ！ と叫んでも

風が吹き消して行くよ

白い大空に

私に酔を吞ませた男の顔が

あんなに大きく、あんなに大きく

あゝやっぱり淋しい一人旅だ！

腹の底をゆるするような、ボオウ！　ボオウ！　と鳴る蒸汽の音に、鉛色によんだ小さな渦巻が幾つか海のあなたに、一ツ一ツ消えて唸りをふくんだ冷い十二月の風が、乱れた私の銀杏返しの鬢を、ペツシャンと頬つぺたにくつつけるように吹いてゆく。

八ツ口に両手を入れて、じつと自分の乳房をおさえていると、冷い乳首の感触が、わけもなく甘つぽく涙をさそってくる。

——あゝ、何もかにもに負けてしまった！

東京を遠く離れて、青い海の上をつっぱしっていると、色々に交渉のあつた男や女の顔が、一ツ一ツ白い雲の間からもれもれと覗いて来る。

あんまり昨日の空が青かったので、久し振りに、故里が恋しく、私は無理矢理に汽車に乗ってしまった。

今朝はもう鳴門の沖だ。

「お客さん！ 御飯ぞなッ！」

誰もいない夜明けのデッキの上に、さゝけた私の空想はやっぱり故里へ背いて都へ走っていた。

旅の故里ゆえ、別に錦を飾って帰る必要もないのだったが、なぜか佻しい気持ちでいっぱいだった。

穴倉のように暗い三等船室に帰って、自分の毛布の上に座ると丹塗りのはげた、膳の上にヒジキの煮たのや味噌汁があじけなく並んでいた。

薄暗い灯の下に大勢の旅役者やおへんろさんや、子供を連れた漁師の上さんの中に混つて、私も何だか愁々とした旅心を感じた。

私が銀杏返しに結っているの、「どこからお出でした？」と尋ねるお婆さんもあれ

ば、「どこまで行きやはりますウ……。」「と問う若い男もあつた。

二ツ位の赤ん坊に添い寝していた、若い母親が、小さい声で旅の故里でかつて聞いた事のある子守唄をうたっていた。

ねんねころ市

おやすみなんしよ

朝もとうからおきなされ

よひの浜風ア身にしみますで

夜サは早よからおやすみよ……。

やつぱり旅はいゝ。あの濁った都会の片隅でへこたれているより、こんなにさつぱりした気持になって、自由にのびのび息を吸える事は、あゝやつぱり生きている事もいいなと思う。

十二月×日

真黄ろに煤けた障子を開けて、ボアツボアツと消えてはどんどん降ってる雪をじっと見ていると、何もかも一切忘れてしまう。

「お母さん！　今年は随分雪が早いね。」

「あゝ」

「お父さんも寒いから難儀しているでしょうね。」

北海道に行つてもう四ヶ月あまり、遠くに走りすぎて商売も思うようになく、四国へ帰るのは来春だと云う父のたよりが来てこつちも随分寒くなった。

屋並の低い徳島の町も、寒くなるにつれ、うどん屋のだしを取る匂いが濃くなって、町を流れる川の水がうつすらと湯気を吐くようになった。

泊る客もだんだん少くなると、母は店の行灯へ灯を入れるのを渋ったりした。

「寒うなると人が動かんけんのう……。」

しつかりした故郷をもたない私達親子三人が、最後に土についたのが徳島だった。女の美しい、川の綺麗なこの町隅に、古ぼけた旅人宿を始めて、私は一年徳島での春秋を迎えた事がある。

だがそれも小さかった私……今はもう、この旅人宿も荒れほうだいに荒れ、母一人の内職仕事になってしまった。

父を捨て、母を捨て、長い事東京に放浪して疲れて帰った私も、昔のたどたどしい恋文や、ひさし髪の大きかった写真を古ぼけた筆笥の底にひっくり返してみると懐しい昔のいゝ夢が段々蘇って来る。

長崎の黄ろいちちゃんぽんうどんや尾道の千光寺の桜や、二ユ川で覚えた城ヶ島の唄や、あゝみんないゝ！

絵をならい始めた頃の、まずいデッサンの幾枚かゝ、茶色にやけて、納戸の奥から出て来ると、まるで別な世界だった私を見る。

夜炬燵にあたっていると、店の間を借りている月琴ひきの夫婦が漂々と淋しい唄をうたつては、ピンピン昔つぽい月琴をひゞかせていた。

外はシラシラと音をたてゝみぞれまじりの雪が降っている。

十二月×日

久し振りに海辺らしいお天気。

二三日前から泊りこんでいる、浪花節語りの夫婦が、二人共黒いしかん巻を首にまいて朝早く出て行くと、もう煤けた広い台所には鰯を焼いている母と私と二人きり。

あゝ田舎にも退屈してしまった。

「お前もいゝかげんで、遠くい行くのを止めてこつちで身をかためてはどうかい……お前をもらいたいと云う人があるぞな……。」

「へえ……どんな男！」

「実家は京都の聖護院の煎餅屋でな、あととりやけど、今こつちい来て市役所へ務めておるがな……いゝ男や。」

「……………」

「どや……」

「会うてみようか、面白いな。」

何もかもが子供っぽくゆかいだった。

田舎娘になって、おぼこらしく顔を赤めてお茶を召し上れか、一生に一度はこんな芝居もあつてもいゝ。

キイラリ キイラリ、車井戸のつるべを上げたりさげたりしていると、私も娘のように心がはずんで来る。

あゝ情熱の毛虫、私は一人の男の血をいたちのように吸いつくしてみたいような気がする。

男の肌は寒くなると蒲団のように恋しくなるものだ。

東京へ行こう！

夕方の散歩に、いつの間にか足が向くのは駅。駅の時間表を見ると涙がにじんで来る。

十二月×日

赤靴のひもといてその男が上つて来ると、妙に胃が悪くなりそうで、私は真正面から眉をひそめてしまった。

「あんたいくつ……。」

「僕ですか、廿二です。」

「ホウ……じゃ私の方が上だわ。」

げじげじ眉で、唇の厚いその顔を何故か、見覚えがあるようで、考え出せなかったが、ふと、私は急に明るくなれて、口笛でもヒュヒュと吹きたくなった。

月のいゝ夜だ、星が高く流れている。

「そこまでおくつてゆきましようか……。」

此男は妙によゆうのある風景だ。

入れ忘れてしまった国旗の下をくぐって、月の明るい町に出ると濁った息をフツと一時に吐く事が出来た。

一丁来ても二丁来ても二人共だまって歩いた。川の水が妙に悲しく胸に来て私自身が浅ましくなった。

男なんて皆火を焚いて焼いてしまえ。

私はお釈迦様にでも恋をしよう……ナムアミダブツのお釈迦様は、妙に色ツぽい目をして、私の此頃の夢にしのでいらつしやる。

「じゃあさよなら、あんたもいゝお嫁さんおもちなさいね。」

「ハア？」

いとしの男よ、田舎の人はいゝ。私の言葉がわかったのか、わからないのか、長い月の影をひいて隣りの町へ消えてしまった。

明日こそ荷づくりして旅立とう……。

久し振りに家の前の三のついたお泊り宿の行灯を見ると、不意に頭をどやしつけられたようにお母さんがいしくなつて、私はかたぶいた梟の瞳のような行灯をみつめていた。

「寒いとう……酒でも呑まんかいや。」

茶の間で母と差しむかいで、一合の酒にいゝ気持ちになつて、親と云うものにふと気がついた。親子はいゝな、こだわりのない気安さで母の多いしわを見た。

鼠の多い煤けた天井の下に、又母を置いて去るのは、いじらしく可哀想になつてしまった。

「あんなもん、厭だねえ。」

「気立はいゝ男らしいがな……」

淋しい喜劇！

東京の友達がみんな懐しがつてくれるような手紙を書こう。

——一九二八・一二——

古創

一月×日

海は真白でした

東京へ旅立つその日

青い蜜柑の初なりを籠いっぱい入れて

四国の浜辺から天神丸に乗りました。

海はきむずかしく荒れていましたが

空は鏡のように光って

人參灯台の紅色が瞳にしみる程あかいのです。

島でのメンドクサイ悲しみは

すっぱり捨てゝしまおうと

私はキリのように冷い風をうけて
遠く走る帆船をみました。

一月の白い海と

初なりの蜜柑の匂いは

その日の私を

売られて行く女のようにさぶしくしました。

一月×日

おどろおどろした雪空だ。

朝の膳の上は白い味噌汁に、高野豆腐に黒豆、何もかも水っぽい舌ざわりだ。東京は悲しい思い出ばかり、いつそ京都か大阪で暮らしてみよう……。

天保山の安宿の二階で、ニャーゴニャーゴ鳴いている猫の声を寂しく聞きながら私は寝そべっていた。

あゝこんなにも生きる事はむずかしいものか……私は身も心も困憊しきっている。

潮たれた蒲団はまるで、魚の腸のようにズルズルに汚れていた。

ビュン！　ビュン！　風が海を叩いて、波音が高い。

からつぽな女は私でございます……生きてゆく才もなければ、生きてゆく富もなければ生きてゆく美しさもない。

さて残ったものは血の多い体ばかり。

私は退屈すると、片方の足を曲げて、キリキリと座敷の中をひとまわり。

長い事文字に親しまない目には、御一泊壺円よりと白々しく壁に張られた文句をひろい読みするばかりだった。

夕方——ボアリボアリ雪が降った来た。

あつちをむいても、こつちをむいても旅の空、もいちど四国の古里へ逆もどりしようか、とても淋しい鼠の宿だ。

——古創や恋のマントにむかひ酒——

お酒でも楽しんでじつとしていたい晩だ。

たった一枚のハガキをみつめて、いつからか覚えた俳句をかきながら、東京の沢山の友達の顔を思い浮べた。

皆自分に急がしい人ばかりの顔だ。

ボオウ！　ボオウ！　汽笛の音を聞くと、私はいつぱいに窓を引きあけて雪の夜の沈んだ港に呼びかけた。

青い灯をともした船がいくつもねむっている。

お前も私もヴァガボンド。

雪々雪が降っている。考えても見た事のない、遠くに去った初恋の男が急に恋いしくなつて来た。

こんな夜だった。

あの男は城ヶ島の唄をうたった。

沈鐘の唄もうたった。なつかしい尾道の海はこんなに波は荒くはなかった。

二人でかぶったマントの中で、マツチをすりあわして、お互いに見あった顔、一度のベエゼも交した事もなく、あつけない別離だった。

一直線に墜落した女よ！　と云う最後のたよりを受取ってもう七年にもなる。あの男は、ピカソの画を論じ槐多の詩を愛していた。

これでもかッ！　まだまだ、これでもかッ！　まだまだ、私の頭をどやしつけている強い手の痛さを感じた。

どつかで三味線の音がする。私は呆然と座り、いつまでも口笛を吹いていた。

一月×日

さあ！　素手でなにかもやりなおしだ。

市の職業紹介所の門を出ると、私は天満行きの電車に乗った。

紹介された先は毛布の間屋で、私は女学校卒業の女事務員、どんよりと走る街並を眺めながら、私は大阪も面白いなと思った。

誰も知らない土地で働く事もいゝじやないか、枯れた柳の木が腰をもみながら、河筋にゆれている。

毛布問屋は案外大きい店だった。

奥行きの深い、間口の広いその店は、丁度貝のように暗くて、働いている七八人の店員達は病的に蒼い顔をして、急がしく立ち働いていた。

随分長い廊下だった。何もかにもピカピカと手入れの行きとどいた、大阪人らしいこのみのこじんまりした座敷に私は始めて、老いた女主人と向きあつた。

「東京から、どうしてこっちやいお出でやしたん？」

出鱈目に原籍を東京にしてしまった私は、一寸どう云つていいかわからなかった。

「姉がいますから……。」

こんな事を云つてしまった私は、又いつものめんどくさい気持になつてしまった。断られたら断られたまでの事だ。

おっとりした女中が、美しい菓子皿とお茶を運んで来た。

久しくお茶にも縁が薄く、甘いものも長い事口にしなかった。

世間にはこうしたなごやかな家もある。

「一郎さん！」

女主人が静かに呼ぶと、隣の部屋から、息子らしい落ちつきのある廿五六の男が、棒のようにはいつて来た。

「この人が来ておくれやしたんやけど……。」

役者のように細々としたその若主人は光った目で私を見た。

私はなぜか恥をかきに来たような気がして、ジンと足が痺れて来た。あまりに縁遠い世界だ。

私は早く引きあげたい気持でいっぱいだった。

天保山の船宿に帰った時は、もう日も暮れて、船が沢山はいていた。

東京のお君ちゃんからのハガキ一枚。

——何をぐずぐずしているの、早くいらっしやい。面白い商売があります。——どんなに不幸な目にあつていても、あの人は元気がいゝ。久し振に私もハツラツとなる。

一月×日

駄目だと思つていた毛布問屋に務める事になった。

五日振りに天保山の安宿をひきあげて、バスケット一つの漂々とした私は、もらわれて行く犬の子のように、毛布問屋に住み込む事になった。

昼でも奥の間には、ポンポロ ポンポロ音をたてゝガスの灯がついている。漠々としたオフィスの中で、沢山の封筒を書きながら、私はよくわけのわからない夢を見た。そして何度もしくじっては自分の顔を叩いた。

あゝ幽霊にでもなりそうだ。

青いガスの灯の下でじつと両手をそろえてみると爪の一ツ一ツが黄に染って、私の十本の指は蚕のように透きとおって見える。

三時になると、お茶が出て、八ツ橋が山盛り店へ運ばれて来る。

店員は皆で九人居た。その中で小僧が六人皆配達に行くので、誰が誰やらまだ私にはわからない。

女中は下働きのお国さんと上女中のお糸さん二人。

お糸さんは昔の（御殿女中）みたいに、眠ったような顔をしていた。

関西の女は物ごしが柔らかで、何を考えているのだからさっぱり判らない。

「遠くからお出やして、こんなとこしんきだつしやろ……。」

お糸さんは引きつめた桃割れをかしげて、キュキュ糸をしごきながら、見た事もないような昔しつぽい布を縫っていた。

若主人の一郎さんには、十九になるお嫁さんがある事もお糸さんが教えてくれた。

そのお嫁さんは市岡の別宅の方にお産をしに行っているとかで、家はなにか気が抜けたように静かだった。

夜の八時にはもう大戸を閉めてしまつて、九人の番頭や小僧さん達が皆どこへひっこむのか、一人一人居なくなつてしまふ。

のりのよくきいた固い蒲団に、のびのびといたわるように両足をのぼして、じつと天井を見ていると、自分がしみじみ、あわれにみすばらしくなつて来る。

お糸さんとお国さんの一緒に寢床に、高下駄のような感じの黒い箱枕がちゃんと二ツならんで、お糸さんの赤い胴抜きのした長襦袢が蒲団の上に投げ出されてあつた。

私はまるで男のような気持ちで、その赤い長襦袢をいつまでもみていた。しまい湯をつ

かっている、二人の若い女は笑い声一つたてないで、ピチャピチャ湯音をたてゝいる。

あの白い生毛のたったお糸さんの美しい手にふれてみたい気がする、私はすっかり男になりきった気持で、赤い長襦袢を着たお糸さんを愛していた。

あゝ私が男だったなら世界中の女を愛してやったらうに……沈黙った女は花のように匂いを遠くまで運んで来るものだ。

泪のにじんだ目をして、まぼしい灯に私は額をそむけた。

一月×日

朝の芋がゆにも馴れてしまった。

東京で吸う、赤い味噌汁はいゝな、里芋のコロコロしたのを薄く切って、小松菜と一緒にいたいた味噌汁はいゝな。荒巻き鮭の一片一片を身をはがして食べるのも甘味い。

大根の切り口みたいなお天陽様ばかり見ていると、塩辛いおかずでもそえて、甘味しい茶漬けでも食べてみたいと、事務を取っている私の空想は、何もかも淡々しく子供っぽくなっている。

雪の頃になると、いつも私は足指に霜やけが出来て困った。

夕方、荷箱をうんと積んである蔭で、私は人にかくれて思い切り足をかいた。赤く指がほてって、コロコロにふくれあがると、針でも突きさしてやりたい程切なくて仕様がなかった。

「ホウ……えらい霜やけやなあ。」

番頭の兼吉さんが驚いたように覗いていた。

「霜やけやったら、煙管でさすったら一番や。」

若い番頭さんは元気よくすぽんと煙草入れの筒を抜くと、何度もスパスパ吸っては火ぶくれたような赤い私の足指を煙管の頭でさすってくれた。

もうけ話ばかりしているこんな人達の間にもこんな真心がある。

二月×日

「お前は七赤金星で金は金でも、金屏風の金だから小綺麗な仕事をしなけりや駄目だよ。」
よく母がこんな事を云っていたが、こんなお上品な仕事はじきに退屈してしまう。

あきつぽくって、気が小さくて、じき人にまいてしまつて、わけもなくなじめない私のさかの淋しさ……あゝ誰もいないところで、ワアツ！ と叫びあがりたい程、焦々する。いゝ詩をかこう。

元氣な詩をかこう。

只一冊のワイルド・プロフォデイスにも楽しみをかけて読む。

——私は灰色の十一月の雨の中を嘲けり笑うモツブにとり囲まれていた。

——獄中にある人々にとっては涙は日常の経験の一部分である。人が獄中にあつて泣かない日は、その人の心が堅くなっている日で、その人の心が幸福である日ではない。

夜々の私の心はこんな文字を見ると、まことに痛んでしまう。

お友達よ！ 肉親よ！ 隣人よ！ わけのわからない悲しみで正直に私は私を嘲笑うモツブが恋いしくなつた。

お糸さんの恋愛にも祝福あれ！

夜、風呂にはいつてじつと天窓を見ていると、キラキラ星がこぼれていた。忘れかけたものをふつと思ひ出したように、つくづく一人ぼっちで星を見た。

老いぼれた私の心に反比例して、肉体のこの若さよ。赤くなった腕をさしのべて風呂いっぱいに体をのぼすと、ふいと女らしくなつて来る。

結婚しよう！

私はしみじみとお白粉の匂いをかいだ。眉もひき、口唇も濃くぬつて、私は柱鏡のなかの幻にあどけない笑顔をこしらえてみた。

青貝の櫛もさして、桃色のでがらもかけて鬘も結んでみたい。

弱きものよ汝の名は女なり、しよせんは世に汚れた私でゐいます。美しい男はないものか……。

なつかしのプロヴァンスの歌でもうたいましようか、胸の燃えるような思いで私は風呂桶の中に魚のようになつてみた。

二月×日

街は春の売出しで赤い旗がいっぱい。

女学校時代のお夏さんの手紙をもらって、私は何もかも投げ出して京都へ行きたくなくなった。

——随分苦勞なすったんでしよう……と云う手紙を見ると、いゝえどういたしまして、優しいお嬢さんのたよりは、男でなくてもいゝものだ、妙に乳くさくて、何かぷんぷんいゝ匂いがする。

これが一緒に学校を出たお夏さんのたよりだ。八年間の年月に、二人の間は何百里もへだたってしまった。

お嫁にも行かないで、じつと日本画家のお父さんのいゝ助手として孝行しているお夏さん！

泪の出るようないゝ手紙だ。ちつとでも親しい人のそばに行って色々の話を聞いてもらおう——。

お店から一日ひまをもらうと、鼻頭がジンジンする程寒い風にさからって、京都へ立った。

午後六時二十分。

お夏さんは黒いフクフクとした、肩掛に蒼白い顔をうずめて、むかえに出てくれた。

「わかった？」

「ふん。」

沈黙つて冷く手を握りあつた。

赤い色のかつた服装を胸に描いて来た私にお夏さんの姿は意外だった。まるで未亡人か何かのように、何もかも黒っぽい色で、唇だけがぐいと強よく私の目を射た。

椿の花のように素的にいゝ唇。

二人は子供のようにしつかり手をつなぎあつて、霧の多い京の街を、わけのわからない事を話しあつて歩いた。

昔のまゝに京極の入口には、かつて私達の胸をさわがした封筒が飾窓に出ている。

くだらなくと京極の街を降りると、横に切れた路地の中に、菊水と云ううどんやを見つけて私達は久し振りに明るい灯の下に顔を見合わせた。私は一人立ちしていても貧乏、お夏さんは親のすねかじりで勿論お小遣もそんなにないので、二人は財布を見せあいながら、

狐うどんを食べた。

女学生らしいあけっぱなしの気持で、二人は帯をゆるめてはお変りをしては食べた。

「貴女ぐらいよく住所の変る人ないわね、私の住所録を汚して行くのはあんた一人よ。」

お夏さんは黒い大きな目をまたゝきもさせないで私を見た。

甘えたい気持でいっぱい。

丸山公園の噴水にもあいてしまった。

二人はまるで恋人のようによりそって歩いた。

「秋の鳥辺山はよかつたわね。落葉がしていて、ほら二人でおしゅん伝兵衛の墓にお参りした事があつたわね……。」

「行ってみようか！」

お夏さんは驚いたように瞳をみはった。

「貴女はそれだから苦労するのよ。」

京都はいゝ街だ。

夜霧がいつぱいたちこめた向うの立樹のところで、キビツキビツ夜鳥が鳴いている。

下鴨のお夏さんの家の前が丁度交番になっていて、赤い灯がポツカリとついていた。

門の吊灯笼の下をくぐって、そつと二階へ上ると、遠くの寺でゆっくり鐘を打つのが響いて来る。

メンドウな話をくどくどするより、沈黙つてよう……お夏さんが火を取りに下に降りると、私は窓に凭れて、しみじみ大きいあくびをした。

百面相

四月×目

地球よパンパンとまつぶたつに割れてしまえ！ と怒鳴ったところで、私は一匹の烏猫、世間様は横目で、お静かにお静かにとおつしやる。

又いつもの淋しい朝の寢覚め、薄い壁に掛った、黒い洋傘を見ていると、色んな形に見える。

今日も亦此男は、ほがらかな桜の小道を、我々プロレタリアートよなんて、若い女優と手を組んで、芝居のせりふを云いあいながら行く事であろう。

私はじつと脊を向けて寝ている男の髪の毛を見ていた。

あゝこのまゝ蒲団の口が締って、出られないようにしたら……。

——やい白状しろ！——なんて、こいつにピストルでも突きつけたら、此男は鼠のよう

にキリキリ舞いしてしまうだろう。

お前は高が芝居者じゃあないか。インテリゲンチヤのたいこもちになって、我々同志よ！ もみつともない。

私はもうお前にはあいそがつきてしまった。

お前さんのその黒い鞆には、二千円の貯金帳と、恋文が出たがって、両手を差出していたよ。

「俺はもうじき食えなくなる。誰かの一座にでもはいればいゝけど……俺には俺の節操があるし。」

私は男にとっても甘い女です。

その言葉を聞くと、サンサンと涙をこぼして、では街に出ましようか。

そして私は此四五日、働く家をつきに、魚の腸のように疲れては帰って来ていたのに……此嘘突き男メ！ 私はいつもお前が用心して鍵を掛けているその鞆を、昨夜そつと覗いてみたのだよ。

二千円の金額は、お前さんが我々プロレタリアと言っている程少くもなからう。

私はあんなに美しい涙を流したのが莫迦らしくなった。

二千円と、若い女優がありや、私だったら当分長生きが出来る。

あゝ浮世は辛うござりまする。

こうして寝ているところは円満な御夫婦、冷い接吻はまっぴらだよ。

お前の体臭は、七年も連れそった女房や、若い女優の匂いでいっぱいだ。

お前はそんな女の情慾を抱いて、お務めに私の首に手を巻いてくる。

どいておくれよッ！

淫売でもした方が、気づかれがなくて、どんなにいゝか知れやしない。

私は飛びおきると男の枕を蹴つてやった。嘘突きメ！ 男は炭団のようにコナゴナに崩れていった。

ランマンと花の咲き乱れた四月の空は赤旗だ、地球の外には、颯々として熱風が吹きこぼれて、オーイオーイ見えないよび声が四月の空に弾けている。

飛び出してお出でよッ！

誰も知らないところで働きましょう。茫々として霞の中に私は太い手を見た。真黒い腕を見た。

四月×日

一度はきやすめ二度は嘘

三度のよもやにしかされて……

憎らしい私の煩惱よ、私は女でございました。やっぱり切ない涙にくれます。

鶏の生胆に

花火が散つて夜が来た

東西！ 東西！

そろそろ男との大詰が近づいたよ

一刀両断に切りつけた男の腸に

メダカがぴんぴん泳いでいた

臭い臭い夜だよ

誰も居なけりや泥棒にはいますぞ！

私は貧乏故男も逃げて行きました

あゝ真暗い頬かぶりの夜だよ。

土を凝視めて歩いていると、しみじみ悲しくて、病犬のようにふるえて来る。なにくそ！　こんな事じゃあいけないね。

美しい街の舗道を今日も私は、——女を買ってくれないか、女を売ろう……と野良犬のように彷徨した。

引き止めても引き止まらない、切れたがるきずなならば此男ともあつさり別れよう……。

窓外の名も知らぬ大樹の、たわゝに咲きこぼれた白い花に、小さい白い蝶々が群れて、いゝ匂いがこぼれて来る。

夕方、お月様に光った縁側に出て男の芝居のせりふを聞いていると、少女の日の思い出が、ふつと花の匂いのように横切つて、私も大きな声で——どっかにいゝ男はいないか！とお月様に怒鳴りたくなつた。

此男の当り芸は、かつて芸術座の須磨子とやった剃刀と云う芝居だった。

私は少女の頃、九州の芝居小屋で、此男の剃刀を見た事がある。

須磨子のカチウシャもよかった。あれからもう大分時がたつ、此男も四十近い年だ。

「役者には、やっぱり役者のお上さんがいゝんですよ。」

一人稽古をしている、灯に写った男の影を見ていると、やっぱり此男も可哀想だと思わずにはいられない。

紫色のシェードの下に、台本をくつている男の横顔が、絞って行くように、私の目から遠のいてしまう。

「旅興行に出ると、俺はあいつと同じ宿をとった、あいつの鞆も持ってやったつけ……でもあいつは俺の目を盗んでは、寝巻きのまゝあの男の宿へ忍んで行っていた。

俺はあの女を泣かせる事に興味を覚えていた。あの女を叩くと、まるで護謄のように弾きかえって、体いっぱい力を入れて泣くのが、見ていてとてもいゝ気持だった。」

二人で縁側に足を投げ出していると、男は灯を消して、七年も連れ添っていた別れた女の話をする。

私は圏外に置き忘れられた、一人の登場人物だ、茫然と夜空を見ていると、此男とも駄

目だよ……あまのじやくがどつかで哄笑している。

私は悲しくなると、足の裏がかゆくなる。一人でしゃべっている男のそばで、私はそつと、月に鏡をかたぶけて見た。

眉を濃く引いた私の顔が渦のようにぐるぐる廻つてゆく、世界中が月夜のような明るさだつたらいいだろう――。

「ねえ、やつぱり別れましょうよ、何だか一人でいたくなつたの……もうどうなつてもいいから一人で暮したい。」

男は我にかえつたように、太い息を切ると涙をふきちぎつて、別れと云う言葉の持つ一種淋しいセンチメンタルに、サメザメと涙を流して私を抱こうとする。

これも他愛のないお芝居か、さあこれから忙がしくなるぞ、私は男を二階に振り捨てる、と、動坂の町へ走つて出た。

誰も彼も握手をしましょう、ワンタンの屋台に、首をつつこんで、まず支那酒をかたぶけて、私は味気ない男の接吻を吐き捨てた。

四月×日

「じゃあ行つて来ます。」

街の四ツ角で、まるで他人よりも冷やかに、私も男も別れた。

男は市民座と云う小さい素人劇をつくつていて、滝ノ川の小さい稽古場に毎日通つていた。

私も今日から通いでお務めだ。

男に食わしてもらう事は、泥を嚙んでいるよりも辛い、程のいゝ仕事よりも、私のさがした職業は牛屋の女中さん。

「ロースあおり一丁願いますッ！」

景気がいゝじゃないか、梯子段をトントントン上つて行くと、しみじみ美しい歌がうたいたくなる。

広間に群れたどの顔も、面白いフィルムだ。

肉皿を持つて、梯子段を上がったたり降ったり、私の前帯の中も、それに並行して少しずゝふくらんで来る。

どこを貧乏風が吹くかと、部屋の中は甘味しそうな肉の煮える匂いでいっぱいだ。だが上ったり降ったりで、いつぱんに私はへこたれてしまった。

「二三日すると、すぐ馴れてしまうわ。」

女中頭の、鬘に結ったお杉さんが、腰をトントン叩いている私を見て、慰さめてくれたりした。

十二時になっても、此店は素晴らしい繁昌で、私は帰るのに気が気ではなかった。

私とお満さんをのぞいては、皆住込みなので、平気で残った客にたかつて、色々なものをねだっている。

「たあさん、私水菓子ね。……。」

「あら私かもなんよ……。」

まるで野性の集りだ、笑っては食い笑っては食い無限に時間がつぶれて行きそうで私は焦らずにはいられなかった。

私がやっと店を出た時は、もう一時近くて、店の時計がおくっていたのか、市電はとつ

くになかった。

神田から田端までの路のりを思うと、私はペシャペシャに座ってしまいたい程悲しかった。

街の灯は狐火のように、一つ一つ消えて、仕方なく歩き出した私の目にも段々心細くうつって来た。

上野公園下まで来ると、どうにも動けない程、山下が恐ろしくて、私は棒立ちになってしまった。

雨気を含んだ風が吹いて、日本髪の両鬢を鳥のように羽ばたかして、私はしょんぼり、ハタハタと明滅する仁丹の広告灯にみいつていた。

どんな人でもいゝから、山下を通る人があつたら、道連れになつてもらおう……私はぼんやり広小路を見た。

こんなにも辛い思いをして、私はあいつに真実をつくさなければならぬのだろうか？
不意にハッピを着て自転車に乗った人が、さつと煙のように過ぎた。

何もかも投げ出したいような気持で、

「貴方は八重垣町の方へいらつしやるんじやあないんですかッ！」

と私は叫んだ。

「えゝそうです。」

「すみませんが、田端まで帰るんですけど、貴方のお出でになるところまで道連れになつて戴けませんでしょうか？」

今は一生懸命、私は尾を振る犬のように走つて行くと、その職人体の男にすがった。

「使いがおそくなつたんですが、もしよかつたら自転車にお乗んなさい。」

もう何でもいゝ私はポツクリの下駄を片手に、裾をはし折つてその人の自転車の後に乗せてもらつた。

しつかりとハツピの肩に手を掛けて、この奇妙な深夜の自転車乗りの女は、サメザメと涙をこぼした。

無事に帰れますように……何かに祈らずにはいられなかった。

夜目にも白く、染物とかいてある、ハツピの字を見て、ホッと安心すると、私はもう元氣になつて、自然に笑い出したくなつた。

根津でその職人さんに別れると、又私は漂々とどゝいつを唱いながら路を急いだ。

品物のように冷い男のそばへ……。

四月×日

国から、汐の香の高い蒲団を送つて来た。

フカフカとしたお陽様に照らされた縁側の上に、蒲団を干していると、父様よ母様よと口に出して唱いたくなる。

今晚は市民座の公演会、男は早くから、化粧箱と着物を持って出かけてしまった。

私は水をもらわない植木鉢のように干からびた情熱で、キラリキラリ二階の窓から、男のいそいそとした後姿を見てやった。

夕方四谷の三輪会館に行くと、もういっぱいの人で、舞台は例の剃刀だった。

男の弟は目ざとく私を見つけると、パチパチと目をまばたきさせて、——姉さんはなぜ楽屋に行かないの……人のいゝ大工をしている此弟の方は、兄とは全く別な世界に生きている人だった。

舞台は乱暴な夫婦喧嘩だ。

おゝあの女だ、いかにも得意らしくしゃべっているあいつの相手女優を見ると、私は始めて女らしい嫉妬を感じずにはいられなかった。

男はいつも着て寝る寝巻きを着ていた。今朝二寸程背がほころびていたのを私はわざとなおしてやらなかった。

一人よがりの男なんてまっぴらだよ。

私はくしゃみを何度も何度もつゞけると、ぷいと帰りたくなって、詩人の友達二三人と、温い外に出た。

こんなにいゝ夜は、裸になって、ランニングでもしたらさぞ愉快だろう。

四月×日

「僕が電報打ったら、じき帰っておいで。」ふん！ 男はまだ嘘を云ってる、私はくやしけれど、十五円の金をもらうと、なつかしい停車場へ急いだ。

潮の香のしみた故里へ帰るんだ、あゝ何もかも何もかも行ってくれ、私に用はない。

男と私は精養軒の白い食卓につくと、日本料理でさゝやかな別宴を張った。

「私は当然あつちで遊ぶつもりよ。」

「僕はこうして別れたって、きつと君が恋いしくなるのはわかってるんだ、只どうにも仕様のない気持なんだよ今は、ほんとうにどうせき止めていゝかわからない程、呆然とした気持なんだよ。」

あゝ夜だ夜だ夜だよ。

何もいらぬ夜だよ、汽車に乗ったら煙草を吸いましょう。

駅の売店で、青いバットを五ツ六ツ買い込むと、私は汽車の窓から、ほんとに冷い握手をした。

「さよなら、体を大事にしてね。」

「有難う……御機嫌よう……。」

固く目をとじて、パツと瞼を開くと、せき止められていた涙が、あふれ出る。

明石行きの三等車の隅ツ子に、荷物も何もない私は、足をのびのびと投げ出して涙の出るにまかせて、なつかしいバットの銀紙を開いた。

途中で面白そうな土地があつたら降りてやろうかな……私は頭の上にぶらさがった地図を、じつと見上げて、駅の名を読んだ。

新らしい土地へ降りてみたいな、静岡にしようか、名古屋にしようか、だが、何だかそれとも不安になって来る。

暗い窓に凭れて、じつと暗い人家の灯を見ていると、ふっと私の顔が鏡を見ているようにはつきり写っている。

男とも別れだ

私の胸で子供達が赤い旗を振る

そんなによろこんでくれるか

もう私はどこへも行かず

皆と旗を振って暮らそう。

皆そうして飛び出してくれ

そして石を積んでくれ

そして私を胴上げして

石の城の上に乗せておくれ

さあ男とも別れだ泣かないぞ！

しつかりしつかり旗を振ってくれ

貧乏な女王様のお帰りだ。

外は真暗闇、切れては走る窓の風景に、私は目も鼻も口もペツシヤリとガラス窓にくつつけて、塩辛い干物のように張りついてしまった。

私はいったい何処へ行くのかしら……駅々の物売りの声を聞くたびに、おびえた心で私は目を開く。

あゝ生きる事がこんなにもむずかしいのなら、いつそ乞食にでもなって、全国を流浪して歩いたら面白いだろう、子供らしい空想にひたって、泣いたり笑ったり、又おどけたりふと窓を見ると、これは又奇妙な私の百面相だ。

あゝこんな面白い生き方があったんだ、私はポンと固いクッションの上に飛び上ると、あく事もなく、なつかしくいじらしい自分の百面相に凝視ってしまった。

赤いスリツパ

五月×日

私はお釈迦様に恋をしました
仄かに冷い唇に接吻すれば
おゝもつたいない程の
痺れ心になります。

ピンからキリまで
もつたいなさに
なだらかな血潮が
逆流します。

心憎いまで落ちつきはらった

その男振りに

すつかり私の魂はつられてしまいました。

お釈迦様！

あんまりつれないではござりませぬか！

蜂の巣のようにこわれた

私の心臓の中に……

お釈迦様

ナムアミダブツの無情を悟すのが

能でもありますまいに

その男振りで

炎のような私の胸に

飛びこんで下さりませ

俗世に汚れた

この女の首を

死ぬ程抱きしめて下さりませ

ナムアミダブツの

お釈迦様！

妙に佗しい日だ、気の狂いそうな日だ。天氣のせいかも知れない、朝から、降りしきつてた雨が、夜になると風をまじえて、身も心も、突きさしそうにキリキリ迫つて来る。こんな詩を書いて、壁に張りつけてみたものゝ私の心臓はいつものように、私を見くびつて、ひどくおとなしい。

——スグコイカネイルカ

蒼ぶくれのした電報用紙が、ヒラヒラ私の頭に浮かんで来る。

馬鹿、馬鹿、馬鹿、馬鹿を千も万も叫びたい程、切ない私だ。高松の宿屋で、あの男の電報を受け取つて私は真実、嬉し涙を流して、はち切れそうな土産物を抱いて、この田端の家へ帰えつて来た。

半月もたゝないうちに又別居だ。

私は二ヶ月分の間代を払らってもらうと、程のいゝ居座りで、男は金魚のように尾をヒラヒラさせて、本郷の下宿に越して行つた。

昨日も、出来上つた洗濯物を一ぱい抱えて、私はまるで恋人に会いに行くようにいそいそと、あの下宿の広い梯子を上つて行つた。

あゝ私はあの時から、飛行船が欲しくなつた。

灯のつき初めた、すがすがしい部屋に、私の胸に泣きすがつたあの男が、桃割れに結つた、あの女優と、魚の様にもつれあつている。水のように青っぽい匂いの流れてくる暗い廊下に、私は瞳にいっぱい涙をためて、初夏らしい、ハーモニカの音を耳にした。

顔いっぱい、いゝえ体いっぱい、針金でつくつた人形みたいに固くなつて切なかつたけれど……。

「やあ……。」私は子供のように天真に哄笑して、切ない瞳を、始終机の足に向けていた。あれから今日へ掛けての私は、もう無茶苦茶な世界への放浪だ。

「十五銭で接吻しておくれよ！」
と、酒場で駄々をこねたのも胸に残っている。

男なんてくだらない！

蹴散らして、蹈たくってやりたい怒に燃えて、ウイスキーも日本酒もちゃんぽんに呑み散らした、私の情けない姿が、こうして静かに雨の音を聞きながら、床の中にいると、いじらしく、憂鬱に浮かんで来る。今頃は、風でいっぱいふくらんだ蚊帳の中で、あの女優の首を抱えているであろう……と思うと、飛行船に乗って、バクレツダンを投げてやりた
い気持ちだ。

私は宿酔いと、空腹でヒョロヒョロする体を立たせて、ありったけの一升ばかりの米を土釜に入れて、井戸端に出た。

下の人達は皆風呂に出たので、私はきがねもなく、大きい音をたて、米をサクサク洗った。雨にドブドブ濡れながら、只一筋にそつとはけて行く白い水の手ざわりを楽しんだ。

六月×日

朝。

ほがらかなお天気だ。雨戸をくると、白い蝶々が、雪のように群れて、男性的な季節の

匂いが私を驚かす。

雲があんなに、むくむくもれ上っている。ほんとにいゝ仕事をしなくちやあ、火鉢にいつぱい散らかった煙草の吸殻を捨てると、屋根裏の一人住いもいゝものだと思えた。朦朧とした気持ちも、この朝の青々とした空気を吸うと、元気になって来る。

だが楽しみの郵便が、七ツ屋の流れを知らせて来たのはうんざりしてしまった。四円四十銭の利子なんか抹殺してしまえだ！

私は黄色の着物に、黒い帯を締めると、日傘をクルクル廻わして、幸福な娘のように街へ出た。例の通り古本屋への日参だ。

「叔父さん、今日は少し高く買って丁戴ね。少し遠くまで行くんですから……。」

この動坂の古本屋の爺さんは、いつものように人のいゝ笑顔を皺の中に隠して、私の出した本を、そつと両の手でかゝえた。

「一番今流行る本なの、じき売れてよ。」

「へえ……スチルネルの自我論ですか、壱円で戴きます。」

私は二枚の五拾銭銀貨を手のひらに載せると、両方の袂に一ツずつ入れて、まぶしい外

に出ると、いつもの飯屋へ流れた。

本当にいつになったら、あのこじんまりした食卓をかこんで、香気に御飯が食べられるかしら。

一ツ二ツの童話位では、満足に食ってゆけないし、と云ってカフェーなんかで働く事は、たわしのように荒んで来るし、男に食わせてもらう事は切ないし、やっぱり本を売っては、瞬間々々の私でしかないのだ。

夕方風呂から帰って爪をきっていたら、画学生 of 吉田さんが遊びに来た。写生に行ったんだと云って、拾号の風景画をさげて、生々しい絵の具の匂いをぷんぷんたゞよわせていた。

詩人の相川さんの紹介で知った切りで、別に好でも嫌でもなかったが、一度、二度、三度と来るのが重なると、一寸重荷のような気がしないでもなかった。

紫色のシェードの下に、疲れたと云って寝ころんでいた吉田さんは、ころりと起きあがると、

——瞼、瞼、薄ら瞑った瞼を突いて、

きゅつと抉ぐつて両眼をあける。

長崎の、長崎の

人形づくりはおそろしや！

「こんな唄を知っていますか。白秋の詩ですよ。貴女を見ると、この詩を思い出すんです。」

風鈴が、そつと私の心をなぶつた。

ヒヤヒヤとした縁端に足を投げ出していた私は、灯のそばにいざりよつて男の胸に顔を寄せた。燃えるような息を聞いた。たくましい胸の激しい大波の中に、しばし私は石のように溺れていた。

切ない悲しさだ。女の業なのだ。私の動脈は噴水のようにしぶいた。

吉田さんは震えて沈黙っている。私は油絵の具の中にひそむ、あのエロチックな匂いを此時程嬉しく思つた事はなかった。

長い事、私達は情熱の克服に務めた。

脊の高い吉田さんの影が門から消えると、私は蚊帳を胸に抱いたまゝ泣き濡れてしまった。あゝ私にはあまりに別れた男の思い出が生々しかったもの……私は別れた男の名を呼ぶと、まるで手におえない我まゝ娘のようにワツと声を上げた。

六月×日

今日は隣りの八畳の部屋に別れた男の友人の五十里さんが越して来る日だ。

私は何故か、あの男の魂胆がありそうな気がして、不安だった。

飯屋へ行く路、お地蔵様へ線香を買って上げる。帰って髪を洗うと、さっぱりした気持ちで、団子坂の静栄さんの下宿へ行く。

「二人」と云う詩のパンフレットが出来ている筈だったので元気で坂をかけ上った。

窓の青いカーテンをそつとめくつて、いつものように窓へ凭れて静栄さんと話をした。

この人はいつ見ても若い。房々とした断髪をかしげて、色っぽい瞳をサンゼンと輝やかす。夕方、静栄さんと二人、印刷屋へパンフレットを取りに行く。八頁だけど、まるで果実のように新鮮で、好ましかった。

帰えり南天堂によつて、皆に一部ずゝ送る。

働いて、此パンフレットを長く続けたい。

冷いコーヒーを呑んでいる肩を叩いて、辻潤さんが、鉢巻をゆるめながら、賛詞をあげてくれた。

「とてもいゝものを出しましたね、お続けなさいよ。」

漂々たる酒人辻潤さんの酔体に微笑を送り、私も静栄さんも元気に外へ出た。

六月×日

種まく人たちが、今度文芸戦線と云う雑誌を出すからと云うので、私はセルロイド玩具の色塗りに通っていた、小さな工場の事を詩にして、「工女の唄へる」と云うのを出しておいた。今日は都新聞に別れた男への私の詩が載っていた。もうこんな詩なんて止めよう、くだらない。もっともっと勉強して、生のいゝ私の詩を書こう。

夕方から銀座の松月へ行く、ドンの詩の展覧会、私の下手な字が、麗々しく先頭をかざっている。橋爪氏に会う。

六月×日

雨がザ……………葉っぱに当たっている。

陽春二三月

楊柳齊作花

春風一夜入閨闥

楊花飄蕩落南家

含情出戸脚無力

拾得楊花淚沾臆

秋去春來双燕子

願銜楊花入窠裏

灯の下に横座りになりながら、白花を恋した靈太后の詩を読んでいると、つくづく旅が恋いしくなった。

五十里さんは引越して来てから、いつも帰えりは、夜更けの一時過ぎ、下の人は務め人なので、九時頃には寝てしまう。

時々田端の駅を通過する電車や汽車の音が汐鳴りのように聞える丈で、山住いのような静かさだ。

つくづく一人が淋しくなった。

楊白花のように美しい男が欲しくなった。

本を伏せると、焦々した私は下に降りて行つた。

「今頃どこへ！」下の叔母さんは裁縫の手を休めて私を見る。

「割引きです。」

「元気がいゝのね……。」

蛇の目の傘を拵げると、動坂の活動小屋に行つた。

ヤングラジャ、私は割引きのヤングラジャに恋心を感じた。太鼓船の東洋的なオーケストラも雨の降る日だったので嬉しかった。

だが、所詮はどこへ行つても淋しい一人身。小屋が閉まると、私は又溝鼠のように塩たれて部屋へ歸つた。

「誰かお客さんのようでしたが……。」

叔母さんの寝ぼけた声を脊に、疲れて上つて来ると、吉田さんが、紙を円めながらポケツトへ入れていた。

「おそく上つて済みません。」

「いゝえ、私活動へ行つて来たのよ。」

「あんまりおそいで、置手紙をしたとこなんです。」

別に話もない赤の他人なんだけど、吉田さんは私に甘えてこようとしている。鴨居にかえそうに脊の高い、吉田さんを見ていると、タジタジと圧されそうになる。

「随分雨が降るのね……。」

この位白ばくれておかなければ、今夜こそどうにか、爆発しそうで恐ろしかった。

壁に脊を凭せて、彼の人はじつと私の顔を凝視めて来た。私は、此人が好で好でたまらなくなりそうに思えて困ってしまった。

だけど、私はあの男でもうこりこりしている。

私は温なしく、両手を机の上ののせて、白い原稿用紙に照り返えった、灯の光りに瞳を走らせていた。私の両の手先きが、ドクドク震えている。

一本の棒を二人で一生懸命押しあつた。

あゝそんな瞳をなさると、とても私はもうい女でございます。愛情に飢えている私は、胸の奥が、擦ぐつたくジンジン鳴っている。

「貴女は私を黽っているんじゃないんですか？」

「どうして！」

何と云う間の抜けた受太刀だろう。

接吻一ツしたわけではなし、私の生々しい感傷の中へ、巻き込まれていらつしやるきりじゃありませんか……私は口の内につぶやきながら、此男をこのまゝこさせなくするもの

一寸淋しい気がした。

あゝ友人が欲しい。こうした優しさを持ったお友達が欲しいのだけれど……私はポタポタと涙があふれた。

いつその事、ひと思いに殺されてしまいたい。彼の人は私を睨み殺すのかも知れない。生唾が、ゴクゴク舌の上を走る。

「許して下さい！」

泣き伏す事は、一層彼の人の胸をあとたてるようだったけれど、私は自分がみじめに思えて仕方がなかった、別れた男との幾月かを送った此部屋の中に、色々な幻が泳いでいて私をたまらなくした。

——引越さなくちやあ、とてもたまらない。私は机に伏さったまゝ郊外のさわやかな夏影色を、グルグル頭に描いてみた。

雨の情熱はいつそう高まって来た。

「僕を愛して下さい、だまって僕を愛して下さい！」

「だからだまって、私も愛しているではありませんか……。」

せめて手を振る事によってこの青年の胸が癒されるならば……。

私はもう男に放浪する事は恐ろしい。貞操のない私の体だけど、まだどこかに、一生を託す男が出てこないとも限らない。

でも此人は、新鮮な血の匂いを持っている。厚い胸・青い眉・太陽のような瞳。あゝ私は激流のようなはげしきで、二枚の唇を、彼の人の唇に押しつけてしまった。

六月×日

淋しく候。

くだらなく候。

金が欲しく候。

北海道あたりの、アカシアのプンプン香る並樹舗を、一人できまゝに歩いてみたい。

「起きましたか！」

珍らしく五十里さんの声。

「えゝ起きてます。」

日曜なので、五十里さんと静栄さんと、吉祥寺の宮崎さんのアメチヨコハウスに行く。夕方ポーチで犬と遊んでいたら、上野山と云う洋画を描く人が遊びに来た。私は此人と会うのは二度目だ。

私がおさない頃、近松さんの家に女書生にはいった時、此人は茫々とした姿で、牛の画を売りに来た事がある。子供さんがジフテリヤで、大変佗し気な風才だった。靴をそろえる時、まるで河馬の口みたいに靴の底が離れていた。私は小さい針を持って来ると、そつと止めておいてあげた事がある。

きつと気がつかなかったのかも知れない。

上野山さんは漂々と酒を呑みよく話した。

夜、上野山氏は一人で帰って行つた。

地球の廻転椅子に腰を掛けて

ガタンとひとまわりすれば

引きずる赤いスリッパが

片方飛んでしまった

淋しいな……

オーイと呼んでも

誰も私のスリッパを取ってはくれぬ

度胸をきめて

廻転椅子から飛び降り

飛んだスリッパを取りに行こうか

臆病な私の手はしつかり

廻転椅子にすがっている

オーイ誰でもいいゝ

思い切り私の横面を

はりとばしてくれ

そしてはいてるスリッパも飛ばしてくれ

私はゆつくり眠りたい

落ちつかない寢床の中で、私はこんな詩を頭に描いた。下で三時の鳩時計が鳴る。

——日記が転々と飛びますが、その月の雑誌にしつくりしたものを抜いて書いておきますので、後日、一冊の本にする時もありましたならば、順序よくまとめて出したいと思っております。

——筆者——

粗忽者の涙

五月×日

世界は星と人により成る。

嘘つけ！ エミール、エルハアレンの世界と云う詩を読んでいるとこんなくだらない事が書いてある。

何もかもあくびいっぱいの大空に、私はこの小心者の詩人をケイベツしてやろう。

人よ、攀ぢ難いあの山がいかに高いとても、

飛躍の念さへ切ならば、

恐れるなかれ不可能の、

金の駿馬をせめたてよ。

実につまらない詩だが、才子と見えて、実に巧い言葉を知っている。

金の駿馬をせめたてよ……………。

窓を横ぎって、紅い風船が飛んで行く。

呆然たり、呆然たり、呆然たりか……。何と住みにくい浮世でござりましょう。

故郷より手紙来る。

——現金主義になつて、自分の口すぎ位はこつちに心配かけないでくれ、才と云うものに自惚れてはならない。お母さんも、大分衰えている。一度帰つておいで、お前のブラ主義には不賛成です。

五円の為替を膝において、おありがとうござります。

私はなさけなくなつて、遠い古里へ舌を出した。

六月×日

前の屍室に、今夜は青い灯がついている。又兵隊さんが一人死んだ。

青い窓の灯を横ぎつて、通夜する兵隊さんの影が、二ツぼんやりうつっている。

「あら！ 蛍が飛んどる。」

井戸端で黒島さんの妻君が、ぼんやり空を見ている。

「ほんとう？」

寝そべっていた私も縁端に出てみたが、もう何も見えなかった。
夜。

隣の壺井夫婦、黒島夫婦遊びに来る。

壺井さん曰く、

——今日はとても面白かった。黒島君と二人で市場へ、鹽を買いに行ったら、金もはらわないのに、三円いくらのつり銭とたらいをくれて一寸ドキツとしたね。

「まあ！ それはうらやましい、たしか、クヌウト・ハムスの飢餓と云う小説の中にも、蠟燭を買いに行つて、五クローネルのつり銭と蠟燭をたゞでもらつて来るところがありましたね。」

私も夫も、壺井さんの話は非常にうらやましかった。

梟の鳴いている、憂鬱な森陰に、泥沼に浮いた船のように、何と淋しい長屋だろう。屍室と墓地と病院と、淫売宿のようなカフエーに囲まれた、この太子堂の家もあきあきしてしまった。

「時に、明日はたけのこ飯にしないかね。」

「たけのこ盗みに行くか……。」

三人の男たちは路の向うの、竹藪を背にしている、床屋の二階の飯田さんをさそって、裏の丘へたけのこ盗みに出掛けて行った。

女達は街の灯を見たかったけれど、あきらめて、太子堂の縁日を歩いた。

竹藪の小路に出した露店のカンテラの灯が噴水の様に薰じていた。

六月×日

ほがらかな空なので、丘の上の絹のような緑を恋いして、久し振りに、貧しい女と男は散歩に出る話をした。

鍵を締めて、一足おくれて出ると、どっちへ行つたものか、男の蔭は見えない。

焦々して、陽照りのはげしい丘の路を行ったり来たりしたが、随分おかしい話である。

あざみの茎のように怒りたつた男は、私の背をはげしく突くと閉ざした家へはしつてしまった。

「オイ！ 鍵を投げろツ！」

又か……私は泥棒猫のように、台所からいけると、男はいきなり、たわしや茶碗を私の胸に投げつける。

あ、この瓢箪な粗忽者を、そんなにも貴方は憎いと云うのか……私はしょんぼり井戸端に立って、蒼い雲を見た。

右へ行く路が、左へまちがったからって、馬鹿だねえと云う一言ですむではないか。

私は自分の淋しい影を見ていると、ふつと小学校時代に、自分の影を見ては空を見ると、その影が、空にもうつっているあの不思議な世界のあつた頃を思い出して、高々とした空を私は見上げた。

悲しい涙が湧きあふれて、私は地べたへしやがむと、カイロの水売りのような郷愁の唄

をうたいたくなつた。

あゝ全世界はお父さんとお母さんでいっぱいなんだ。お父さんとお母さんの愛情が、唯一のものであると云う事を、私は生活にかまけて忘れておりました。

前垂れを掛けたまゝ竹藪や、小川や洋館の横を通つて、だらだらと丘を降りると、ポツポツ！ ポツポツ！ 蒸汽船のような音がする。

あゝ尾の道の海！ 私は海近いような錯覚をおこして、子供のように丘をかけ降りた。そこは交番の横の工場のモーターが唸っているきりで、がらんとした広っぱ。

三宿の停留場に、しばし私は電車に乗る人のように立っていたが、お腹がすいて、めがまいそうだった。

「貴女！ 随分さつきから立つていらつしやいますが、何か御心配ごとでもあるのではありませんか。」

今さきから、じろじろ私を見ていた、二人の老婆が馴々しく近よると私の身体を四つの瞳で洗うように見た。

笑いながら涙をふりほどこいている私を連れて、この親切なお婆さんは、ゆるゆる歩きだ

すと、信仰の強さについて、足の曲った人が歩けるようになったとか、悩みある人が、神の子として、元気に生活に楽しさを感じるようになったとか、天理教の話をしてくれた。

川添いのその天理教の本部は、いかにも涼しそうに庭に水が打ってあつて、紅葉の青葉が、塀の外にふきこぼれていた。

二人の婆さんは神前に額ずくと、やがて両手を拡げて、異様な踊りを始めだした。

「お国はどちらでいらつしやいますか？」

白い着物をきた中年の男が、私にアンパンと茶をすゝめながら、私の佻しい姿を見た。

「別に国と云つて定まったところはありませんけれど、原籍は鹿児島県東桜島です。」

「ホウ……随分遠いんですなあ……。」

私はもうたまらなくなつて、うまそうなアンパンを摘んで、一口噛むと、案外固くつて、粉がボロボロ膝にこぼれ落ちていった。

何もない。

何も考える必要はない。

私はつと立つて神前に額ずくと、プイと下駄をはいて表へ出てしまった。パン屑が虫歯の洞穴の中で、ドンドンむれていつてもいゝ。只口の中に味覚があればいいのだ。

家の前へ行くと、あの男と同じ様に固く玄関は口をつぐんでいる。

私は壺井さんの家へ行くと、はろばろと足を投げ出して横になった。

「お宅に少しお米ありませんか？」

人のいゝ壺井さんの妻君もへこたれて、私のそばに横になると、一握の米を茶碗に入れたのを持つて、生きる事が厭になつてしまつたわと云う話になつてしまつた。

「たい子さんところ、信州から米が来たつて云つてたから、あそこへ行つてみましょう。」

「そりやあ、えゝなあ……。」

そばにいた伝治さんの妻君は両手を打つて子供のようによぶ。真実いという人だ。

六月×日

久し振りに東京へ出る。

新潮社で加藤さんに会う。詩の稿料六円戴く。

いつも目をつぶって通る、神楽坂も今日は素的に楽しい街になって、店の一ツ一ツを覗いて通る。

隣人とか

肉親とか

恋人とか

それが何であろう

生活の中の食うと云う事が満足でなかったら

画いた愛らしい花はしぼんでしまう

快活に働きたいものだと思っても

悪口雑言の中に

私はいじらしい程小さくしゃがんでいる

両手を高くさしあげてもみるが

こんなにも可愛い、女を裏切って行く人間ばかりなのか

いつまでも人形を抱いて沈黙っている私ではない

お腹がすいても

職がなくなっても

ウオオ！ と叫んではならないんですよ

幸福な方が眉をおひそめになる。

血をふいて悶死したって

ビクともする大地ではないんです

陳列箱に

ふかしたてのパンがあるが

私の知らない世間は何とまあ

ピアノのように軽やかに美しいのでしょうか

そこで始めて

神様コンチクショウと吐鳴りたくなります。

長い電車に押されると、又何の慰さめもない家へ帰えらなければならない。
詩を書く事がたった一つのよき慰さめ。

夜飯田さんとたい子さんが唄いながら遊びに来る。

俺とこの

あの美しい

ケツコ ケツコ鳴くのが

ほしいんだろう……

壺井さんとこで、豆御飯をもらう。

六月×日

今夜は太子堂のおまつり。

家の縁から、前の広場の相撲場がよく見えるので、皆集って見る。

「西！ 前田河ア」

と云う行司の呼ぶ声に、縁側に爪先立っていた私達はドツと吹き出して哄笑した。

知った人の名前なんか呼ばれると、とてもおかしくて堪らない。

貧乏していると、皆友情以上に、自分をさらけ出して一つになってしまう。

みんなよく話をした。

怪談なんか話に話が飛ぶと、たい子さんは千葉の海岸で見た人魂の話をよくした。

この人は山国の生れか非常に美しい肌をもっている。やっぱり男に苦勞する人だ。
夜更け一時過ぎまで花弄をする。

六月×日

萩原さん遊びに来る。

酒は吞みだし金はなしで、敷蒲団一枚屑屋に壱円五拾錢で売る。

お米がたりなかったので、うどんの玉をかってみんなで食べる。

酒の代りに焼酎を買って来る。

平手もて

吹雪にぬれし顔を拭く

反共産を主義とせりけり

酒呑めば鬼のごとくに青かりし

大なる顔よ

かなしき顔よ。

あゝ若人よ！ いゝじゃないか、いゝじゃないか、唄を知らない人達は、啄木を高唱してうどんをつゝき焼酎を呑んだ。

その夜、萩原さんを皆と一緒におくつて行つた夫が帰えつて来ると、蚊帳がないので、部屋を締め切つて、蚊取り線香をつけて寝につくと、
「オーイ起ろ起ろ！」ドタドタと大勢の足音がして、麦ふみのように地ひゞきが頭にひゞく。

「寝たふりをするなよ……。」「

「起きているんだろう。」「

「起きないと火をつけるぞ！」

「オイ！　大根を抜いて来たんだよ、うまいよ起きないかい……。」

飯田さんと萩原さんの声が入りまじって聞える。

私は笑いながら沈黙っていた。

七月×日

朝、寢床の中ですばらしい新聞を読んだ。

元野子爵夫人が、不良少女少女の救済をすると云うので、円満な写真が新聞に載っていた。

あゝこんな人にでもすがって見たなら、何とか、どうにか、自分の行く道が開けはしないかしら……私も少しは不良じみているし、まだ廿二だもの、不良少女か、私は元気を出して飛びおきると、新聞に載っている元野夫人の住所を切り抜いて私は麻布のそのお邸へ出掛けて行つた。

折目がついていても浴衣は浴衣だけど、私は胸を空想で、いっぱいふくらませていた。

「パンおつくりになる、あの林さんでいらつしやいますか？」

どういたしまして、パンを戴きに上りました林ですと心につぶやきながら、

「一寸おめにかゝりたいと思ひまして……。」

「そうですか、今愛国婦人会の方ですが、すぐお歸えりですから。」

女中さんに案内されて、六角のように突き出た窓ぎわのソファ―に私は腰をかけて、美しい幽雅な庭にみいつていた。

蒼つばいカーテンを通して、風までが高慢にふくらんではいつて来る。

「何う云う御用で……。」

やがてずんぐりした夫人は、蟬のように薄い黒い夏羽織を着てはいつて来た。

「あのお先きにお風呂をお召しになりませんか……。」

どうも大したものだ、私は不良少女だつて云う事が厭になつて夫が肺病で困っていますから、少し不良少年少女をお助けになるおあまりを戴きたいと云つた。

「新聞で何か書いたようでしたが、ほんのそう云う事業にお手助けしているきりで、お困りのようでしたら、九段の婦人会の方へでもいらつして、仕事をなさつては……。」

程よく埃のように外にほうり出されると、彼女が、眉をさかだてなぜあの様な者を上へ

上げましたッ！　と女中を叱っているであろう事を思い浮べて、ツバキをひっかけてやりたくなった。

へエ！　何が慈善だよ、何が公共事業だよだ。

夕方になると、朝から何も食べない二人は暗い部屋にうずくまって、当のない原稿を書いた。

「ねえ、洋食を食べない……。 」

「へエ！」

「カレーライス、カツライス、それともビフテキ？」

「金があるのかい？」

「うん、だって背に腹はかえられないでしょう、だから晩に洋食を取れば、明日の朝まで金を取りにこないでしょう。」

始めて肉の匂をかぎ、ジュンジュンした油をなめると、めまいがしそうに嬉しくなる。一口位は残しておかなくちや変よ、腹が少し豊かになると、生きかえったように私達

は思想に青い芽をふかす。

全く鼠も出ない有様なんだから――。

蜜柑箱の机に凭れて童話をかき始める。

外は雨の音、玉川の方で、ポンポン絶え間なく鉄砲を打つ音がする。深夜だと云うのに、元気のいゝ事だ。

だが、いつまでも、こんな虫みたいな生活が続くのかしら、うつむいて子供の無邪気な物語りを書いていると。つい目頭が熱くなる。

イビツな男とニンシキフソクの女では、一生たつたとて、白いおまんまが食えそうもないね。

女の吸殻

七月×日

丘の上に松の木が一本

その松の木の下で

じつと空を見ていた私です

真蒼い空に老松の葉が

針のように光っていました

あゝ何と云う生きる事のむつかしさ

食べると云う事のむつかしさ

そこで私は

貧しい袂を胸にあわせて

古里に養われていた頃の

あのなつかしい童心で

コトコト松の幹を叩いてみました。

この老松の詩をふつと思ひ出すと、とても淋しくて、黒ずんだ緑の木立ちの間を、私は野良犬のように歩いた。

久さし振りに、私の胸にエプロンもない。お白粉もうすい。

日午傘くるくる廻わしながら、私は古里を思ひ出し、丘のあの松の木を思ひ浮べた。

下宿にかえると、男の部屋には、大きな本箱がふえていた。

女房をカフエーに働かして、自分はこんな本箱を買ってござる。

いつものように弍拾円ばかりの金は、原稿用紙の下に入れると、誰もいないきやすさに、くつろいだ気持ちで、押入れの汚れものを見てみる。

「あのお手紙でございます。」

女中が持つて来た手紙を見ると、六錢切手をはった、かなり厚い女の封書。

私は妙に爪を噛みながら、只ならぬ淋しさに、胸がときめいてしまった。私は自分を嘲笑しながら、押入れの隅に隠してあった、かなり厚い、女の手紙の束をみつけ出した。

——やっぱり温泉がいゝわね、とか。

——あなたの紗和子より、とか。

——あの夜泊つてからの私は、とか。

私は齒の浮くような甘い手紙に震えながらつつ立ってしまった。

二人の間はかなり進んでいるらしい。温泉行きの手紙では、私もお金を用意しますけど、貴女も少しつくつて下さい、と書いてあるのを見ると、私はその手紙を部屋中にばらまいてやった。

原稿用紙の下にしいた式拾円の金を袂に入れると、涙をふりちぎって外に出た。

あの男は、私に会うたびに、お前は薄情だとか、雑誌にかく、詩や小説は、あんなに私

を叩きつけたものばかりじゃなかったか。

豚！

インバイ！

あらゆるのゝしりを男の筆の上に見た。

私は、肺病で狂人じみている、その不幸な男の為に、あのランタンの下で、「貴方一人に身も世も捨てた……」と、唄わなくちやあならないのだ。

夕暮れの涼しい風をうけて、若松町の通りを歩いていると、新宿のカフェーにかえる気もしなかった。

へエ！ 使い果して二分残るか、ふつとこんな言葉が思い出された。

「貴方！ 私と一緒に温泉に行かない。」

私があんまり酔っぱらったので、その夜時ちゃんは淋しい瞳をして私を見ていた。

七月×日

あゝ人生いたるところに青山ありだよ、男から佗びの手紙来る。

夜。

時ちゃんのお母さん来る。五円借す。

チュウインガムを噛むより味気ない世の中、何もかもが吸殻のようになってしまった。貯金でもして、久し振りにお母さんの顔でもみてこようかしら。

私はコック場へ行くついでにウイスキーを盗んで呑んだ。

七月×日

魚屋のように淋しい寝ざめ。四人の女は、ドロドロに崩れた白い液体のように、一切を休めて眠っている。私は枕元の煙草をくゆらしながら、投げ出された時ちゃんの腕を見ていた。

まだ十七で肌が桃色していた。

お母さんは雑色で氷屋をしていたが、お父つあんが病気なので、二三日おきに時ちゃんのところへ裏口から金を取りに来た。

カーテンもない青い空を映した窓ガラスを見てみると、西洋支那御料理の赤い旗が、まるで私のように、ヘラヘラ風に膨らんでいる。

カフエーに務めるようになると、男に抱いていたイリュウジョンが夢のように消えて、皆一山いくらに品がさががつてみえる。

別にもうあの男に稼いでやる必要もない故、久し振りに故里の汐っぱい風を浴びようかしら。あゝでも可哀想なあの人よ。

それはどろどろの街路であつた

こわれた自動車のように私はつつ立っている

今度こそ身売りをして金をこしらえ

皆を喜ばせてやろうと

今朝はるばると幾十日目で又東京へ帰えつて来たのではないか

どこをさがしたって買ってくれる人もないし

俺は活動を見て五十銭のうな丼を食べたらもう死んでもいゝと云つた

今朝の男の言葉を思い出して

私はサンサンと涙をこぼしました

男は下宿だし

私が居れば宿料がかさむし

私は豚のように臭みをかきながら

カフェーからカフェーを歩きまわった

愛情とか肉親とか世間とか夫とか

脳のくさりかけた私には

縁遠いような気がします

叫ぶ勇氣もない故

死にたいと思ってもその元氣もない

私の裾にまつわってじやれていた小猫のオテクさんはどうしたろう……

時計屋のかざり窓に私は女泥棒になった目つきをしてみようと思いました。
何とうわべばかりの人間がウヨウヨしている事よ

肺病は馬の糞汁を呑むとなおるって

辛い辛い男に呑ませるのは

心中ってどんなものだろう

金だ金だ

金は天下のまわりものだって云うけど

私は働いても働いてもまわってこない

何とかキセキはあらわれないものか

何とかどうにか出来ないものか

私が働いている金はどこへ逃げて行くのか

そして結局は薄情者になり

ボロカス女になり

死ぬまでカフエーだの女中だの女工だのボロカス女になり

私は働き死にしなければならないのか！

病にひがんだ男は

お前は赤い豚だと云います

矢でも鉄砲でも飛んでこい

胸くその悪い男や女の前に

芙美子さんの脇を見せてやりたい。

かつて、貴方があんまり私を邪慳にするので、私はこんな詩を雑誌にかいて貴方にむくいた事がある。

浮いた稼ぎなので、焦々しているのだと善意にカイシヤクしていた大馬鹿者の私です。

そうだ、帰えられる位はあるのだから、汽車に乗ってみようかな。

あの快速船のしぶきもいゝじゃないか、人參灯台の朱色や、青い海、ツ、ンツンだ。

夜汽車、夜汽車、誰も見送りのない私は、スイツとお葬式のような悲しさで、何度も不幸な目に逢て乗る東海道線に身をまかせた。

七月×日

「神戸にでも降りてみようかしら、何か面白い仕事が見つかるかな……。」

明石行きの三等車は、神戸で降りてしまう人達ばかりだった。

私もバスケットを降ろしたり、食べ残りのお弁当を大切にしまったりして、何だか気がかりな気持ちで神戸駅に降りてしまった。

「これで又仕事がなくって食えなきあ、ヒンケマンじゃないか、汚れた世界の罪だよ。」

暑い陽ざしだ。

だが私には、アイスクリームも、氷も用はない。ホームでさっぱりと顔を洗うと、生ぬるい水を腹いっぱい呑んで、黄ろい汚れた鏡に、みずひき草のように淋しい姿を写して見

た。

さあ矢でも鉄砲でも飛んでこいだ。

別に当もない私は、途中下車の切符を大事にしようと、楠公さんの方へブラブラ歩いて
いた。

古ぼけたバスケット。

静脈の折れた日傘。

煙草の吸殻よりも味気ない女。

私の戦闘準備はたったこれだけでござります。

砂ほこりの楠公さんの境内は、おきまりの鳩と絵ハガキ屋。

私は水の枯れた六角の噴水の石に腰を降ろして、日傘で風を呼びながら、汐っぱい青い
空を見た。あんまりお天陽様が強いので、何もかもむき出しにぐんにやりしている。

何年昔になるだろう――

十五位の時だったかしら、私はトルコ人の楽器屋に奉公していたのを思い出した。

ニーナという二ツになる女の子の守りで、黒いゴム輪の腰高な乳母車に、よく乗っけ

てメリケン波止場の方を歩いたものだった。

クク……クク……鳩が足元近く寄つて来る。

人生鳩に生れるべし。

私は、東京の男の事を思い出して、涙があふれた。

一生たつたとて、私が何千円、何百円、何拾円、たった一人のお母さんに送つてあげる事が出来るだろうか、私を可愛がつて下さる行商してお母さんを養っている気の毒なお義父さんを慰さめてあげる事が出来るだろうか！ 何も満足に出来ない女、男に放浪し職業に放浪する私、あゝ全く頭が痛くなる話だ。

「もし、あんたはん！ 暑うおまつしやろ、こつちやいおはいりな……。」

噴水の横の鳩の豆を売るお婆さんが、豚小屋のような店から声をかけてくれた。

私は人なつっこい笑顔で、お婆さんの親切に報いるべく、頭のつかえそうな、アンペラ張りの店へはいつて行つた。

文字通り、それは小屋で、バスケットに腰をかけると、豆くさいけれど、それでも涼し

かった。

ふやけた大豆が石油罐の中につけてあつた。

ガラスの蓋をした二ツの箱には、おみくじや、固い昆布がはいっていて、いっぱいほこりをかぶっていた。

「お婆さん、その豆一皿ください。」

五銭の白銅を置くと、しなびた手でお婆さんは私の手をはらった。

「ぜ々なぞほつとき。」

此お婆さんにいくつですと聞くと、七十六だと云った。

虫の食ったおヒナ様のようにしおらしい。

「東京はもう地震はなりましたかいな。」

齒のないお婆さんはきんちゃくをしぼったような口をして、優さしい表情をする。

「お婆さんお上り。」

私がバスケットから、お弁当を出すと、お婆さんはニコニコして、玉子焼きを口にふくります。

「お婆あはん、暑うおまんなあ。」

お婆さんの友達らしく、腰のしゃんとしたみすぼらしい老婆が、店の前にしゃがむと、
「お婆あはん、何ぞえゝ、仕事ありまへんやろかな、でもな、あんまりぶらぶらしてますよつて、会長はんも、えゝ顔しやはらへんのでなあ、なんぞ思うてまんねえ……。」

「そうやなあ、栄町の宿屋はんやけど、蒲団の洗濯があるいうてましたけど、なんぼう……甘銭も出すやろか……。」

「そりやえゝなあ、二枚洗ろうてもわて食えますがな……。」

こだわりのない二人のお婆さんを見ていると、こんなところにもこんな世界があるのかと、淋しくなった。

とうとう夜になってしまった。

港の灯のつきそめる頃は、真実そゞろ心になってしまふ。でも朝から、汗をふくんでいる着物の私は、ワツと泣たい程切なかった。

これでもへこたれないか！ これでもか！ 何かゞ頭をおさえているようで、私はまだまだ、と口につぶやきながら、当もなく軒をひらつて歩いていると、バスケット姿が、オ

イチニイの薬屋よりもはかなく思えた。

お婆さんに聞いた商人宿はじきわかった。

全く国へ帰つても仕様のない私なのだ、お婆さんが、御飯焚きならあると云つたけれど。

海岸通りに出ると、チツチツと舌を鳴らして行く船員の群が多かった。

船乗りは意気で勇ましくていゝなあ――

私は商人宿とかいてある行灯をみつけると、ジンと耳を熱くしながら、宿代を聞きにはいった。

親切そうなお上さんが、帳場において、泊りだけなら六十銭でいゝと、旅心をいたわるように「おあがりやす」と云つてくれた。

三畳の壁の青いのが、変に淋しかったが、朝からの浴衣を着物にきかえると、宿のお上さんに教わって、近所の銭湯に行った。

旅と云うものはおそろしいようで、肩のはらないもの。

女達は、まるで蓮の花のように小さい湯舟を囲んで、珍らしい言葉でしゃべっている。

旅の銭湯にはいつて、元気な顔をしているが、あの青い壁に押されて寝る今夜の夢を思
うと、私はふっと悲しくなった。

七月×日

坊さん簪買ふたと云うた……

窓の下を人夫達が土佐節を唄いながら通つて行く。

ランマンと吹く風に、波のように蚊屋が吹きあげて、まことに楽しみな朝の寝ざめ、郷
愁をおびた土佐節を聞いていると、高松のあの港が恋いしくなった。

私の思い出に何の汚れもない四国の古里、やっぱり帰えろうかなあ……御飯焚きになっ
てみたところで仕用がないし……。

オイ馬鹿！

メス！

赤豚！

別れて来た男のバリゾウゴンを、私は唄のように天井に投げとばして、バットを深々と
吸った。

「オーイ、オーイ」船員達が呼びあっている。

私は宿のお上さんに頼んで、岡山行き途中下車の切符を、除虫菊の仲買の人に壱円で買ってもらうと、私は兵庫から、高松行きの船に乗る事にした。

元気を出して、どんな場合にでも、へこたれてはならない。

小さな店で、瓦煎餅を一箱買うと、私は古ぼけた、兵庫の船宿で、高松行きの三等切符をかった。やっぱり国へかえりましょう。

透徹した青空に、お母さんの情熱が一本の電線となって、早く帰っておいでと呼んでいる。

不幸な娘でございます。

汚れたハンカチーフに、氷のカチ割りを包んで、私は頬に押し当てた。子供らしく子供らしく、すべては天真ランマンと世間を渡りましょう。

下谷の家

一月×日

カフェーで酔客にもらった指輪が、思いがけなく役立って、拾三円で質に入れると、私と時ちゃん、千駄木の町通りを買物しながら歩いた。

古道具屋で、箱火鉢と小さい茶づ台を買ったり、沢庵や茶碗や、茶吞道具まで揃えると、あと半月分あまりの間代を入れるのが、せいっぱい。

原稿用紙も買えない。

拾三円の金の他愛なさよ。

白い息を吹きながら、二人が重い荷を両方から引っぱって帰った時は、十時近かった。

「芙美ちゃん！ 前のうち小唄の師匠よ、ホラ……いゝわね。」

傘さして

かざすや廓の花吹雪

この鉢巻は過ぎしころ

紫にほふ江戸の春

目と鼻の露路向うの二階屋から、沈みすぎる程、いゝ三味線の音め、細目にあけた雨戸の蔭には、灯に明るい、障子のこまかいサンが見える。

「お風呂明日にして寝ましょう……上蒲団借りた？」

時ちゃんはピシヤリと障子を締めた。

敷蒲団はたいさんと私と一緒にの時代のが、たいさんが小堀さんそこへお嫁に行ったので残っていた。

あの人は鍋も、包丁も敷蒲団も置いて行ってしまった。

一番なつかしく、一番厭な思い出の残った本郷の酒屋の二階を思い出した、同居の軍人上りや、二階でおしめを洗ったその妻君や、人のいゝ酒屋の夫婦や。用が片づいたら、あ

の頃の日記でも出して読もう――。

「どうしたかしらたい子さん！」

「今度こそ幸福になったでしょう。小堀さん、とても、ガンジヨウな人だそうだから、誰が来ても負けないわ……。」

「いつか遊びに連れて行ってね。」

「あゝ……。」

二人は、下の叔母さんから借りた上蒲団をかぶって日記をつけた。

一、拾参円の内より

茶ブ台

壱円。

箱火鉢

壱円。

シクラメン一鉢

卅五錢。

飯茶わん

貳拾錢 二箇。

吸物わん

参拾錢 二箇。

ワサビツケ

五錢。

沢庵

拾壹錢。

箸

五錢

五人前。

茶吞道具 盆つき

壹円拾錢。

桃太郎の蓋物

拾五錢。

皿

貳拾錢

二枚。

間代日割り

六円。

(三疊九円)

火箸

拾錢。

餅網

拾貳錢。

ニームのつゆ杓子

拾錢。

御飯杓子

参錢。

花紙一束

貳拾錢。

肌色美顔水

貳拾八錢。

御神酒

貳拾五錢

一合。

引越し蕎麦

参拾錢

下へ。

一、 壹円貳拾六錢 残金。

「心細いなあ……。」

私は鉛筆のしんで頬つぺたを突きながら、つんと鼻の高い時ちゃんの顔をこっちに向けて日記をつけた。

「炭は？」

「炭は、下の叔母さんが取りつけの所から月末払らいで取ってやるってさ。」

時ちゃんは安心したように、銀杏返えしの鬢を細い指で持ち上げて、私の脊に手を巻いた。

「大丈夫ってばさ、明日から、うんと働らくから芙美ちゃん元氣を出して勉強して。浅草を止めて、日比谷あたりのカフェーなら通いでいゝだろうと思うの酒の客が多いんだって……。」

「通いだと二人とも楽しみよ、一人じゃ御飯もおいしくないね。」

私は煩雑だった今日の日を思った。

萩原さんとお節ちゃんに、お米も二升もらったり、画描きの溝口さんは、折角北海道から送って来たと云う、餅を風呂敷に分けてくれたり、指輪を質へ持って行ってくれたり。

「当分二人でみつしり働こうね。ほんとに元気を出して……。」「

「雑色のお母さんのところへは参拾円も送ればいゝんだから。」「

「私も少し位は原稿料がはいるんだから、沈黙って働けばいゝのね。」「

雪の音かしら、窓に何かサゝゝと当っている。

「シクラメンって厭な匂いだ。」「

時ちゃんは、枕元の紅いシクラメンの鉢をそつと押しやると、簪も櫛も抜いて、「さあ寝んねおしよ。」「

暗い部屋の中で、花の匂いだけが、強く私達をなやませた。

一月×日

積る淡雪積ると見れば

消えてあとなき儚なさよ

柳なよかに揺れぬれど

春は心のかはたれに……

時ちゃんの唄声でふつと目を覚ますと、枕元に、白い素足が並んでいた。

「もう起きたの……。」

「雪が降ってるよ。」

起きると、湯もたぎって、窓外の板の上で、御飯もグツグツ白く吹きこぼれていた。

「炭もう来たの……。」

「下の叔母さんに借りたのよ。」

いつも台所をした事のない時ちゃんが、珍らしそうに、茶碗をふいていた。

久し振りに、猫の額程の茶づ台の上で、幾年にもない長閑なお茶を呑む。

「やまと館の人達や、当分誰にもところを知らさないでおきましょうね。」

時ちゃんはコツクリをして、小さな火鉢に手をかざす。

「こんなに雪が降っても出掛ける？」

「うん。」

「じゃあ私も時事新聞の白木さんに会ってこよう、童話がいつてるから。」

「もらえたら、熱いものしといて、あっちこっち行つて見るから、私はおそくなるよ。」
始めて、隣の六畳間の古着屋さん夫婦にもあいさつをする。

鳶の頭をしていると云う、下のお上さんの旦那にも会う。

皆、齒ぎれがよくて下町人らしい。

「前は道路へ面していたんですよ、でも火事があつて、こんなところへ引つこんじやつて……前はお妾さん、露路のつきあたりは清元でこれは男の師匠でしてね、やかましいには、やかましゅうござんすがね……。」

私はおはぐろで齒をそめているお上さんを珍らしく見た。

「お妾さんか、道理で一寸見たけどいゝ女だったよ。」

「でも下の叔母さんが、あんたの事を、此近所には一寸居ない、いゝ娘ですつてさ。」

二人は同じような銀杏返しをならべて雪の町へ出た。

雪はまるで、気の抜けた泡のように、目も鼻もおおい隠そうとする程、元気に降つていった。

「金もうけは辛いね。」

ドンドン降ってくれ、私が埋まる程、私はえこじに、傘をクルクルまわして歩いた。どの窓にも灯のついている八重洲の通りは、紫や、紅のコートを着た、務めする女の人達が、やつぱり雪にさからっている。

コートも着ない私の袖は、ぐつしより濡れてしまつて、みじめなヒキ蛙。

白木さんはお歸えりになつた後か、そうれ見ろ！

これだから、やつぱりカフェーで働くと云うのに、時ちゃん勉強しろと云う。広い受付けに、このみじめな女は、かすれた文字をつらねて、困っておりますからおきまりの置手紙を書いた。

だが時事のドアーは面白いな、クルリクルリ、水車、クルリと二度押すと、前へ逆もどり、郵便屋が笑っていた。

何と小さき人間達よ、ビルデングを見上げると、お前なんか一人生きてたつて、死んだつて同じじゃないかと云う。

だが、あのビルデングを売ったら、お米も間代も一生はらえて、古里に長い電報が打てるだろう。

ナリキンになるなんて、云つてやつたら、邪けんな親類も、冷たい友人も、驚くだろう。

あさましや芙美子

消えてしまえ。

時ちゃんは、かじかんで、この雪の中を野良犬のように歩いているんだろうに――

二月×日

あゝ今晚も待ち呆け。

箱火鉢で茶をあたゝめて、時間はずれの御飯をたべる。

もう一時すぎなのになあ――。

昨夜は二時、おとゝいは一時半、いつも十二時半にはきちんと帰っていた人が、時ちゃんに限って、そんな事もないだろうけれど……。

茶づ台の上には、若草への原稿が二三枚散らばっている。

もう家には拾壺銭しかないのだ。

きちんきちんと、私にしまわせていた拾円たらずのお金を、いつの間にか持って出てし

まって、昨日も聞きそこなってしまったが。

蒸してはおろし、蒸してはおろしするので、御飯はビチャビチャしていた。浜鍋の味噌も固くなってしまった。インガな人だなあ、原稿も書けないので、鏡台のそばに押しやつて、淋しく床をのべる。

あゝ髪結さんにも行きたいなあ、もう十日あまりも銀杏返しをもたせて、地がかゆい。帰えつて来る人が淋しいだろうと、電気をつけて、紫の布をかけておく。

三時。

下のお上さんのブツブツ云う声に目を覚ますと、ドタン、ドタン時ちゃんが大きな足音で上つて来る。酔っぱらっているらしい。

「すみません！」

蒼ざめた顔に、髪を乱して、紫のコートを着た時ちゃん、蒲団の裾にくず折れると、まるで駄々っ子のように泣き出してしまった。

私は言葉をあんなに用意してまっていたのに、一言も云えなくて沈黙っていた。

「さよなら時ちゃん！」

若々しい男の声が消ると、露路口で間抜けた自動車の警笛が鳴った。

二月×日

二人共面伏せな気持ちで御飯をたべた。

「此頃は少しなまけているから、梯子段を拭いてね、私洗濯するから……。」

「私するから、こゝほつといていゝよ。」

寝ぶそくな、はれぼつたい時ちゃんの瞼を見ると、たまらなくいじらしくなる。

「時ちゃん、その指輪どうして……。」

かぼそい薬指に、サンゼンと白い石が光って台はプラチナだった。

「紫のコートは……。」

「……」

「時ちゃんは貧乏が厭になっちゃった？」

私は下の叔母さんに顔を合わせる事は肌が痛くなる。

「姉さん！　時坊は少しどうかしてますよ。」

水道の水と一緒に、叔父さんの言葉が痛く来た。

「近所のでまえがありまさあね、夜中に自動車をブウブウやられちゃあね、町内の頭なんだから、一寸でも風評が立つと、うるさくてね……。」「

あゝ御もつとも様で、洗いものをしている脊にビンビン言葉が当って来る。

二月×日

時ちゃんが帰らなくなつて五日。

ひたすらに時ちゃんのたよりを待つ。

彼の女はあんな指輪や、紫のコートのおとりに負けてしまった。

生きてゆくめあてのないあの女の落ちてゆく道かも知れない。

あんなに貧乏はけつして恥じやあないと云つてあるのに……十八の彼の女は紅も紫も欲しかった。私は五銭あつた銅銭で、駄菓子を買つて来ると、床の中で古雑誌を読みな

がらたべた。

貧乏は恥じやあないと云ったものゝあと五ツの駄菓子、しよせん私の胃袋をさいどしてはくれぬ。手を延ばして押し入れをあけて見る。白菜の残りをつまみ、白い御飯の舌ざわりを空想する。

何もない。

漠々。

涙がにじんで来る。

電気でもつけよう……駄菓子ではつまらないと見えて腹がグウグウ……辛気に鳴る。隣の古着屋さんの部屋では、ジ……と秋刀魚を焼く強烈な匂いがある。

食慾と性慾！

時ちゃんじゃないが、せめて一碗のめしにありつこうか。

食慾と性慾！

私は泣きたい気持ちで、此の言葉を噛んだ。

二月×日

芙美子さま。

何も云わないでかんにんして下さい。指輪をもらった人に強迫されて、浅草の待合に居ます。

妻君があるんですけど、それは出してもいゝって云うんです。

笑わないで下さい。その人は請負師で、今四十二です。

着物を沢山こしらえてくれましたの貴女の事も話したら、四拾円位は毎月出してあげると云ってました。

私嬉しいんです。

読むにたえない時ちゃんの手紙の上に、こんな筈ではなかったと、涙が火のようにむせ
た。

歯が金物のようにガチガチ鳴った。

私がそんな事をいつたのんだ！ 馬鹿馬鹿こんなにも、こんなにもあの十八の女はもろ
かったのか！

目が円くふくれ上がって、見えなくなる程泣きじやくった私は、時ちゃんへ向って呼んで見た。

所を知らせないで。浅草の待合なんて……。

四十二の男！

きもの、きもの。

指輪もきものもなんだ真念のない女よ！

あゝでも、野百合のように可憐であつたあの姿、きめの柔かい桃色の肌、黒髪、あの女はまだ処女であつた。

何だつて、最初のペエセをそんな、浮世のボオフラのような男にくれてやってしまったんだろう……愛らしい首を曲げて、

春は心のかはたれに……

私に唄ってくれたあの少女が……四十二の男よ呪ろわれてあれ！

「林さん書留めですよッ！」

珍らしく元気のいゝ叔母さんの声に、梯子段に置いてある日本封筒をとり上げると、時の白木さんからの書留め。

金貳拾参円也！ 童話の稿料。

当分ひもじいめをしなくてすむ。胸がはずむ、狂人水を呑んだようにも。でも何か一脈の淋しい流れが胸にあった。

嬉しがつてくれる相棒が、四十二の男に抱かれている。

白木さんの手紙。

いつも云う事ですが、元気で御奮闘を祈る。

私は窓をいっぱいあけて、上野の鐘を聞いた。晩は寿司でも食べよう。

酒屋の二階

十二月×日

「飯田がね、鰻でなぐつたのよ……厭になつてしまう……。」「

飛びついて来て、まあ芙美子さんよく来たわ！ と云ってくれるのを楽しみにしていた私は、長い事待つて、暗い露路からシヨボシヨボ出て来たたい子さんを見ると、自動車や、行李や、時ちゃん、非常に重荷になつて、来なければよかったんじゃないかと思えた。「どうしましようね、今さらあのカフェーに逆もどりも出来ないし、少し廻つて来ましようか、飯田さんも、私に会うのバツが悪るいでしょうから……。」「

「えゝ、ではそうしてね。」「

私は運転手の吉さんに行李をかついでもらうと、酒屋の裏口の薬局みたいな上りばなに転がしてもらつて、今度は軽々と、時ちゃんと二人で自動車に乗った。

「吉さん！ 上野へ連れて行つておくれよ。」「

時ちゃんは、ぶざまな行李がなくなつたので、キツキツとはしやぎながら、私の両手を振った。

「芙美ちゃん！ 大丈夫かしら、たい子さんって人、貴女の親友にしちゃあ、随分冷たい人ね、泊めてくれるかしら……。」

「大丈夫よ、あの人はあんな人だから、気にかけないでもいゝのよ。大船に乗ったつもりでいらつしやい。」

二人は、でもおのおのの淋しさを噛み殺していた。

「何だか心細くなつて来たね。」

時ちゃんは淋しそうに涙ぐんでいた。

「もうこれッ位でいゝだろう、俺達も仕事しなくちゃいけないから。」

十時頃だ、星がチカチカ光っていた。

十三屋の櫛屋のところで、自動車を止めてもらうと、時ちゃんと私は、小さい財布を出しあつた。

「街中乗つてもらつたんだから、いくらかあげなきやあ……。」

吉さんは、私達の前に汚れた手を出すと、

「馬鹿！ 今日のは俺のセンベツだよ。」

吉さんの笑い声が大きかったので、櫛屋の人達もビックリしてこつちを見ていた。

「じゃ何か食べましょう、私の心がすまないから。」

私は二人を連れ、と、広小路のお汁粉屋にはいった。吉さんは甘いもの好きだから。

——ホラお汁粉一杯上ったよ！

——ホラも一ツあとから上ったよ！

お爺さんのトンキョウな有名な呼び声にも今の淋しい二人には笑えなかった。

「吉さん！ 元気でいてね。」

時ちゃん、吉さんの鳥打ち帽子の内側をクンクンかきながら、子供っぽく目をキロキロさせていた。

歩いて本郷の酒屋へ帰った時は、もう十二時近かった。

夜のカンカンに冷たい舗道の上を、グルグル湯気にとりまかれた。支那蕎麦屋の灯が通
おっているきりで、二人共沈黙して白い肩掛を胸にあわせた。

二階に上って行くと、たい子さんはいなくて、見知らない紺がすりの青年が、火のない火鉢に、しょんぼり手をかざしていた。

恋人かな……私は妙に白々とした空間をみやっていた。寒い。齒がガチガチふるえる。

「たい子さん帰えられなければ寝られないの？」

時ちゃんは、私の肩にもたれて、心細げに聞く。

「寝たつていゝのよ、当分こゝにいられるんだもの、蒲団出してあげるよ。」

押入れをあけると、プンと淋しい一人ぐらしの匂いをかいだ。たい子さんだつて淋しいんだ……大きなアクビにごまかして、袖で瞳をふくと、うすいたなの下に時ちゃんをねせつけた。

「貴女は林さんでしょう……。」

その青年はキラリと眼鏡を光らせて私を見た。

「僕山本虎造です。」

「あゝそうですか、たいさんに始終聞いてました。」

なあんだ、しびれの切れた足を急に投げだすと、寒いですなと云う話からほぐれて来た。

色々話していると、段々この青年のいゝ所がめにたつて来る。

——私は一生懸命あいつを愛しているんですが……。

山本さんは涙ぐむと、火鉢の灰をかきならしていた。

たい子さんは幸福だなあ……私は別れて間もない男の事を思った、あんなに私をなぐつていたあの男に、この山本さんの純情が十分の一でもあつたら……時ちゃんはスヤスヤいびきをかいている。

「では僕帰りますから、明日の夕方にでも来るように云って下さいませんか。」

もう二時すぎである。青年はコトコト路を鳴らして帰えつて行つた。たい子さんは、あのひとの子供の骨を転々持つて歩いてしたが、どうしたろう、折れた鰻が散乱している。

十二月×日

雨がざんざん降っている。

夕方時ちゃんと二人で風呂に行く。

帰えつて髪をときついていると、飯田さん来る。

私は袖のほころびを縫いながら、カフェーでおぼえた唄を　フツとうたいたくなつた。

あゝ厭になつてしまふ。

別れてまでノコノコ女のそばへ来る位なら飯田さんもおかしい人だなあ……。

「こんなに雨が降るのに行くの……。」

たい子さんは佗しそうに、ふところ手をして私達を見た。

浅草へ来た時は夕方だった。

ざんざ降りの中を一軒一軒、時ちゃんの住み込みよさそうな家をさがして、きまったのはカフエー世界と云う家だった。

「芙美ちゃんどつかへ引越す時は知らしてね、たい子さんによろしく云つてね。」

時ちゃんには、真実いとしいものがあつた。

野性的で、行儀作法は知らないけれど、いゝところが多分にあつた。

「久しぶりで、別れのお酒もりでもしようか……。」

「おごつてくれる……。」

「体を大事にして、にくまれないようにね。」

都寿司にはいると、お酒を一本つけてもらって、私達はいゝ気持ちに横ずわりになった。雨がひどいので、お客も少ないし、バラックでも、落ちついた家だった。

「一生懸命勉強してね。」

「当分会えないね、時ちゃん、私もう一本呑みたい。」

時ちゃんはうれしそうに手を鳴らした。

時ちゃんをカフェーに置いて帰えると、たい子さんは一生懸命書きものをしていた。

九時頃山本さん来る。

私は一人で寢床をひくと、たい子さんより先に寝る。

十二月×日

フツと眼を覚ますと、せまい蒲団なので、私はたい子さんと抱きあつてねむっていた。二人ともクスリツと笑いながら、脊をむけた。

「起きない。」

「私いくらでも眠りたい……。」「

たい子さんは白い腕をニュツと出すと、カーテンをめくって、陽の光りを見た。

トントン梯子段を上って来る音がする。

たい子さんは無意識に、手を引っこめると、

「寝たふりをしてましよう、うるさいから。」

私とたいさんは抱きあつて寝たふりをしていた。

やがてサリと襖があくと、寝ているの？ と呼びかけながら山本さんはいって来る。

山本さんが私達の枕元に座ったので、一寸不快になる。

しかたなく目をさました。たい子さんは、

「こんなに朝早く来て寝てるじやありませんか。」

「でも務め人は、朝か夜かでなきあ来られないよ。」

私はじつと目をしていた。

どうなるものか、たいさんのやり方も手ぬるい。

厭なら厭じやと最初から、云えばスツトトンで通やせぬ……。

と云う唄もあるではないか。

今日から街は諒闇である。

昼からたい子さんと二人で、銀座の方へ行ってみる。

「私ね、原稿書いて、生活費位出来るから、うるさいあそこを引きはらって、郊外に住みたいと思うわ……。」

たいさんは、茶色のマントをふくらませて電気のスタンドをショーウインドに見ると、それを買うのが唯一の理想のように云った。

歩ける丈け歩きましょう。

銀座裏の奴寿司で腹が出来ると、黒白の幕を張った街並を足をそろえて歩いた。

今日は二人のおまつりだ。

朝でも夜でも牢屋はくらい……

いつでも鬼メが窓からのぞく。

二人は日本橋の上に来ると、子供らしく、欄干に手をのせて、漂々と飛んでいる、白い鷗を見降した。

一種のコオフンは私達には薬かも知れない

二人は幼稚園の子供のように

足並をそろえて街の片隅を歩いていた

同じような運命を持った女が

同じように瞳と瞳をみあわせて淋しく笑ったのです。

なにくそ！

笑え！ 笑え！ 笑え！

たった二人の女が笑ったって

つれない世間に遠慮は無用だ

私達も街の人達に負けないで

国へのお歳暮をしましょう

鯛はいゝな

甘い匂いが嬉しいのです

私の古里は遠い四国の海辺

そこには

父もあり

母もあり

家も垣根も井戸も樹木も……

ねえ小僧さん！

お江戸日本橋のマークのはいつた

大きな広告を張っておくれ

嬉しさをもたない父母が

どんなに喜んで遠い近所に吹ちようして歩く事でしよう

——娘があなた、お江戸の日本橋から買って送って下れましたが、まあ一ツお上りなしてハイ……。

信州の山深い古里を持つ

かの女も

茶色のマントをふくらませ

いつもの白い歯で叫んだのです。

——明日は明日の風が吹くから、ありったけのぜにで買って送りましょう……

小僧さんの持った木箱には

さつまあげ、鮭のごまふり、鯛の飴干し

二人は同じような笑いを感受しあつて

日本橋に立ちました。

日本橋！ 日本橋！

日本橋はよいところ

白い鴟が飛んでいた。

二人はなぜか淋しく手を握りあつて歩いたのです。
ガラスのように固い空気なんて突き破って行こう

二人はどん底を唄いながら

気ぜわしい街ではじけるように笑いました。

私は食物の持つ、なつかしい木箱の匂いを胸に抱いて、国へのお歳暮を楽しんだ。

十二月×日

「こんやは、庄野さんが遊びに来てよ、ひよつとすると、貴女の詩集位いは出してくれるかもわからない、福岡日々の社長の息子ですつてよ……。」

たいさんと二人でいつもの夕飯を食べ終ると、二人は隣りの部屋の、軍人上りの株屋さんだと云う、子持ちの夫婦者のところへ、まねかれて行く。

「貴女達は呑気そうですね。」

たいさんも私もニヤニヤ笑っている。

お茶をよばれながら、三十分も話をしていると、庄野さんがやって来た。インバネスを着て、ゾロゾロした格構だ。

此人は酔っぱらっているんじゃないかと思う程クニヤクニヤしていた、でも人の良さそ

うな坊ちゃんだが。

こんな人に詩集を出してもらったって仕様がなない。

私は菓子を買って来た。炬燵にあたって三人で雑談する。

飯田さんと、山本さん二人ではいつて来る。たゞならない空気だ。

「×××××！」

飯田さんが最初に投げつけた言葉はこれであつた。たい子さんの額に、インキ壺が飛ぶ、唾が飛ぶ、私は男への反感がむらむらと燃えた。

「何をするんです。又たい子さんもどうしたのこれは……。」

たいさんは、ボウダと涙をせぐりあげながら話した、飯田にいじめられていると、山本のいゝところが浮ぶのです。山本のところへ行くと、山本がものたりなくなるのです。

「どっちをお前は本当に愛しているのだ！」

飯田さんは、悪党だ。私は二人の男がにくらしかつた。

「何だ貴方達だって、いゝかげんな事してるじゃないかッ！」

「なにッ！」

飯田さんはキラリと私を睨む。

「私は飯田を愛しています。」

たい子さんはキツパリ云い切ると、飯田さんをジロリと見上げた。

私はたいさんが憎らしかった、こんなにブジョクされて……山本さんは溝へ落ちた鼠のように、しよんぼりすると、蒲団は僕のものだから持つてかえると云い出した。

すべてが渦である。

たい子さんはいち早く山田清三郎氏のところへ逃げに行った。

私はブツブツ云いながら三人の男たちと外に出た。

カフェーにはいつて、酒を呑む程に、酔がまわる程に、四人はますますくだらなくなつて来る。

庄野さんは、下宿へ来て泊れと云う。蒲団のない寒さを思うと、私は庄野さんと自動車に乗つて、舌たらずのギコウにまけてなるものか、私は酒に酔ったまねが大変上手だ。

二人はフトンの上に、二等分に帯をひっぱって寝た。

「山本君だつて飯田君だつて、たいさんだつてあとで聞いたら、関係があると云うかも知

れないね。」

「云ったつていゝでしょう。貴方も公明正大なら、私も公明正大ね、一夜の宿をしてくれないでしよう。蒲団がなけりや仕様がな」

私は出もどりのヴァージンだ。どつかに、一生をたくす男がある筈だ、私は、私に許された領分だけ手足をのばして目をとじた。

たいさんも宿が出来たかしら……目頭に熱い涙が湧いた。

「庄野さん！ 明日起きたら、御飯食べさせてね、お金もかしてね、原稿を新聞にかくから……。」

私は朝まで眠ってはならないと思つた。男のコオフン状態なんて、政治家と同じようなものさ、駄目だと思つたらケロリとしている。

明日になったら、又どつかへ行くみちをみつけなくちゃあ……。

十二月×日

ゆかいな朝だ、一人の男に打ち勝つて私は意気ようようと、酒屋の二階に帰える。

たいさんが帰っていた。畳の上で何か焼いた跡らしく、点々と焦げて、たいさんの茶色のマントが、散々に破られていた。

「庄野さんそこへ昨夜泊ったのよ。」

たいさんはニヤリと笑った。

私はもう捨てばちである。

たいさんは結婚するかも知れないと云う。うらやましくて仕様がなない。

今は只沈黙っていたいと云う、淋しかったが、たいさんの顔は更生に輝いていた。

はじめな者は私一人じゃないか、私はぺしやんこにくず折れた気持ちで、片づけて行くたい子さんの白い手を見ていた。

どくだみ
三白草の花

九月×日

今日も亦あの雲だ。

むくむくと湧き上る雲の流れを私は昼の蚊帳の中から眺めていた。

今日こそ十二社に歩いて行こう——そうしてお父さんやお母さんの様子を見てこなくちやあ……私はお隣りの信玄袋に凭れている大学生に声を掛けた。

「新宿まで行くんですが、大丈夫でしょうかね。」

「まだ電車も自動車もありませんよ。」

「勿論歩いて行くんですよ。」

此青年は沈黙って無気味な雲を見ていた。

「貴方はいつまで野宿をなさるおつもりですか？」

「さあ、此広場の人達がタイキヤクするまで、僕は原始にかえったようで、とても面白いです。」

チエツ生嚼じりの哲学者メ。

「御両親のところ、当分落ちつくんですか……。」

「私の両親なんて、私と同様に貧乏で間借りですから、長くは居ませんよ、十二社の方は焼けてやしないでしょうね。」

「さあ、郊外は×××が大変だそうですね。」

「でも行つて来ましょう。」

「そうですか、水道橋までおくつてあげましょう。」

青年は土に突きさした洋傘を取つて、クルクルまわしながら、雲の間から、霧のように降りて来る灰をはらつた。

私は四畳半の蚊帳をたゝむと、崩れかけた下宿へ走つた。宿の人達は、ゴソゴソ荷物を片づけていた。

「林さん大丈夫ですか、一人で……。」

皆が心配してくれるのを振りきつて、私は木綿の風呂敷を一枚持つて、モウモウとした

道へ出た。

根津の電車通りは、みゝずのようにかぼそく野宿の群がっらなっていた。

青年は真黒に群れた人波をわけて、くるくる黒い洋傘をまわして歩いている。

私は下宿に、昨夜間代を払わなかった事を何か奇蹟のように思えた。お天陽様相手に行動をしている、お父さん達の事を思うと、此三拾円ばかりの月給も、おろそかにつかえない。

途中壺升壺円の米を二升買う。

外に朝日五ツ。

干しうどんのくず五拾銭買う。

お母さん達が、どんなに喜こんでくれるだろう。じりじりした暑さの中に、日傘のない私は、長い青年の影をふんで歩いた。

「よくもこんなに焼けたもんだ！」

私は二升の米を肩を替えながら脊負って歩くので、はつか鼠くさい体臭がムンムンして厭だった。

「すいとても食べましょうか。」

「私おそくなるから止しますわ。」

青年は長い事立ち止って汗をふいていたが、洋傘をくるくるまわすと、それを私に突き出して云った。

「これで五十銭借して下さい。」

私は伽話的な青年の行動に好ましい微笑を送った。そして気もちよく桃色の五拾銭札を二枚出して青年の手にのせてやった。

「貴方お腹がすいてたんですね……。」

「ハッ……。」青年はほがらかに哄笑した。

「地震つて素的だな！」

十二社までおくつてあげると云う、青年を無理に断わって、私はテクテク電車を歩いた。

あんなに美しかった女性達が、たった二三日のうちに、みんな灰っぽくなって、桃色の蹴出しは、今は用のない花である。

十二社についた時は、日暮れだった。四里はあるだろう。私は棒のようにつつぱった足を、父達の間借りの家へ運んだ。

「まあ入れ違いですよ、今日引越していらっしたんですよ。」

「まあ、こんな騒ぎにですか……。」

「いゝえ、私達が、こゝをたゝんで帰国しますから。」

私は呆然としてしまった。番地も何も聞いておかなかったと云う関西者らしい薄情さを持った髪のうすい此女を憎らしく思った。

私は堤の上の水道のそばに、米を投げるようにおろすと、深々と煙草を吸った。少女らしい涙がにじんで来る。

遠くつゞいた堤のうまごやしの花は、兵隊のように、皆地びたにしゃがんでいる。

星がチカチカ光りだした。野宿をするべく心をきめた私は、なるべく人の多いところへ。堤を降りると、とつスキの歪んだ床屋の前に、ポプラで囲まれた広場があった。

そして、二三の小家族が群れていた。

「本郷から、大変でしたね……。」

人のいゝ床屋のお上さんは店から、アンペラを持って来て、私の為に寢床をつくってくれた。

高いポプラがゆっさゆっさ風にそよぎ出した。

「これで雨にでも降られたら、散々ですよ。」

夜警に出かける、年とつた御亭主が、鉢巻きをしながら、空を見て、つぶやいた。

九月×日

朝。

久し振りに、古ぼけた床屋さんの鏡を見る。

まるで山出しの女中さんだ、私は苦笑しながら、髪をかきあげた。油っ気のない髪が、バラバラ額にかゝって来る。

床屋さんに、お米二升お礼に置く。

「そんな事ではいけませんよ。」

お上さんは一丁ばかりもおつかけて、お米をゆさゆさ抱えて来た。

「実は重いんですから……。」

そう云つてもお上さんは、二升のお米を困る時があるからと云つて、私の脊に無理に脊負わせてしまった。

昨日来た道である。

相変らず、足は棒のようになってゐる。若松町まで来ると、膝が痛くなつてしまった。

すべては天真ランマンにぶつつかう、私は、罐詰の箱をいっぱい積んでゐる自動車をみると、矢もたてもたまらなくなつて叫んだ。

「乗つけてくれませんかッ！」

「どこまで行くんですッ！」すべては、かくほがらかである。

私はもう両手を罐詰の箱にかけていた。

順天堂前で降ろされると、私は投げるように、四ツの朝日を運転手達に出した。

「ありがとう。」

「姉さんさよなら……」

私が根津の権現様の広場へ帰った時、大学生は、例の通り、あの大きな傘の下で、気味の悪い雲を見ていた。そして、その傘の片隅には、シャツを着たお父さんがしょんぼり煙草をふかしていた。

「入れ違いじゃったそうなの……。」もう二人共涙である。

「いつ来た！ 御飯たべた！ お母さんは……」

矢つぎ早やの私の言葉に、父は、昨夜×××と間違えられながらやつと来たら入れ違いだった事や、帰えないので、学生さんと話しあかした事など物語った。

私はお父さんに、二升の米と、半分になった朝日と、うどんの袋を持たせると、汗ばんでしっとりしている拾円札を壹枚出して父にわたした。

「もらつてえゝかの？……。」

お父さんは子供のようにわくわくしている。

「お前も一しよに帰えらんかい。」

「番地さえ聞いておけば大丈夫よ、二三日内に又行くから……。」

道を、叫んで行く人の声を聞いていると、私もお父さんも切なかった。

「産婆さんはお出になりませんかッ……どなたか産婆さん御存知ではありませんかッ！」

九月×日

街角の電信柱に、始めて新聞が張り出された。

久し振りに、なつかしいたよりを聞くように、私も多勢の頭の後から、新聞をのぞいた。

——灘の酒造家よりの、お取引先きに限り、大阪まで無料にてお乗せいたします。定員

五拾名。

何と素晴らしい文字よ。

あゝ私の胸は嬉しさではち切れそうだった。

私の胸は空想でふくらんだ、酒屋でなくったってかまうものか。

旅へ出よう。

美しい旅の古里へ出よう。

海を見て来よう――。

私は二枚ばかり単衣を風呂敷に包むと、帯の上に脊負って、それこそ漂然と、誰にも沈黙って下宿を出た。

万世橋から乗合馬車に乗って、まるでこわれた羽子板のように、ガツクン、ガツクン首を振って長い事芝浦までゆられた。

道中費、金七拾錢也。

高いような、安いような、何だか降りた時は、お尻がピリピリ痺れてしまっていた。

すいとん――うであずき――おこわ――果実――こうした、ごみごみと埃をあびた露店をくぐって行くと、肥料くさい匂いがぶんぶんして、築港には、鷗のように白い水兵達が群れていた。

「灘の酒船の出るところはどこでしょうか。」

飛魚のように、ボートのいっぱい並んでいる小屋のそばの天幕の中に、その事務所があった。

「貴女お一人ですか……。」

事務員の人達は、みすばらしい私の姿をジロジロ注視した。

「え、そうです、知人が酒屋をしまして、新聞を見せてくれたのです。是非乗せて戴きたいのですが……国で皆心配してますから。」

「大阪からどちらです。」

「尾道です。」

「こんな時は、もう仕様おまへん、お乗せしますよつてに、これ落さんように持つて行きなはれ……。」

ツルツルした富久娘のレツテルの裏に、私の東京の住所と姓名と年と、行き先きを書いたのを渡してくれた。

これは面白くなつて来た。

何年振りに尾道へ行く事だろう。あゝあの海、あの家、あの人……お父さんや、お母さ

んは、借金が山程あるんだから、どんな事があっても、尾道へは行かぬように、と云ったけど、少女時代を過ごしたあの海添いの町を、一人ぼっちの私は恋のようにあこがれた。

「かまうもんか、お父さんだって、お母さんだって知らなけりや、いゝんだもの？」

鴟のような水夫達の間をくゞって、酒の香のなつかしい酒荷船へ乗り込んだ。

七拾人ばかりの中に、女は私と、いゝ取引先のお嬢さんであろう水色の服を着た女と、美しい柄の浴衣を着た女と三人きりである。その二人のお嬢さん達は、青い莫座の上に始終横になって、雑誌を読んだり、果物を食べたりしていた。s

私と同じ年頃なのに、私はいつも古い酒樽の上に腰かけているきりで、彼の女達は、私を見ても一言も声を掛けてはくれない。

「へエ！ お高く止っているよ。」

あんまり淋しいんで、声に出してつぶやいてみた。

女が少ないので、船員達が皆私の顔を見る。

あゝこんな時にこそ、サンゼンと美しく生れて来ればよかった。

つかい古した胡弓のような私。私は切なくなつて、船底へ降りると、鏡をなくした私は、ニツケルのしゃぼん箱を膝でこすつて、顔をうつしてみた。

せめて着物でも着替えよう。井筒の模様の浴衣にきかえると、落ちついた私の胸に、ドツポンドツポン波の音が響く。

九月×日

もう五時頃であろうか、様々な人達の物凄い寢息と、蚊にせめられて、夜中私は眠れなかった。

私はそつと上甲板に出ると、ホツと息をついた。

美しい朝あけである。

乳色の涼しいしぶきの中を蹴つて、此古びた酒荷船は、颯々と風を切つて走っている。月もまだ寝わすれている。

「暑くてやり切れねえ！」

機関室から上つて来た、たくましい菜っ葉服を肩にかけた船員が朱色の肌を拡げて、海の涼風を呼んでいる。

美しい風景である。

マドロスのお上さんも悪るくはないな。無意識に美しいポーズをつくっている、その船員の姿をじつと見ていた。

その一ツ一ツのポーズのうちから、苦るしかった昔の激情を呼びおこした。

美しい朝あけである。

清水港が夢のように近かづいて来る。

船乗りのお上さんも悪るくはないな。

午前八時半、味噌汁と御飯と香の物で朝食が終る、お茶を吞んでいると、船員達が甲板を叫びながら走って行く。

「ビスケットが焼けましたから、いらっして下さい！」

上甲板に出ると、焼きたての、ビスケットを両の袂にいっぱいもらった。お嬢さん達は

貧民にでもやるように眺めて笑っている。

あの人達は、私が女である事を知らないでいるらしい。二日目である、一言も声をかけてはくれぬ。

此船は、どここの港へも寄らないで、一直線に海を急いでいるのだから嬉しい。

料理人の人が「おはよう！」と声をかけてくれたので、私は昨夜寝られなかった事を話した。

「実は、そこは酒を積むところですから蚊が多いんですよ、今日は船員室でお寝なさい。」此料理人は、もう四十位だろうか、私と同じ位の脊の高さなのでとてもおかしい。

私を部屋に案内してくれた。

カーテンを引くと押入れのような寝台である。

その料理人は、カーネエションミルクをポンポン開いて私に色んなお菓子をこしらえてくれた。小さいボーイが、まとめて私の荷物を運んで来ると、私はその寝台に長々と寝そべった。

一寸頭を上げると円い窓の向うに大きな波のしぶきが飛んでいる。

今朝の美しい機関士も、ビスケットをポリポリかみながら一寸覗いて通る。私は恥かしいので、寝たふりをして顔をふせていた。

ジンジン肉を焼く油の匂いがする。

「私はね、外国航路の厨夫なんですが、一度東京の震災も見度いと思ひましてね、一と船休んで、こっちに連れて来て貰ったんですよ。」

大変丁寧な物云いをする人である。

私は高い寝台の上から、足をぶらさげて、御馳走を食べた。

「後でないしよでアイスクリームを製つてあげますよ。」

真実、この人は好人物らしい。神戸に家があつて、九人の子持ちだとかぼしていた。

船に灯がはいると、今晩は皆船底に集つてお酒盛りだと云う。

料理人の人達はてんでこ舞いで急がしい。

私は灯を消して、窓から河のように流れ込む潮風を吸っていた。

フツと私は、私の足先きに、生あたくかい人肌を感じた。

人の手だ！

私は枕元のスイッチを捻った。

鉄色の大きな手が、カーテンに引つこんで行くところである。

妙に体がガチガチふるえる。どうなるものか、私は大きなセキをした。

カーテンの外に唳鳴っている料理人の声がする。

「生意気な！ 汚ない真似しよると承知せんで！」

サツとカーテンが開くと、料理鉋丁のキラキラしたのをさげて、料理人が、一人の若い男の脊を突いてはいって来た。

そのむくんだ顔に覚えはないが、鉄色のその手にはたしかに覚えがあった。

何かすさまじい争闘が今にもありそうで、その料理鉋丁の動く度びに、私はキヤツとした思いで、親指のようにポキポキした料理人の肩をおさえた。

「くせになりますよッ！」

機関室で、なつかしいエンジンの音がする。

手をはなすと、私は沈黙ってエンジンの音を聞いた。

秋の昏

十月八日

呆然と梯子段の上の汚れた地図を見てみると、蒼茫とした夕暮れの日射しに、地図の上は落寞とした秋であつた。

寝ころんで、煙草を吸っていると、訳もなく涙がにじんで、細々と佗しくなる。

地図の上では、たった二三寸の間なのに、可哀想なお母さんは四国の海辺で、朝も夜も私の事を考えて暮らしているだろうに――。

風呂から帰えつて来たのか、下で女達の姦しい声がする。

妙に頭が痛い、用もない日暮れだ。

寂しければ海中にさんらんと入ろうよ、

さんらんと飛び込めば海が胸につかえる泳げば流るる、

力いっぱい踏んばれ岩の上の男。

秋の空気があんまり青いので、私は白秋のこんな唄を思い出した。

あゝ此世の中は、たったこれだけの楽しみであつたのか、ヒイフウ……私は指を折つて、さゝやかな可哀想な自分の年を考えてみた。

「おゆみさん！ 電気つけておくれッ。」

お上さんの癪高い声がする。

おゆみさんか、おゆみとはよくつけたもの私の母さんは阿波の徳島。

夕御飯のおかずは、いつもの通り、するめの煮たのにコンニャク、そばでは、出前のカツが物々しい示威運動、私の食欲はもう立派な機械になりきってしまったて、するめがそしやくされないうちに、私は水でゴクゴク咽喉へ流し込む。

貳拾五円の蓄音器は、今晚もずいずいところばし、ごまみそずいだ。

公休日で朝から遊びに出ていた十子が帰えつて来る。

「とても面白かったわ、新宿の待合室で四人も私を待ってたわよ、私知らん顔して見て、

やった……。―

その頃女給達の仲間には、何人もの客に一日の公休日と共にする約束をして一つ場所に集合させて、すつぽかす事が流行っていた。

「私今日は妹を連れて活動見たのよ、自腹だから、スツテンテンよ、かせがなくちや場錢も払えない。」

十子は汚れたエプロンをもう胸にかけて、皆にお土産の甘納豆をふるまっていた。
今日は病氣。胸くるしくつて、立っている事が辛い。

十月×日

夜中一時。折れた鉛筆のように、女達は皆ゴロゴロ眠っている。
雑記帳のはじめにこんな手紙をかいてみる。

――静栄さん。

生きのびるまで生きて来たという気持です。

随分長い事合いませんね、神田でお別れしたきりですもの……。

もう、しやにむに淋しくてならない、広い世の中に可愛がつてくれる人がなくなつたと思ふと泣きたくなります。

いつも一人ぼつちのくせに、他人の優さしい言葉をほしがっています。そして一寸でも優さしくされると、嬉し涙がこぼれます。大きな声で深夜の街を唄でもうたつて歩きたい。夏から秋にかけて、異常体になる私は働きたくつても働けなくなつて弱っています。故、自然と食う事が困難です。

金が慾しい。

白い御飯にサクサクと齒切れのいゝ沢庵でもそえて食べたら云う事はないのに、貧乏すると赤ん坊のようになる。

明日はとても嬉しいんです、少しばかりの原稿料がはいります、それで私は行けるところまで行つてみたいと思います。

地図ばかり見ているんですが、ほんとに、何の楽しさもない此カフエーの二階で、私を空想家にするのは、梯子段の上の汚れた地図です。

ひよつとしたら、裏日本の市振と云う処へ行くかも知れません。生きるか死ぬるか、とに角、旅へ出たい。

弱き者よの言葉は、そっくり私に頂戴出来るんですが、それでいいと思う、野性的で行儀作法を知らない私は、自然へ身を投げかけてゆくより仕方がない。此儘の状態では、国への仕送りも出来ないし、私の人に対しても済まない事だらけです。

私はがまん強くよく笑って来ましたが、旅へ出たら、当分田舎の空や土から、健康な息を吹きかえすまで、働いて来るつもりです。

体が悪るのが、何より私を困らせます。それに又、あの人も病気ですし、厭になってしまふ。金がほしいと思います。

伊香保の方へ下働きの女中にでもと談判したのですが、一年間の前借百円ではあんまりだと思えます。

何のために旅をすると思いますでしょうけど、とに角、此まゝの状態では、私はハレツしてしまいます。

人々の思いやりのない雑言の中に生きて来ましたが、もう何と言われたっていゝ私はへこたれてしまった。

冬になったら、十人力に強くなってお目にかゝりましょう、いちかばちか行くところまで行きます、私の妻であり夫である、たった一つの信ずる真黄な詩稿を持って、裏日本へ

行つて来ます。お体を大切に、さよなら――。

――あなた。

フツツリ御無沙汰して、すみません。

お体は相変らずですか、神経がトゲトゲしているあなたに、こんな手紙を差し上げるとあなたは、ひねくれた笑いをなさるでしょう。

私、実さい涙がこぼれるんです。

いくら別れたと云つても、病氣のあなたの事を思うと、佗しくなります。困った事や、嬉しかった思い出も、あなたのひねくれた仕打ちを考えると、恨めしく味気なくなります。壺円札二枚入れて置きました、怒らないで何かにつかつて下さい。あの女と一緒にいないんですってね、私が大きく考え過ぎたのでしょうか。

秋になりました、私の唇も冷く凍つてゆきます。あなたとお別れしてから……。
たいさんも裏で働いています。

――オカアサン。

オカネ、オクレテ、スミマセン。

アキニ、ナツテ、イロイロ、モノイリガ、シテ、オクレマシタ。

カラダ、ゲンキデスカ。ワタシモ、ゲンキデス。コノアイダ、オクツテ、クダサツ
タ、ハナノクスリ、オツイデノトキ、スコシオクツテクダサイ、センジテノムト、ノ
ボセガ、ナオツテ、カホリガ、ヨロシイ。

オカネハ、イツモノヤウニ、ハンヲ、オシテ、アリマスカラ、コノマヽキヨクエ、
トリニユキナサイ。

オトウサンノ、タヨリアリマスカ、ナニゴトモ、トキノクルマデ、ノンキニシテイ
ナサイ、ワタシモ、コトシワ、アクネンユエ、ジツトシテイマス。

ナニヨリモ、カラダヲ、タイセツニ、イノル、フウトウ、イレテオキマス、ヘンジ
クダサイ。

フミヨリ。

私は顔中涙でぬらしてしまった、せぐりあげても、せぐりあげても泣声が止まない。

こうして一人になって、こんな荒れたカフェーの二階で手紙を書いていると、一番胸に

来るのは、老いたお母さんの事だった。

私が、どうにかなるまで、死なゝいで下さい、此まゝであの海辺で死なせるのは、みじめすぎる。

あした局へ行つて、一番に送つてあげよう、帯芯の中には、さゝけた壺円札が六七枚もたまっている、貯金帳は、出たりはいつたりで、いくらもない。木枕に頭をふせているとくるわの二時の拍子木がカチカチ鳴っている。

十月×日

窓外は愁々とした秋景色。

小さなバスケット一ツに一切をたくして、私は興津行きの汽車に乗る。

土気を過ぎると小さなトンネルがあつた。

サンブロンむかしロオマの巡礼の

知らざる穴を出でて南す。

私の好きな万里の歌である。

サンプロンは、世界最長のトンネルだけど一人のこうした当のない旅でのトンネルは、なぜかしんみりとした気持ちになる。

海へ行く事がおそろしくなった。

あの人の顔や、お母さんの思いが、私をいたわっている、海まで走る事がこわくなった。

三門で下車する。

ホタホタ灯がつきそめて、駅の前は、桑畑、チラリホラリ、藁屋根が目につく、私はバスケットをさげたまゝ、ぼんやり駅に立ちつくしてしまった。

「こゝに宿屋ありますか？」

「此の先の長者町までいらつしやるとあります。」

私は日在浜を一直線に歩いていった。

十月の外房州の海は、黒々ともれ上つて、海のおそろしいまでの情熱が私をコオフンさせてしまった。

只海と空と砂浜、それも暮れ初めている。自然である。なんと人間の力のちっぽけな事

よ、遠くから、犬の吠える声がする。

かすりの伴天を着た娘が、一匹の黒犬を連れて、歌いながら急いで来た。

波がトンキョウに大きくしぶきすると、犬はおびえたように、キリツと正しく首をもたげて、海へ向つて吠えた。ヴォウ！　ヴォウ！

遠雷のような海の音と、黒犬の唸り声は何か神秘的な力を感じずにはいられなかった。

「此辺に宿屋ありませんか！」

この砂浜にたった一人の人間である、この可憐な少女に私は呼びかけた。

「私のうち宿屋ではないが、よかつたらお泊りなさい。」

何と不安もなく、その娘は、漠々とした風景の中のたった一つの赤い唇に、うすむらさきの、なぎなたほうずきを、クリイ、クリイ鳴らしながら、私を連れて後へ引返してくれた。

日在浜のはずれ、丁度長者町にかゝった、砂浜の小さな破船のような茶屋である。

此茶屋の老夫婦は、気持ちよく風呂をわかしてくれたりした。

こんな延々と、自然のまゝの姿で生きていられる世界もある。

私は、都のあの荒れた酒場の空気を思い出すさえおそろしく思った。天井には、何の魚の尻尾か、かさかさに乾いたのが張りつけてある。

此部屋の灯も暗らければ、此旅の女の心も暗い。

何もかも事足りなくて、あんなに憧憬れていた裏日本の秋も見ることが出来なかったが、此外房州は、裏日本よりも大まかな気がする。市振から親不知へかけての民家の屋根に、沢庵石のようなものが、ゴロゴロ置いてあったのや、線路の上まで、白いしぶきのかゝるあの蒼茫たる風景、崩れた崖の上に、紅々と空に突きさしていたあざみの花、皆何年か前のなつかしい思い出だ。

私は磯臭い蒲団にもぐり込むと、バスケットから、コロロホルムのびんを出して、一二滴ハンカチに落した。

此まゝ消えてなくなりたい今の心に、じつと色々な思いにむせている事がたまらなくなつて、私は厭なコロロホルムの匂いを押し花のように鼻におし当てた。

十一月×日

遠雷のような汐鳴りの音と、窓を打つ鑼々たる雨の音に、私がぼんやり目を覚ましたのは、十時頃だろうか、コロロホルムの酢の様な匂いが、まだ部屋中流れているようで、私はそつと窓を開けた。

入江になった渚に、蒼い雨が煙っていた。しつとりとした朝である。母屋でメザシを焼く匂いがプンプンする。

昼から、あんまり頭がズキズキ痛むので、娘と二人黒犬を連れて、日在浜に出て見る。

渚近い漁師の家では、女子供が三々五々群れて、生鰯を竹串につきさしていた。竹串にさゝれた生鰯が、兵隊のように並んだ上に、雨あがりの薄陽が銀を散らしていた。

娘は馬穴^{ばけつ}にいっぱい生鰯を入れてもらうとその辺の雑草を引き抜いてかぶせた。

「これで拾銭ですよ。」

帰えり道、娘は重そうに馬穴^{ばけつ}を私の前に出してこう云った。

夜は生鰯の三バイ酢に、海草の煮つけに生玉子、娘はお信さんと云って、お天気の良い日は千葉から木更津にかけて、魚の干物の行商に歩くのだそう。

店で茶をすゝりながら、老夫婦にお信さんと雑談していると、水色の蟹が敷居の上をガクガク這って行く。

生活に疲れ切った私は、石ころのように動かない此人達の生活を見ると、そぞろうらやましく、切なくなってしまう。

風が出たのか、ガクガクの雨戸が、難破船のようにキイコ、キイコゆれて、チエホフの小説にでもありそうな古風な浜辺の宿、十一月にはいると、もう足の裏が冷々つつめたい。

十一月×日

富士を見た

富士山を見た

赤い雪でも降らねば

富士をいゝ山だと賞めるに当らない。

あんな山なんかに負けてなるものか

汽車の窓から何度も思った回想

尖った山の心は

私の破れた生活を脅かし

私の瞳を寒々と見降ろす。

富士を見た

富士山を見た

烏よ！

あの山の尾根から頂上へと飛び越えて行け！

真紅な口でカラアとひとつ嘲笑ってやれ

風よ！

富士はヒワヒワとした大悲殿だ

ビュン、ビュン吹きまくれ

富士山は日本のイメージだ

スフィinksだ

夢の濃いノスタルジヤだ

魔の住む大悲殿だ。

富士を見ろ！

富士山を見ろ！

北斎の描いたかつてのお前の姿の中に

若々しいお前の火花を見たが……………

今は老い朽ちた土まんじゅう

ギロギロした瞳をいつも空にむけているお前――

なぜやくぎな

不透明な雲の中に逃避しているのだ！

烏よ！ 風よ！

あの白々とさえかえった

富士山の肩を叩いてやれ

あれは銀の城ではない

不幸のひそむ大悲殿だ

富士山よ！

お前に頭をさげない女がこゝに一人立っている

お前を嘲笑している女がここにいる

富士山よ

富士よ！

颯々としたお前の火のような情熱が

ビュンビュン唸って

ゴウジョウな此女の首を叩き返えすまで

私はユカイに口笛を吹いて待っている。

私はまた元のおゆみさん、胸にエプロンをかけながら、二階の窓をあけに行くと、ほんのひとなめの、薄い富士山が見える。

あゝあの山の下を私は何度不幸な思いをして行き返えりした事だろう。でもたとえ小さな旅でも、二日の外房州のあの亮々たる風景は、私の魂も体も汚れのとれた美しいものにしてしまった。

旅はいゝ、野中の一本杉の私は、せめてこんな楽しみでもなければやりきれない。

明日から紅葉デーで、私達は狂人のような真紅な着物のおそろいだそうな、都会はあとからあとから、よくもこんなチカチカした趣考を思いつくものだ。

又新しい女が来ている。

今晚もお面のようにお白粉をつけて、二重な笑いでごまかしか……うきよとはよくも云い当てしものかな――。

留守中、お母さんから、さらしの襦袢二枚送って来る。

目標を消す

十一月×日

浮世離れて奥山ずまい……

ヒヅクな唄にかこまれて、私は毎日玩具のセルロイドの色塗り。

日給七拾五錢也の女工さんになって四ヶ月、私が色塗りした蝶々のお垂げ止めは、懐かしいスブニールとなつて、今頃はどこへ散乱して行つた事だろう――。

日暮里の金杉から来ているお千代さんは、お父つあんが寄席の三味線ひきで妹弟六人の裏家住い、「私とお父つあんとで働かなきゃあ、食えないんですもの……。」お千代さんは蒼白い顔をかしげて、佗しそうに赤い絵具をベタベタ蝶々に塗っている。

こゝは、女工が二十人、男工が十五人の小さなセルロイド工場、鉛のように生気のない女工さんの手から、キュウピーがおどけて出たり、夜店物のお垂げ止めや、前帯芯や、様々な下層階級相手の粗製品が、毎日毎日私達の手から洪水の如く流れて行く。

朝の七時から、夕方の五時まで、私達の周囲は、ゆでイカのような色をしたセルロイドの蝶々や、キュウピーでいっぱいだ。

文字通り護謄臭い、それ等の製品に埋れて仕事が進むまで、めったに首をあげて、窓も見られない状態だ。

事務所の会計の妻君が、私達の疲れたところを見計らっては、皮肉に油をさしに来る。「急いでくれなくちゃ困るよ。」

フンお前も私達と同じ女工上りじゃないか、「俺達や機械じゃねえんだよつ。」発送部の男達が、その女が来ると、舌を出して笑いあつた。

五時になると、二十分は私達の労力のおまけだ、日給袋のはいった策が廻って来ると、私達はしばらくは、激しい争奪戦を開始して、自分の日給袋を見つけ出す。

襷を掛けたまゝ工場の門を出ると、お千代さんが、後から追って来た。

「あんた、今日市場の方へ寄らないの、私今晚のおかずを買って行くの……。」

一皿八銭の秋刀魚は、その青く光った油と一緒に、私とお千代さんの両手にかゝえられて、サンゼンと生臭い匂いを二人の胃袋に通わせた。

「この道を歩いている時だけ、あんた、楽しいと思つた事ない。」

「本当にね、私ホツとするわ。」

「あゝあんたは一人だからうらやましいわ。」

お千代さんの束ねた髪に、白く埃がつもっているのを見ると、街の華やかな、一切のものに火をつけてやりたいようなコオフンを感じる。

十一月×日

なぜ？

なぜ？

私達はいつまでもこんな馬鹿な生き方をしなければならないのか！　いつまでたつても、セルロイドの唄、セルロイドの匂い、セルロイドの生活だ。

朝も晩も、ベタベタ三原色を塗りたくつて、地虫のように、太陽から隔離されて、歪んだ工場の中で、コツコツ無限に長い時間を青春と健康を搾取されている、あの若い女達のプロフィールを見ていると、ジンと悲しくなる。

だが待つて下さい。

私達のつくっている、キュウピーや、蝶々のお垂げ止めは、貧しい子供達の頭をお祭のようにかざる事を思えば、少し少しあの窓の下では、笑んでもいいだろう――。

二畳の部屋には、土釜や茶碗や、ボール箱の米櫃や、行李や、机が、まるで一生の私の負債のようになんぼって、なゝめにひいた蒲団の上に、天窓の朝日がキラキラして、ワンワン埃が縞のようになって流れて来る。

いったい革命とは、どこを吹いている風なんだ……中々うまい言葉を沢山知っている。

日本のインテリゲンチヤ、日本の社会主義者は、お伽噺を空想しているのか！

あの生れたての、玄米パンよりもホヤホヤの赤ん坊達に、絹のむつきと、木綿のむつきと一たいどれ丈の差をつけなければならぬのだ！

「お芙美さん！ 今日工場休みかい！」

叔母さんが障子を叩きながら呶鳴っている。

「やかましいね！ 沈黙つてろ！」

私は舌打ちすると、妙に重々しい頭の下に両手を入れて、今さら重大な事を考えたけど、涙がふりちぎって出るばかり。

お母さんのたより一通。

たとえ五拾銭でもいいから送ってくれ、私はレウマチで困っている、此家にお前とお父さんが早く帰って来るのを、楽しみに待っている、お父さんの方も思わしくないと云うたよりだし、お前のくらし向きも思う程でないと聞くと、生きているのが辛い。

たどたどしいカナ文字の手紙、最後に上様ハハよりと書いてあるのを見ると、お母さんを手で叩きたい程可愛くなる。

「どつか体でも悪いのですか。」

此仕立屋に同じ間借りをしている、印刷工の松田さんが、遠慮なく障子を開けてはいって来る。

背丈が十五六の子供のように、ひくゝて、髪を肩まで長くして、私の一等厭なところをおし気もなく持っている男だった。

天井を向いて考えていた私は、クルリと脊をむけると蒲団を被ってしまった。

此人は有難い程深切者である。

だが会っていると、憂鬱なほど不快になって来る人だ。

「大丈夫なんですか！」

「えゝ体の節々が痛いんです。」

店の間では、商売物の菜っ葉服を叔父さんが縫っているらしい、ジ……と齒を嚙むようなミシンの音がする。

「六拾円もあれば、二人で結構暮せると思うんです。貴女の冷い心が淋しすぎる。」
枕元に石のように座った、此小さい男は、苔のように暗い顔を伏せて私の上にかぶさつて来る。

激しい男の息づかいを感じると、私は涙が霧のようにあふれて来た。

今まで、こんなに優しい言葉を掛けて私を慰さめてくれた男があつただろうか、皆々私を働かせて煙のように捨てゝしまったではないか。

此人と一緒にゐて、小さな長屋にでも住つて、世帯を持とうか、でもあんまり淋しすぎる。十分も顔を合わせていたら、胸がムカムカして来る此小さな男。

「済みませんが、私体具合が悪るいんです、ものを言うのが、おつくうですの、あつちい行つてゝ下さい。」

「当分工場を休んで下さい。その間の事は僕がします。たとえばあなたが僕と一緒に出来なくなっても、僕はいゝ気持ちなんです。」

まあ何てチグハグな世の中であらう――。

夜。

米を一升買いに出る。

序手に風呂敷をさげたまゝ逢初橋の夜店を歩く。

剪花屋、ロシヤパン、ドラ焼屋、魚の干物屋、野菜屋、古本屋、久々で見る楽しい路上風景だ。

十二月×日

ヘエ！ 街はクリスマスでござんすとよ。

救世軍の慈善鍋も飾り窓の七面鳥も、ブルジョワ新聞も、一勢に街に氾濫して、ビラも広告旗も血まなこになってしまふ。

暮れだ、急行列車だ。

あの窓の風があんなに動いている。能率を上げなくてはと、汚れた壁のボールドには、二十人の女工の色塗りの仕上げ高が、毎日毎日数字になって、まるで天気予報みたいに、私達をおびやかすようになった。

規定の三百五十の仕上げが不足の時は、五銭引き、拾銭引きと、日給袋にびらびらケープのような伝票が張られて来る。

「厭んなっちゃうね……。」

女工はまるで、サ、ラのように腰を浮かせて、御製作だ。

同じ絵描きでも、これは又あまりにコツケイな、ドミエの漫画ではないか。

「まるで人間を芥だと思ってやがる。」

五時の時計が鳴っても、仕事はドンドン運ばれて来るし、日給袋は中々廻りそうもない。工場主の小さな子供達を連れて、会計の妻君が、四時頃自動車で出掛けて行ったのを、一番小さいお光ちゃんが、便所の窓から見ていて、女工達に報告すると、芝居だつて云ったり、活動だつて云つたり。正月の着物でも買いに行つたのだらうと言つたり、手を働かせながら、女工達の間にはまちまちの論議が噴出した。

七時半。

朝から晩まで働いて、六拾銭の労働の代償、土釜を七輪に掛けて、机の上に茶碗と箸を並べると、つくづく人生とはこんなものかと思つた。

ごたごた文句を言っている奴等の横ツ面をひっぱたいてやりたい。

御飯の煮える間に、お母さんへの手紙の中に長い事して貯めた桃色の五拾銭札五枚入れて封をする。

残金十六銭也。

たつた今、何と何がなかつたら楽しいだろうと空想して来ると、五円の間代が馬鹿らしくなつた。二疊で五円である。

一日働いて米が二升きれて平均六拾銭、又前のようにカフエーに逆もどりしようか、あまたゝび、水をくゞつて、私と一緒に疲れきつた壁の銘仙の着物を見ていると、味気なくなる。

ハイハイ私は、お芙美さんは、ルンペンプロレタリアで御座候だ。何もない。

何も御座無く候だ。

あぶないぞ！ あぶないぞ！ あぶない無精者故、バクレツダンを持たしたら、喜んで持たせた奴等にぶち投げるだろう。

こんな女が、一人うじうじ生きているより早くパンパンと、××を真二ツにしてしまおうか。

熱い飯の上に、昨夜の秋刀魚を伏兵線にして、ムシヤリ頬ばると生きている事もまんざらではない。

沢庵を買った古新聞に、北海道にはまだ何万町歩と云う荒地があると書いてある。あゝ、そう云う未開の地にプロレタリアの、ユウトウピヤが出来たら愉快だろうな。

鳩ぽつぽつと云う唄が出来るかも知れないな。

皆で仲よく飛んでこいつて云う唄が流行るかも知れないな。

湯から帰えりしな、暗い路地で松田さんに会う、私は沈黙って通り抜けた。

十二月×日

「何も変な風に義理立てしないで、松田さんが、折角借して上げると云うのに、お美美さんも借りたらいゝじゃないの、実さい私の家は、あんた達の間代を当にしているんですから。」

髪の薄い叔母さんの顔を見ていると、おん出てしまいたい程、くやしくなる。

これが出掛けの戦争だ。急いで根津の通りへ出ると、松田さんが、酒屋のポストの傍で、ハガキを入れながら私を待っていた。

ニコニコして本当に好人物なのに、私はムカムカしてしまう。

「何も云わないで借りて下さい。僕はあげてもいゝんですが、貴女がこだわると困るから……。」

塵紙にこまかく包んだ金を私の帯の間にはさもうとした、私は肩上げのとなつてない昔の羽織を気にしながら、妙にてれくさくなつてふりほどいて電車に乗ってしまった。

どこへ行く当てもない。

正反対の電車に乗ってしまった私は、白々とした上野にしょんぼり自分の影をふんで降

りた。

どうしよう。

狂人じみた口入れ屋の高い広告灯が、難破船の信号みたように、ハタハタしていた。

「お望みは……。」

牛太郎のような番頭に、まず私はかたずを呑んで、商品のような求人のビラを見上げた。「辛い事をやるのも一生、楽な事をやるのも一生、姉さん良く考えた方がいゝですよ。」

肩掛もしていない。此みすばらしい女に、番頭は目を細めて値ぶみを始めたのか、ジロジロ私の上下に目を流している。

下谷の寿司屋の女中さんに紹介をたのむと、壹円の手数料を五拾銭にまけてもらって、公園に行く。

今にも雪の降って来そうな空模様なのに、ベンチの浮浪人達は、朗らかな鼾声をあげて眠っている。

西郷さんの銅像も浪人戦争の遺物。

貴方と私は同じ郷里なんですよ。鹿児島が恋しいとお思いませんか、霧島山が桜島が、城山が、熱いお茶にカルカンの甘味い頃ですね。

貴方も私も寒そうだ。

貴方も私も貧乏だ。

昼から工場に出る。生きるは辛し。

十二月×日

昨夜机の引き出しに入れてあった、松田さんの心づくし、払えばいゝんだ借りておこうかな、弱き者汝の名は貧乏なり。

家へかえる時間となるを

ただ一つ待つことにして

今日も働けり。

啄木はこんな楽そうに家にかえる事を歌っている、私は工場から帰えると棒のようにつつぱった足を二畳いっぱいに延ばして、大きなアクビをする、それがたった一つの楽しさだ。

二寸ばかりのキュウピーを一ツごまかして、茶碗をのせる棚に、のせて見る。

私の描いた瞳、私の描いた羽根、私が生んだキュウピーさん、冷飯に味噌汁をザクザクかけて、かき込む淋しい夜食。

松田さんが、妙に大きいセキをしながら窓の下を通ると、台所からはいつて、声をかける。

「もう御飯ですか、少し待っていらつしやい肉を買って来たんですよ。」

松田さんも同じ自炊生活、仲々しまった人らしい。

石油コンロで、ジ……と肉を煮る匂いが、切なく口を濡す。

「済みませんが此葱切ってくれませんか。」

昨夜、無断で人の部屋の机の引き出しを開けて、金包みを入れておいたくせに、そうして、たった拾円ばかりの金を借して、もう馴々しく、人に葱を刻ませようとしている。

あんな人間に図々しくされると一番たまらない。

遠くで餅をつく勇ましい音が聞える。

私は沈黙ってボリボリ大根の塩漬を噛んでいたが、台所の方も佗しそうに、コツコツ葱

を刻み出した。

「あゝ刻んであげましょう。」

沈黙っているにはしのびない悲しさで、障子を開けて、松田さんの鉋丁を取った。

「昨夜はありがとう、五円叔母さんに払って、五円残ってますから、五円お返ししときますわ。」

松田さんは沈黙って竹の皮から滴るように紅い肉片を取って鍋に入れていた。ふと見上げた歪んだ松田さんの顔に、小さい涙が一滴光っていた。

奥では弄花が始ったのか、叔母さんの、いつものヒステリー声がビンビン天井をつき抜けて行く。

松田さんは沈黙ったまま米を磨ぎ出した。

「アラ、御飯まだ焚かなかったんですか。」

「えゝ貴女が御飯を食べていらつしたから、肉を早く上げようと思って。」

洋食皿に割けてもらった肉が、どんな思いで私の食道を通ったか。

私は色んな人の姿を思い浮べた。

そしてみんなくだらなく思えた。

松田さんと結婚してもいゝと思えた、始めて松田さんの部屋へ遊びに行く。

松田さんは、新聞紙をひろげて、ゴソゴソさせながら、お正月の餅をそろえて箆へ入れていた。

あんなにも、なごやかにくずれていた気持ちだが、又前よりもさらに凄くキリ、ツと弓をはって、私はそつと部屋へ帰った。

「寿司屋もつまらないし……」

外は嵐。

キュウピーよ、早く鳩ポツポだ。

吹き荒さめ、吹き荒さめ、嵐よ吹雪よ。

——何だかあんまり長くなりましたので、これで一寸ひとやすみしましょう。気分が新らしくなりましたら、又続けます。長谷川氏及び愛読者諸氏の好意を謝します。筆

者
—

裸になつて

四月×日

今日はメリヤス屋の安さんの案内で、親分のところへ酒を入れる。

道玄坂の漬物屋の露路口に、土木請負の看板をくゞつて、奇麗ではないが、ふきこんだ格子を開けると、いつも昼間場所割りをしてくれるお爺さんが、火鉢のそばで茶をすゝつていた。

「今晚から夜店をしなさるつて、昼も夜も出しやあ、今に銀行が建ちましようよ。」
お爺さんは人のいゝ高笑いをして、私の持つて行つた一升の酒を受取つた。

誰も知人のない東京だ。恥ずかしいも糞もあつたもんじやない。ピンからキリまである東京だ。裸になり次手に、うんと働いてやろう。私は辛かった菓子工場の事を思うと、気が晴れ晴れとした。

夜。

私は女の万年筆屋さんと、当のない門札を書いているお爺さんの間に、店を出した。

蕎麦屋で借りた雨戸に私はメリヤスの猿股を並べて「貳拾錢均一」の札をさげると万年筆屋さんの電気に透して、ランデの死を読む。

大きく息を吸うともう春だ。この風には、遠い遠い思い出がある。

舗道は灯だ。人の洪水だ。

瀬戸物屋の前には、うらぶれた大学生が、計算記を売っている。

「諸君！ 何万何千何百に、何千何百何十加えればいくらになる。皆判らんか、よくもこんなに馬鹿がそろつたものだ。」

高飛車に出る、こんな商売も面白いものだな。

お上品な奥様が、猿股を貳拾分も捻つて、たった一ツ買つて行く。

お母さんが弁当持つて来る。

暖かになると、妙に汚れが目につく、お母さんの着物も、さくく来て来た。木綿を一反買つてあげよう。

「私が少し変るから、お前御飯お上り。」

お新香に竹輪の煮つけが、瀬戸の重ね鉢にはいつている。舗道に脊をむけて食べていると、万年筆屋の姉さんが、

「そこにもある、こゝにもあると云う品物ではござりません。お手に取って御覧下さいまし。」

私はふつと塩っぱい涙がこぼれた。

母はやつと一息ついた今の生活が嬉しいのか、小声で時代色のついた昔の唄をうたっている。

たつたつたつ田の中で……

九州へ行っている父さんさえこれでよくなったら、当分はお母さんの唄でないが、たつたかたのただ。

四月×日

水の流れのような、薄いシヨールを街を歩く娘さん達がしている。一ツ欲しいな。洋品店の四月の窓飾りは、金と銀と桜の花だ。

空に拡った桜の枝に

うつすらと血の色が染まると

ほら枝の先から花色の糸がさがって
情熱のくじびき

食えなくてボードビルに飛び込んで
裸で踊った踊り子があつたとしても
それは桜の罪ではない。

ひとすじの情

ふたすじの義理

ランマンと咲いた青空の桜に

生きとし生ける

あらゆる女の

裸の唇を

するする奇妙な糸がたぐって行きます。

花が咲きたいんじゃない

強権者が花を咲かせるのです

貧しい娘さん達は

夜になると

果実のように唇を

大空へ投げてやるのですってさ

青空を色どる桃色桜は

こうしたカレンな女の

仕方のないくちづけなのですよ

そっぽをむいた

唇の跡なんですよ。

シヨールを買う金を貯める事を考えたら、ゼントリヨウエンなので割引きの活動見に行く。フィルムは鉄路の白バラ。

途中雨が降り出したので、活動から飛び出すと店に行く。

お母さんは莫塵をまるめていた。

いつものように、二人で荷物を脊負って、駅へ行くと、花見帰えりの金魚のようなお嬢さんや、紳士達が、夜の駅にあふれて、藻のようにくねっていた。

二人は人を押しわけて電車へ乗る。

雨が土砂降りだ。いゝ気味だ。もっと降れもっと降れ。花がみんな散ってしまうといゝ。暗い窓に頬をよせて外を見ると、お母さんがしょんぼりと子供のように、フラフラしているのが写っている。

電車の中まで意地悪がそろっているものだ。

九州からの音信なし。

四月×日

雨にあたつて、お母さんが風を引いたので一人で店を出しに行く。

本屋には新らしい本がプンプン匂っている買いたいな。

泥濘にて道悪し、道玄坂はアンコを流したような舗道だ。一日休むと、雨の続いた日が困るので、我慢して店を出す。

色のベタベタにじんでいる街路に、私と護謨靴屋さんきりだ。

女達が私の顔を見てクスクス笑つて通る。頬紅が沢山ついているのか知ら、それとも髪がおかしいのか知ら、私は女達を睨み返えしてやった。

女ほど同情のないものはない。

ポカポカお天気なのに道が悪い。昼から隣にかもじ屋さん店を出す。湯銭が弍銭上つたところぼしていた。

昼はうどん二杯たべるの——拾六銭也——

学生が、一人で五ツも買つて行つてくれた。今日は早くしまつて芝へ仕入れに行つて来

よう。

帰えり鯛焼きを拾銭買う。

「安さんがお前、電車にしかれて、あぶないちゅうが……。」「

帰えると、母は寢床の中から叫んだ。

私は荷を脊負ったまゝ、呆然としてしまった。

昼過ぎ、安さんの家の者が知らせに來たと母は書きつけた病院の紙をさがしていた。

夜芝の安さんの家へ行く。

若いお上さんが、眼を泣き腫らして、病院から帰えつて來た。

少しばかり出来上っている品物をもらつてお金を置いて帰える。

世の中は、よくもよくもこんなにひどいだけになるものだ。昨日まで、元氣にミシンのペタルを押していた安さん夫婦を思い出す。春だと云うのに、梅が咲いたと云うのに、私は電車の窓に凭れて、赤坂のお濠の灯をいつまでも眺めていた。

四月×日

父より長い音信来る。

長雨で、飢えにひとしい生活をしていると云う。花壺へ貯めていた十四円の金を、お母さんが皆送ってくれと云う。明日は明日だ。

安さんが死んでから、あんな軽便な猿股も出来なくなってしまった。もう疲れきった私達は、何もかもがメンドくさくなってしまった。

「死んだ方がましだ。」

十参円九州へ送る。

「わし達や三畳でよかけん、六畳ば誰ぞに貸さんかい。」

かしま、かしま、かしま、私はとても嬉しくなって、子供のように書き散らすと、鳴子坂の通りへ張りに出た。

寝ても覚めても、結局死んでしまいたい事に落ちるが、なにくそ！ たまには米の五升も買いたいものだ。お母さんは近所の洗い張りでもしようかと云うし、私は女給と芸者の

広告がめにつく。

縁側に腰かけて、日向ぼっこしていると、黒い土から、モヤモヤ湯気がたっている。

五月だ、私の生れた五月だ。歪んだガラス戸に洗った小切れをベタベタ張っていたお母さんは、フツと思い出した様に云った。

「来年はお前の運勢はよかぞな、今年はお前も、お父さんも八方塞りじゃで……。」

明日から、此八方塞りはどうしてゆくつもりか！ 運勢もへったくれもあつたものじゃない、次から次から悪運のつながりだ。

腰巻きも買ったし。

五月×日

かしまはあんまり汚ない家なので、まだ誰も来ない。

お母さんは八百屋が借してくれたと云って大きなキャベツを買って来た。キャベツを見ると、フクフクと湯気の立つ豚カツでもかぶりつきたいな。

がらんとした部屋の中で、寝ころんで天井を見ていると、鼠のように、小さくなって、色んなものを食い破って歩いたらユカイだろうと思った。

夜の風呂屋で、母が聞いて来たと云つて、派出婦になったらと相談した。いゝかも知れない。だが生れつき野性の私である。金満家の家風にペコペコする事は、腹を切るより切ない事だ。だが、お母さんの佗し気な顔を見ていたら、涙がダボダボあふれた。

腹がへつても、ひもじゅうないとかぶりを振っている時じゃないんだ、明日から、今から飢えて行く私達なのだ。

あゝあの拾参円はとゞいたか知ら、東京が厭になった。早くお父さんがゆとりをつけてくれるといゝ。九州もいゝな四国もいゝな。

夜更け、母が鉛筆をなめなめお父さんにたよりを書いているのを見て、誰かこんな体でも買ってくれる人はないかと思つたりした。

五月×日

朝起きたらもう下駄が洗つてあつた。

いとお母さん！

大久保百人町のゆりのやと云う派出婦会に行く。

中年の女の人二人店の間で縫いものをしていた。

人がたりなかったので、その主人は、デンプィウのようなものと地図を私にくれた。行く先は、薬学生の助手だと云う。

道を歩いている時が、一番ゆかいだ。五月の埃をあびて、新宿の陸橋をわたって、市電に乗ると、街の風景が、真に天下タイヘイにごさ候と旗をたてゝいるようだ。此街を見ていると、何も事件がないようだ。買いたいものがぶらさがっている。

私は桃割の髪をかしげて、電車のガラス窓でおした。

本村町で降りると、邸町になった露路の奥にそのうちがあつた。

「御めん下さい。」

大きな家だな、こんなでかい家の助手になれるか知ら……、何度もかえろうかと思いがら、ぼんやり立ちつくした。

「貴女派出婦さん！ 派出婦会から、何時に出たって電話がかゝって来たのに、おそいで、坊ちゃん怒ってらつしやるわ。」

私に通されたのは、洋風なせまい応接室。

壁には、色の褪せたミレーの晩鐘の口絵のようなのが張ってあった。面白くもない部屋だ。腰掛けは得たいが知れない程ブクブクしていた。

「お待たせしました。」

何でも此男の父親は日本橋で薬屋をしているとかで、私の仕事は薬の見本の整理で、わけのない事だった。

「でもそのうち、僕の方の仕事が急がしくなると、清書してもらいたいのですがね、それに一週間程したら、三浦三崎の方へ研究に行くんですが来てくれますか。」

此男は廿四五かな、私は若い男の年が、ちつとも判らないので、じつと脊の高いその人の顔を見ていた。

「いつそ派出婦の方を止して、毎日来ませんか。」

私も、派出婦って、いかにも品物みたいな感じのするところよりその方がいゝと思ったので、一ヶ月三十五円で、約束してしまった。

紅茶と、洋菓子が日曜の教会に行ったように少女の日を思い出させた。

「君はいくつですか？」

「廿一です。」

「もう肩上げをおろした方がいゝな。」

私は顔が熱くなった。

卅五円毎月つづくといゝな。だがこれも当分信じられはしない。

母は、岡山の祖母がキトクだと云う電報を手にしていた。私にも母にも縁のない祖母さんだが、たった一人の義父のお母さんだし、これも田舎で、しょんぼりと、さなだ帯の工場に、通っている一人の祖母さんが、キトクだと云う。どんなにしても行かなくてはいけない。九州の父へは、四五日前に金を送ったばかりだし、今日行ったところへ金を借りに行くのも厚かましいし。

私は母と一緒に、四月もためているのに家主のそこへ行く。

拾円かりて来る。沢山利子をつけて返えそうと思う。

残りの御飯を弁当にして風呂敷に包んだ。

一人旅の夜汽車は佗しいものだ。まして年をとつてゐるし、さゝくれた身なりのまゝで、父の国へやりたくはないが、二人共絶体絶命のどんづまり故、沈黙って汽車に乗るより仕

方がない。

岡山までの切符を買ってやる。

薄い灯の下に、下ノ関行きの急行列車が沢山の見送り人を吸いつけていた。

「四五日内には、前借りをしますから、そしたら、送りますよ。しっかりと行つていらつしやい。しよぼしよぼしたら馬鹿よ。」

母はくっくツ涙をこぼしていた。

「馬鹿ね、汽車賃は、どんな事しても送りますからね。安心して、お祖母さんのお世話していらつしやい。」

汽車が出てしまうと、何でもなかった事が悲しく切なく、目がぐるぐるまいそうだった。省線を止めて東京駅の前に出る。

長い事クリームを塗らないので、顔が、ヒリヒリする。涙が止度なく馬鹿みたいに流れる。

信ずる者よ来れ主のみもと……

遠くで救世軍の楽隊が聞える。何が信ずるものでござんすかだ。自分の事が信じられなくて、たとえイエスであろうと、お釈迦さんであろうと、貧しい者は信じるヨユウがない、宗教なんて何だ。食う事に困らないものだから、街にジンタまで流している。

信ずる者よ来れ……。まだ気のきいた春の唄がある。

いつそ、銀座あたりの美しい街で、こなごなに血へどを吐いて、××さんの自動車にでもしかれてやろうか。

いとお母さん、今貴女は戸塚、藤沢あたり、三等車の隅っこで何を考えています、どの辺を通っています……。

卅五円が続くといゝな。

お濠には、帝劇の灯がキラキラしている。私は汽車の走って行く線路を空想した。何もかも何もかもじつとしている。天下タイヘイで御座候か――。

旅の古里

六月×日

海が見える。

海が見える。

五年振りに見る、旅の古里の海！ 汽車が尾道の海へさしかゝると、煤けた小さい町の屋根が、提灯のように拡がつて来る。

赤い千光寺の塔が見える、山は若葉だ、海のむせた緑色の向うに、ドックの赤い船が、キリキリした帆柱を空に突きさしている。

私は涙があふれた。

借金だらけの私達親子三人が、東京行きの夜汽車に乗った時、町はずれに大きい火事があつたが……。

「ねえ、お母さん！ 私達の東京行きに、火が燃えるのは、きつといゝ事がありますよ。」
しよぼしよぼ隠れるようにしている親達を私は、こう言つて慰めたが、東京でむかえに来てくれる者は、学校へ行っている、私の男一人であつた。

だが、あれから、あしかけ六年、私はうらぶれた体で、再び旅の古里である尾道へ逆もどりしている。その男も、学校を出ると、私達を置きざりにして、尾道の向うの因の島へ歸えつてしまつた。

気の弱い両親をかゝえた私は、当もなく昨日まで、あの雑音のはげしい東京を放浪していたが、あゝ今は旅の古里の海辺だ。海添いの遊女屋の行灯が、つばきのように白く点々と見える。

見覚えのある屋根、見覚えのある倉庫、かつて自分の住居であつた、海辺の朽ちた昔の家が、じつと息している。

何もかも懐しい姿だ。少女の頃に吸つた空気、泳いだ海、恋をした山の寺、何もかも、逆もどりしているような気がする。

尾道を去る時の私は、肩上げもあつたが、今の私の姿は、銀杏返し、何度も水をくぐつた疲れた単衣、別にこんな姿で行きたい家もないが、兎に角、もう汽車は尾道、肥料臭

い匂いがする。

午後五時

船宿の時計が五時をさしている。待合所の二階から、町の灯を見ていると、妙に目頭が熱くなる。訪ずねて行こうと思えば、行ける家もあるが、それもメンドウクサイ、切符を買ってあと、五十錢玉一ツの財布をもって、私はしよんぼり、島の男の事を思い出した。

楽書きだらけの汽船の待合所の二階に、木枕を借りて、つつぷしていると、波止場に船が着いたのか、ヴォ！　ヴォ！　汽笛の音、人の下り降りの雑音が、フツと悲しく胸に聞えた。

「因の島行きが出やんすで……。」「ガクガクの梯子段を上って、客引きが知らせに来ると、花火のようにやけた、縞のはいった、こうもりと、小さい風呂敷包みをさげて、波止場へ降りて行つた。

「ラムネいりやせんか！」

「玉子買うてつかアしやア。」

物売りの声が、夕方の波止場の上を満たしている。

紫色の波にゆれて、因の島行きのポツポ船が、ドツポンドツポン白い水を吐いていた。漠々たる浮世だ。

あの町の灯の下で、ポオルとヴィルジニイを読んだ日もあつた。借金取りが来て、お母さんが便所へ隠れたのを、学校から帰えつたまゝの私は、

「お母さんは二日程、糸崎へ行つて来る云うちやつたりやんで……。」

と、キテンをきかしてお母さんが、佗し氣にほめてくれた事があつた。あの頃、町には城ヶ島の唄や、沈鐘の唄が流行つていた。

ラムネを一本買う、残金四拾七錢也。

夜。

「皆さん、はぶい着きやんしたで！」

船員がロープをほぐしている。小さな舟着き場の横に、白い病院の灯が、海に散つていた。この島で長い事私を働かせて学校へいつていた男が、安々と息しているのだ。造船所で働いているのだ。

「此辺に安宿ありませんか。」

運送屋のお上さんが、宿屋まで連れて来てくれた。

糸のように細い町筋を古着屋が軒をつらねている。私は造船所に近い山のそばの宿へついた。二階の六畳の古ぼけた床の上に、風呂敷包をおくと、私は雨戸をくつて海を見た。

明日は尋ねて行こう。私は四十七錢也の財布を袂に入れると、ラムネ一本のすきばらのみまゝ汐臭い蒲団に足を延ばした。

どこか遠くの方で、蜂の巣の様にワンワン喚声があがっている。

六月×日

枕元をガリガリ水色の蟹が這って行く。町はストライキだ。

「会いに行きなさるゆうても、大変でござんすで、それよりや、社宅の方へおいでんさった方が……。」

私は心細くかまぼこを噛んだ。

社員達は、全部書類を持って、倶楽部へ集っていると云う。

私はぼんやりと外へ出た。万里の城のように、えんえんとコンクリートの壁をめぐらしたドックを山の上から見ると、菜っぱ服を旗に押したてゝ通用門みたいなところに、黒蟻の

ような職工の群が、ワンワン唸っている。

山の小道を、子供を連れのお上さんやお婆さんが、点々と上って来る。六月の海は、銀の粉を吹いて、纏れた樹の色が、シンセンな匂いをクンクンさせていた。

「尾道から警官がいつぱい来たんじやと。」

髪をいつせいに、後に吹かせた若いお上さんが、ドックを見降した。××と職工のこぜりあい。

「しつかりやれッ！」

「負けなはんな！」

「オーイ……」真昼間の、裸の職工達のリンリとした肌を見ていると、私も両手をあげて叫んだ。旅の古里の言葉で、

「しつかりやってつかアしやア。」

「あんた娼妓さんかな。」私は沈黙ってコックリした。

「^{ゴテイ}御亭主があそこにおってんな、うちの人ア、こうなったら、もう死んでもえゝつもりでやる云いしよりやんした。」

私はわけもなく涙があふれた。事務員をしたりして、つくした私の男が、大学を出ると、

造船所の社員になって、すました生活をしている。どうしても会って帰えらなければいけない。

「ここから見てると、あんな門位、船につかう××××××を投げりや、すぐ崩れちゃうのに。」

「職工は正道でがんすけん、皆体で打つかって行きやんさアね。」
門が崩れた。

蜂が飛ぶように、黒点が散った。

ツルツルした海の上を、小舟が無数に四散して行く。

潮鳴りの音を聞いたか！

茫漠と抔った海の叫喚を聞いたか！

煤けたランプの灯を女房達に託して

島の職工達は磯の小石を蹴散し

夕焼けた浜辺へ集った。

遠い潮鳴りの音を聞いたか！

何千と群れた人間の声を聞いたか！

こゝは内海の静かな造船港だ

貝の蓋を閉じてしまったような

因の島の細い町並に

油で汚れたズボンや菜っぱ服の旗がひるがえって

骨と骨で打ち破る工場の門の崩れる音

その音はワアン　ワアン

島いつばいに吠えていた。

ド……ド……ド……

青いペンキ塗りの通用門が群れた肩に押されると

敏活なカメレオン達は

職工達の血と油で色どられた清算簿をかゝえて

雪夜の狐のようにヒヨイヒヨイ

ランチへ飛び乗って行ってしまう。

表情の歪んだ固い職工達の顔から

怒りの涙がほとばしって

プチプチ音をたてゝいるではないか

逃げたランチは

投網のように拡がった〇〇の船に横切られてしまうと

さても

此小さな島の群れた職工達と逃げたランチの間は

只一筋の白い水煙に消されてしまう。

歯を噛み額を地にすりつけても

空は――

昨日も今日も変りのない

平凡な雲の流れだ

そこで！

頭のもげそうな狂人になった職工達は

波に呼びかけ海に吠え

ドツクの破船の中に渦をまいて雪崩ていった。

潮鳴りの音を聞いたか！

遠い波の叫喚を聞いたか！

旗を振れッ！

うんと空高く旗を振れッ

元気な若者達が

キンキラ光った肌をさらして

カラゝ カラゝ カラゝ

破れた赤い帆の帆縄を力いっぱい引きしぼると

海水止めの関を喰い破って

朱船は風の唸る海へ出た！

それ旗を振れッ

○○歌を唄えッ

朽ちてはいるが

元気に風をいっぱい孕んだ朱帆は

白いしぶきを蹴って海へ！

海の只中へ矢のように走って出た。

だが……

オーイ オーイ

寒冷な風の吹く荒神山の上で呼んでいる

波のように元気な喚叫に耳をそばだてよ！

可哀想な女房や子供達が

あんなに脊のびして

空高く呼んでいるではないか！

遠い潮鳴りの音を聞いたか！

波の怒号するを聞いたか

山の上の枯木の下に

枯木と一緒に双手を振っている女房子供の目の底には

火の粉のようにつつ走って行く

赤い帆がいつまでも写っていたよ。

宿へ帰えったら、蒼ざめた男の顔が、ぼんやり天井を見ていた。

「宿の叔母さんが迎えに来て、ビックリしちゃった。」

「……………」

私は子供のように涙が湧いた。何の涙でもない、白々とした考えのない涙が、あとから、あふれて、沈黙ってしきいの所に立って泣いた。夕方の空を時鳥がケンケン鳴いて行く。

「こゝへ来るまでは、すぐれたらすがつてみようと思つて来たけど、宿の叔母さんの話では、奥さんも子供もあるつて聞きましたよ、それに、町のストライキを見たら、どうしても、貴方に会つて、はつきりとすがらなくてはいけないと思ひました。」

沈黙っている二人の耳に、ワアンワアン喚声が聞える。

「今晚町の芝居小屋で、職工達の演説があるから、一寸のぞいてみなくては……。」「男は、自分の腕時計を床の上に投げると、そゝくさと町へ出てしまった。

私は、ぼんやりと部屋で、しゃっくりを続けながら、高価な金色の腕時計を、そつと腕にはめてみた。涙がダボダボあふれた。

東京で苦勞した事や、裸で門を壊していた昼間の職工達の事が、グルグルして、時計の白い腹を見ると目が廻りそうだった。

六月×日

宿の娘と連れだつて、浜を歩く、今日で一週間になる。

「くよくよおしんな。」私は何もかもメンドくさくなつて、呆然としてみると、宿の娘は

心配してくれる。

何も考えてやしない。何も考えようがない。

昨日は東京のお母さんへ電報ガワセを送ったし、私はこうして海の息を吸っているし、男がハラハラしようとしまいと、それはお勝手。私から何もかもむさぼり取った男なんだから、此位のコワガラセが何だろう。――尾道の海辺で、波止場の石垣に、お腹を打ちつけては、あの男の子供を産む事をおそれたが、今日はいじらしいお伽話だ。

昨日の電報ガワセで、義父や母が一息ついてくれゝばいゝ、キラキラした浜辺を、洗い髪をなびかせながら歩いていると、町で下駄屋をしている男の兄さんが、オーイオーイと後から呼びかけて来た。

久し振りに見る兄さん、尾道の家に、木になった蜜柑や、オレンジを持って来てくれたあの姿そのまゝで、笑いかけている。

「何も言わんもんじゃけん、苦労させやんした。」

海が青く光っている。

娘をかえして、二人で町はずれの男の親の家へ行く。

海近くまで、田が青々して蜜柑山がうつそうと風に鳴っていた。

「あいつが気が弱いもんじゃけん。」

海にやけた佗し気な顔して兄さんは口をつぐむ。

家では七十になる老婆が、コトコト米をついていた。牛が一匹優さしい瞳をして私を見た。私は、どうしてもはいりたくなかった。

何だか、こんなところへ来た事さえも淋しくなった、白い路のつづいている浜路を、私はあとしぎりするように、宿へ急いだ。

六月×日

颯爽として朝風をあびて、私は島へハンカチを振った。

どこへ行っても、どうにも仕様のない事だらけなんだ、東京へ帰えろう、私の財布は五枚の拾円札でふくらんでいた。

兄さんの家でもらった、デベラの青籠と風呂敷包みをかゝえて、ピヨピヨした板を渡つ

て、船へ乗った。

「気をつけてのう……。」

「えゝ！ 兄さんもうストライキはすんだんですか。」

「〇〇が仲へ入って三割かた職工の方が折れさせられて手打ちになったが、太いもんにはかなわないよ。」

男は寝ぶそくな目をシパシパさせて、波止場へ降りて来た。

「体が元気だったら、又いつか会えるからね。」

船の中は露に濡れた野菜がうずたかく積んであった。

あゝ何か馬鹿になったような淋しきで、私は口笛を吹きながら、遠く走る島の港を見かえた。二人の黒点が消えると、静かなドックの上に、ガアン ガアンと鉄を打つ音がひびいていた。

尾道についたら、半分東京へ送ってやろうかな、東京へかえったら、氷屋もいゝな、せめて暑い日盛りを義父さんが、ウロウロ商売をさがして歩かないように、此暮は楽に暮らしたいものだ。

私は体を延ばして、走る船の上から波に手をつけてみた。

手を押しやるようにして波が白くはじける、五本の指に藻がもつれた糸のようにからまつて、しおしおとしている。

「こんどのストライキは、えれ短かゝったなあ――。」

「ほんまに、どっちも不景気だけんな。」

船員達が、ガラス窓を拭きながら、話している。

私はも一度、青い海の向うにポツンとした島を見た。

淫売婦と飯屋

十二月×日

さいはての駅に下り立ち

雪あかり

さびしき町にあゆみ入りにき

雪のシラシラ降っている夕方、私は此啄木の歌をふつと思ひ浮べながら、郷愁かなしきを感じた。便所の窓を明けると門灯がポカリとついて、むかあし山国で見たしやくなげの紅い花のようで、とても美しかった。

「姉やアお嬢ちゃんおんぶしておくれッ！」

奥さんの声がする。

あゝあの百合子と云う子供は私に苦手だ。にかてよく泣くし先生に似て、シンケイが細々とし

て、全く火の玉を脊負っているような感じだ。

せめてこうして便所にはいつている時だけが、私の体のような気がする。

——バナ、鰻、豚^{トシ}カツ、蜜柑、思いきりこんなものが食べてみたいなア。

気持が大変貧しくなると、落書したくなる気持ち、豚^{トシ}カツにバナナ私は指で壁に書いてみた。

夕飯の仕度の出来るまで赤ん坊をおぶって廊下を何度も行ったり来たり。

秋江氏の家へ来て一週間あまり、先のメドもなさ^{さき}そうだ。

こゝの先生は、日に幾度も梯子段を上ったり降ったり、まるで甘日^{はつかねずみ}鼠だ。あのシンケイにはやりきれない。

「チャンチンコイチャン！ よく眠ったかい！」

私の肩を覗いては、先生は安心したようにじんじんばしよりして二階へ上って行く。私は廊下の本箱から、今日はチェホフを引っぱり出して読む。チェホフは心の古里だ。

チェホフの吐息は、姿は、みな生きて、たそがれの私の心に、何かブツブツものを言いかけて来る。

匂おわしい手ざわり、こゝの先生の小説を読んでいると、もう一度チエホフを読んでもいゝのになあと思う。京都のお女郎の事なんか、私には縁遠いねばねばした世界だ。

夜。

家政婦のお菊さんが、美味し^{おい}そうなゴモク寿司をこしらえているのを見て、嬉しくなつた。

赤ん坊を風呂に入れて、ひとしずまりすると、もう十一時だ。私は赤ん坊と云うものが大嫌いなんだが、不思議な事に、赤ん坊が私の脊におぶさると、すぐウトウト眠ってしまう、家の人達が珍らしがっていた。

お蔭で本が読めること――。

年を取って子供が出来る、仕事も手につかない程心配なのかも知れない。反感^{いやみ}がおきる程、先生は赤ん坊にハラハラしているのを見ると、女中なんて一生するもんじやないと思つた。

うまごやしにだって可憐な白い花が咲くって事を、先生は知らないのかしら……。奥さんは野育ちな人だけに、眠つた様な女だったが、この家では一番好きだった。

十二月×日

ひまが出る。

行くところなし。

大きな風呂敷包みを持って、汽車道の上に乗った陸橋の上で貰らった紙をひらいてみたら、たった貳円はいつていた。二週間あまりいて、金貳円也、足の先から血がさがるように思ひだつた。

ブラブラ大きな風呂敷包みをさげて歩いていると、ザラザラした気持ちで、何もかも投げ出したくなった。間代も払って、やれやれと住み込むと、二週間でお払いばこだ。

蒼い瓦葺きの文化住宅の貸家があつた。庭がひろくて、ガラス窓が二月の風にキラキラ光っていた。休んでやろうかな。

勝手口をあけると、さびた罐詰のかんからがゴロゴロして、座敷の畳がザクザク砂で汚れていた。

昼間の空家は^{あきや}淋しい、薄い人の影があそこにもこゝにもたゞずんでいるようで、寒さが

ピンピンこたえて来る。

どこへ行こうかしら、貳円ではどうにもならないし、はばかりから出て来ると、荒れた縁側のそばへ、狐のような目のクリクリした犬がじっと私を見ている。

「何でもないんだよ、何でもありやしないんだよ。」

言いきかせるつもりで、私は屹とつたつたっていた。

どうしようかなあ……。

夜。

新宿の旭町の木賃宿へ泊る。

石垣の下、雪だけで、道がこねこねしている通りの、旅人宿に、一泊参拾銭で私は泥のような体を横たえた。

三畳の部屋に、豆ランプのついた、まるで明治時代にだってありはしない部屋の中に、明日の日の約束されてない私は、私を捨てた島の男へ、たよりにもならない長い手紙を書いた。

みんな嘘っぱちばかりの世界だ！

甲州行きの終列車が頭の上を突きさした
マーケット
百貨店の屋上のように寥々とした

全生活を振り捨て、私は

木賃宿の蒲団に静脈を延ばした

列車にフンサイされた死骸を

私は他人のように抱きしめて

真夜中煤けた障子をいっぱい明けると

こんなところにも月がおどけていた。

みんなさよなら

私は歪んだサイコロになつて逆もどり

こゝは木賃宿街の屋根裏

私は堆積された信念をつかんで

ビヨウ　ビヨウと風に吹かれていた。

夜中になつても人がドタドタ出はいりしている。

「済みませんが……。」

ガクガクの障子をあけて、銀杏返えしに結った女が、そう言つたきり、薄い私の蒲団にもぐり込んで来た。

ドタドタと大きい足音がすると、帽子もかぶらないうす汚れた男が細めに障子をあけて声をかけた。

「オイ！ おきろー！」

女が、一言二言つぶやきながら、廊下へ出ると、パチンと頬を打つ音が続けざまに聞えて、無意味な、汚水のような冥々とした静かさが続いて、女の乱して行つた空氣が、仲々しずまらなかった。

「今まで何をしていたのだ、原籍は、どこへ行く、年は、両親は……。」

あのうす汚れた男が、鉛筆をなめ乍ら、私の枕元に立っている。

どうにでもなれッ。

「あの女と知りあいか？」

「え、三分間ばかり……。」「

クヌウト・ハムスンだつて、こんな行きがゝりは持たなかつただろう。刑事が去ると、私は伸々と手足を延ばして枕の下に入れてある財布をさわってみた。壹円六拾五錢残っている。

日がビュウビュウ風に吹かれているのが、歪んだ高い窓から見える。ピエロは高いところから飛びおりる事は上手だが、上つて見せる芸当は容易じやない。

だが何とかなるだろう。――。

三月×日

青梅街道の入口の飯屋へ行く。熱いお茶を呑んでいると、ドロドロに汚れた労働者が駆け込むように這入つて来て、

「姉さん！　拾錢で何か食わしてくんないかな、拾錢玉一ツきりしかないんだよ。」

大声で正直に立っていると、十五六の小娘が、

「御飯に肉豆腐でいゝですか。」

労働者は急にニコニコしてバンコへ腰かけた。そして大きな丼の飯と、葱のはいった肉豆腐と汁碗を前にして、天真にたべている。

一食拾銭よりと書いてあるのに、十銭玉一ツきりの此労働者は、スナオに正直に、入口から念を押している。

涙ぐましい気持ちだった。

御飯の盛りが私のヨリ多いような気がしたけれど、あれで足りるかしら、足りなかったら出してあげてもいゝけど、でも労働者はいたって朗らかだった。

私の前には、御飯にごった煮にお新香、まことに貧しき山海の珍味。合計拾弍銭也、のれんを出ると——どうもありがとう——お茶をたらふく吞んで、朝のあいさつをかわして、拾弍銭、どんづまりの世界は、光明と紙ひとえで、真に朗らかだ。

だが、あの四十近い労働者の事を思うと、これは又、拾銭玉一ツで、失望、どんぞこ、墮落との紙ひとえだ——。

お母さんだけでも東京へ来てくれゝば、何とか働きようもあるんだけど……沈むだけ沈んだ私は難破船、飛沫がかゝるどころではない、ザンブザンブ潮水を吞んで、結局私も昨

夜の淫売婦と、そう変った考えも持っていやしない。

あの女は卅すぎていたかも知れない。私が男だったら、あのまゝ一直線にあの夜に溺れて今朝はあの女と、もう死ぬ話でもしていたかも知れない。荷物を宿にあずけて、神田の職業紹介所に行く。

何と云う冷たいこうまんちきな女だろう、私は、どこへ行っても砂つ原のように亮々とした思いがするので、厭になつてしまった。

お前さんに使つてもらうんじゃないんだよ。

おたんちん！

馬鹿野郎！

ひよつとこ！

そうくり返している間に、私の番が来た。桃色の吸取紙みたいなカードを渡すと、月給参拾位い……受付女史はこうつぶやくと、私の体を見て、まずせゝら笑つて云つた。

「女中じゃいけないの？ 事務員なんて、学校出がウヨウヨいるんだから……女中なら沢山あつてよ。」

後から後から美しい女の花束、真にごもつともさまで私の敵ではない。疲れた彼女達の

中にも、冬らしい仄かな香水の匂いがする。

得るところなし。

紹介状は、墨汁会社と、ガソリン嬢。伊大利大使館の女中。

ふところには、もう九拾銭あまりしかない、夕方宿へ帰えると、街に働きに出る芸人達が、縁側の植木鉢みたいに並んで、キンキンした鼠色のお白粉を塗りたくっている。

「昨夜は二分しかうれなかつた。」
ゆうべ

「やぶにらみじや買い手がねえや！」

「これだつて好きだつて人があるんだからね。」

「はい御苦勞様か……。」「

十四五の少女同志のはなし。
むすめ

十二月×日

ワツハ　ワツハ　ワツハ　井戸つるべ、狂人になるような錯覚がおこる。マツチをすつて眉ずみをつける。

午前十時。

麴町三年町の伊大利大使館へ行く。

笑って暮らしましょう。

顔がゆがみまする。

黒人の子が馬に乗って出て来た。門のそばにこわれた門番の小屋みたいなのがあって、白と蒼と青との風景、砂利が遠くまでつゞいて、所詮は私のような者の来るところでもなさそうだ。

地図のある、赤いジュウタンの広い室に通されると、白と黒のコスチウム、異人の妻君って美しい、遠くで見るとなお美しい。さつき馬で行った男の子が鼻を鳴らしながら帰えって来た。

男の異人さんも出て来たが、大使ではなく、書記官だとかって事だ。夫婦共脊が高くてアツパクを感じる。

その白と黒のコスチウムをつけた夫人に、コック部屋を見せてもらう。コンクリートの箱の中に玉葱がゴロゴロしていて、七輪が二ツ置いてあった。此七輪で、女中が自分の食べるのだけ煮たきするのだと云う。まるで廃屋のような女中部屋、黒いよろい戸がおりて

いて、石鹼のような外国の臭いがする。

結局ようりようを得ないで門を出る。ゴウソウな三年町の邸町を抜けて坂を降りると、吹き上げる十二月の風に、商店の赤い旗がヒラヒラ暮れ近かく瞳にしみた。

人種が違っては人情も判りかねる。どこか他を探して見様かしら。

電車に乗らないで濠ばたを歩いていると、国へ帰りたくなつた。目^め当^{あて}もないのにウロウロ東京で放浪したところで、結局どうにもならない。電車を見ていると死ぬる事を考える。

本郷の前の家へ行く。叔母さんつめたし。

近松氏から郵便来ている。出る時に、十二社の吉井勇さんのところに女中がいるから、ひよつとしたら、あんたを世話してあげると云う、先生の言葉だったが、薄ずみで書いた断り状だった。

夕方新宿の街を歩いていると、妙に男の人にすがりたくなつた。

誰か助けてくれる人はいかなア……新宿駅の陸橋に紫色のシグナルがチカチカゆれて

いるのを見ると、涙で瞼がふくらんで、子供のようにしゃっくりが出た。

当ってくだいてみよう――。

宿の叔母さんに正直に話する。仕事が見つかるまで、下で一緒にいていゝと云つてくれた。

「あんた、青バスの車掌さんにならないかね、いゝのになると七拾円位はいるそうだが……。」

どこかでハタハタでも焼いているのか、とても臭いにおいが流れて来る。七拾円もあれば素的だ。ブラさがるところをこしらえなくては……。十燭の電気のついた帳場の炬燵にあたつて、お母アさんへ手紙を書く。

――ビヨウキシテ、コマツテ、イルカラ、三円クメンシテ、オクツテクダサイ。

此間の淫売婦が、いなりずしを頬ばりながらはいつて来る。

「おとついはひどいめに会った！ お前さんもだらしがないよ。」

「お父つあん怒つてた？」

電気の下で見ると、もう四十位の女で、バクレン者らしい崩れた姿をしていた。

「私の方じゃあんなのを梃と云つて、色んな男を夜中に連れこんで来るんだが、あんまり有りがたい客じゃないんですよ。お父つあん油しぼられて、プンプン怒ってますよ。」

人の好きそうな老いたお上さんは、茶を入れながら、あの女をのゝしっていた。

夜うどんをたべる。

明日はこゝの叔父さんの口ぞえで青バスの車庫へ試験うけに行ってみよう……。

電線が鳴っている。

木賃宿^{ホテルガイ}街の片隅に、此小さな女は汚れた蒲団に寝ころんで、壁に張ってある、大黒

さんの顔を見ながら雲の上の御殿のような空想をする。

国へかえつてお嫁さんにでも行こうかしら。――

——放浪記を愛読して下さいます方へ！ 私の放浪記が一冊にまとまって、改造社から近刊されます。一人でも沢山の方が読んで下さいましたら、うれしゅうございます。これは筆者からお願い。——

雷雨

七月×日

胸の凍るような佗しさだ。

夕方、頭の禿げた男の云う事に、「俺はこれから女郎買いに行くのだが、でもお前さんが好きになったよ、どう……。」「私は白いエプロンをクシャクシャにまるめて、涙を口にくゝむんだ。

「お母アさん！ お母アさん！」

何もかも厭になつて、二階の女給部屋の隅に寝ころぶ。鼠が群をなして這っている。

暗らさが瞳に沈むと、雑然と風呂敷包みが墓場の石塊のように転がって、寝巻や帯が、海草のように壁に乱れている。

煮えくり返えるような階下の雑音の上に、おばけでも出て来そうに、シンと女給部屋は淋しい。

ドクドク流れ落ちる涙が、ガスのようにシュウシュウ抜けて行く。悲しみの氾濫、何か正しい生活にありつきたい。

何か落ちついて本が読みたい。

しゅうねん強く

家の貧苦・酒の癖・遊怠の癖

みなそれだ

ああ、ああ、ああ、

切りつけろそれらに

とんでのけろ、はねとばせ

私が何べん叫びよばった事か、苦しい、

血を吐くように芸術を吐き出して狂人のように踊りよろこぼう。

槐多はかくも叫びつゞけている。こんなうらぶれた思いの日、チエホフよ、アルツイバ

アセフよ、シニツラア、私の心の古里を読みたい。働くと言う事を辛いと思った事はないが、今日ほど、今こそ字がなつかしい。だが今は皆お伽話の人だ。

薄暗がりの風呂敷の中に、私は直哉の和解を思い出した。

こんなカフェーの雑音おとに巻かれると、日記をつける事さえ、おつくうになって来る。

まず雀が鳴いているところ、朗らかな朝陽がウラウラ光っているところ、陽にあたつて青葉の音が色が、雨のように薫じているところ……槐多ではないが、狂人のように、一人居の住居が、イマ！ イマ！ 慇しくなった。

十方空しく御座候だ！ 暗いので、只じつと瞳をとじている。

「オイ！ ゆみちゃんはどこへ行ったんだい！」階下でお上さんが呼んでいる。

「ゆみちゃん居るの……お上さんが呼んでゝよ。」

「歯が痛いから寝てゐるって云つて下さい。」

八重ちゃんが乱暴に階下へ降りて行くと、漠々とした当のない、痛い痛い気持ちだが、ふくらがって、いっそ死んでもうたならと唄い出したくなる。

メフェイストフェレスがそろそろ踊り出したぞ！ 昔おえらいルナチャルスキイとなん申

します方が、云つてござる。

——生活とは何ぞや？ 生ける有機体とは何ぞや？ ルナチャルスキイならずとも、生活とは何ぞや！ 生ける有機体とは何ぞや！ 落ちたるマグダラのマリヤ！ ワツハワツハ。

死ぬんだ！

死ぬんだ！

自己保存の能力を叩きこわしてしまうのだ。私は頭の下に両手を入れると、死ぬる空想をした。毒藥を呑む空想をした。

「お女郎買いに行くより、お前が好きになった。」何と人生とはくだらなく朗らかな事であらう——。

どうせ故郷もない私だ、だが一人のお母さんの事を思うと、切なくなる。泥棒になつてしまおうかしら、女馬賊になつてしまおうかしら……。別れた男達の顔が熱い瞼に押して来る。

「オイ！ ゆみちゃん、女給が足りない事よく知ってんだらう。少々位は我慢して階下へ

降りとくれよ。」お上さんは声をとがらして、梯子段を上って来る。

あゝ何もかも、一切合財が煙だ。砂だ、泥だ。私はエプロンの紐を締めなおすと、陽気に唄をくゝみながら、海底のような階下の雑音^{おと}へ流れて行つた。

七月×日

朝から雨。

造つたばかりのコートを貸してやった女は、とうとう帰って来なかった。一夜の足留りと、コートを借りて、蛾のように女は他の足留りへ行つてしまった。

「あんた人がいゝのよ、昔から人を見れば泥棒と思へつて言葉があるじゃないの。」

八重ちゃんが、白いくるぶしを搔きながら私を嘲笑っている。

「ヘエ！ そんな言葉^{あれ}があつたのかね。じゃ私も八重ちゃんの洋傘^{パラソル}でも盗んでドロシちやおうかなア。」

私がこう言うと、寝ころんでいた、由ちゃんが、「世の中が泥棒ばかりだったら痛快だわ……。」

由ちゃんは十九、サガレンで生れたのだと云つて白い肌が自慢だった。八重ちゃんが肌

を抜いているかば色の地に、窓ガラスの青い雨の影が、キラキラ写っている。煙草のけむり、女の呆然^{けむり}。

「人間ってつまらないわね。」

「でも木の方がよっぽどつまらない。」

「火事が来たって、大水が来たって逃げられないから……」

「馬鹿ね！」

「ホッホッ誰だって馬鹿じゃないの。」

女達のおしやべりは夏の青空、あゝ私も鳥か何かに生れて来るとよかった。

電気をつけて阿弥陀を引く。

私は四銭。女達はアスパラガスのように、ドロドロ白粉をつけたまゝ皆ゾロリと寝そべって、蜜豆を食べる。

雨がカラリと晴れて、窓に涼しい風が吹いている。

「ゆみちゃん！ あんたいゝ人があるんじゃない！ 私そう睨んだわ。」

「あつただけど遠くへ行っちゃったのよ。」

「素的ね。」

「あら、なぜ？」

「私別れたくつても、別れてくんないんですもの。」

八重ちゃんは空になったスプーンを嘗めながら、今の男と別れたいわと云う。どんな男と一緒になつても同じ事だと私が云うと、

「そんな筈ないわ、石鹸だつて、拾銭のと五拾銭のじゃ、随分品が違つてよ。」

夜。

酒を呑む。

酒に溺れる。

もらい——貳円四拾銭、アリガタヤ、カタジケナヤ。

七月×日

心が留守になると、つまずきが多い。ざんざ降りの雨の中を、私を乗せた自動^{くるま}車は八王子街道を走っている。

もつと早く！

もつと早く！

たまに自動車になんて乗れば、女王様のようにいゝ気持ち。町にパツパツと灯がつきそめる。

「どこへ行く？」

「どこだっていゝわ、ガソリンが切れるまで走つてよ。」

運転台の松さんの頭が少し禿げかけている。若禿げかな。

午後からの公休日を所在なく消していると、自分で自動車を持っている運転手の松さんが、自動車に乗せてくれると云う。

たなしまで来ると、赤土へ自動車くるまがこね上つて、雨のざんざん降りの漠々とした櫟の小道に、自動車はピツタリ止ってしまった。遠くの眉程な山裾に、キラキラ灯がついているきりで、ざんざん降りの雨に、ゴロゴロ地鳴りのように雷が光りだした。雷が鳴るとせいせいしていゝ気持ちだが、シボレーの古自動車なので、雨がガラス窓に叩かれるたび、霧のようなしぶきが車室にはいる。

その、たそがれの櫟の小道、自転車が一台通ったきりで、雨の怒号と、雷のネオン、サ

インだ。

「こんな雨じア道へ出る事も出来ないわね。」

松つあんは沈黙つて煙草を吸っている。

だが、こんな善良そうな男に、こんな芝居よりもうまうまとしたコンタンはあり得ない。スイスイとしたいゝ気持だった。

雷も雨も、破れるように響いてくれ。

自動車は雨に打たれたまゝ夜の櫟林に転がってしまった。

私は男の息苦るしさを感じた。機械油くさい葉っぱ服に押されると、私はおかしくもない笑いがこみ上げて来た。

十七八の娘でもあるまいし、私は逃げる道を上手に心得ております。私が男の首に手を巻いて言った事は、

「あんたは、まだ私を愛してるとも何とも言わないじゃないの……暴力で来る愛情なんて、私大嫌いさ、私が可愛かったら、もつとおとなしくなくちゃ厭だよだ。」

私は男の腕に女狼のような齒形くちを当てた。

私は胸が迫った。男の弱点よわみと、女の弱点よわみの闘争だ。

雷と雨……夜がしらみかけた頃、男は汚れたまゝの顔で眠っている。ふゝんハイボクの兵士か！

遠くで青^{レイメイ}空をつげる鶏の音がする。朗らかな夏の朝、昨夜の情熱なんかケロリとして、風が絹のようにしゅうしゅう流れている。

此男があの人だったら……コツケイな男の顔を自動車に振り捨てたまゝ私は泥んこの道に降りた。

紙一重の昨夜のつかれに、腫れぼったい瞳を風に吹かせて、久し振りに晴々と故郷のような路を歩いた。

芙美子はケイベツすべき女でゐます！

荒みきった私は、つつと櫟林を抜けると、松さんが、いじらしくなった。疲れて子供のように自動車に寝ている男の事を思うと、走ってかえって起してやろうかしら……でも恥ずかしがるかも知れないな、私は松さんが落ちついて、運転台で煙草を吸っていた事を思

うと、やつぱり厭な男に思えた。

誰か、私を愛^{いと}しがって呉^{くれ}る人はないか、七月の空に流離の雲が流れている、私の姿だ。野花を摘み摘みプロヴァンスの唄を唄った。

八月×日

女給達に手紙を書いてやる。秋田から来たばかりの、おみきさんが鉛筆を管めながら眠りこけている。

酒場ではお上さんが、一本のキング、オヴ、キングを清水で七本に利殖している。埃と、むし暑さ、氷を沢山呑むと、髪の毛が沢山抜けると云って氷を吞まない由ちゃんも、冷蔵庫から氷の塊を盗んで来ては、パリパリ噛んでいる。

「一寸！ ラブレターって、どんな書き出しがいゝの……。」「

八重ちゃんが真黒な瞳をクルクルさせて、赤い唇を鳴らす。

秋田とサガレンと、鹿児島と千葉の呆然^{けむり}のような女達が、カフェーのテーブルを囲んで遠い古里に手紙を書いている。

街に出てメリンスの帯一本買う。壹円貳拾銭（八尺）

何か落ちつける職業はないかと、新聞の案内欄を見る。いつもの医専の群、ハツラツとした男の体臭が汐のように部屋に流れて、学生好きの、八重ちゃんは、書きかけのラブレターをしまつて、両手で乳房をおさえて品をつくる。

二階では由ちゃんが、サガレン時代の業だと云つて、私に見られた羞かしさに、プンプン匂う薬をしまつてゴロリと寝ころんだ。

「面白くないね。」

「ちつとも。」

私はお由さんの白い肌を見ると、妙に悩やましかった。

「私これで子供二人生んだのよ。」

お由さんはハルピンのホテルの地下室で生れたのを振り出しに、色んな所を歩いて来たらしい。子供は朝鮮のお母さんのとこにあずけて、子供のでない男と東京へ流れて来ると、お由さんはおきまりの男を養うためのカフェー生活。

「着物が一二枚出来たら、銀座へ乗り出そうかと思つてゐるの。」

「いつまでもやる仕事じゃないわね。」

春夫の車窓残月の記を読んでいると、何だか、何もかも夢のようにと一言瞳を射た優さしい柔い言葉があつた。

何もかも夢のように……落ちついて小説や詩が書きたい。

キハツで紫の衿をふきながら、

「ゆみちゃん！ どこへ行つても音信^{たより}頂戴よ。」

由ちゃんが涙つぽく私へ——えゝ何でもかでも夢の様に——ね。

「そんなほん面白い？」

「うん、ちつとも。」

「私、高橋おでん好きだわ。」

「こんなほん読むと、生きる事が憂鬱^{さびしく}なるきりよ。」

八月×日

他のカフェーでもさがそうかな。

まるでアヘンでも吸っているように、ずるずると此仕事に溺れて行く事が悲しい。

毎日雨が降る。

午後二時。

ボンヤリして、カウンターのそばの鏡で、髪をなでつけていると、立ちうりの万年筆のテキヤが、二人飛び込んで来る。

「あゝ俺アびつくりしたぜ、クリヤマ（巡查）がカマる（来る）からゴイ（逃げる）ろて、梅の野郎が云うんで、お前をつゝいたんだよ。」

二人は泥のついた万年筆を風呂敷にしまいながら、

「姉さん！ 支那そば並のを二丁くんな。」

鏡にすかして、雨が針のようにふつている。私は九州の長崎の思い出に、唐津物を売っていた頃、よく父が巡査になぐられたのを思い出した。

——こゝに吾等は芸術の二ツの道、二ツの理解を見出す。人間がいかなる道によつて進むか、夢想！ 美の小さなオアシスの探求の道によつてか、それとも能動的な創造の道によつてかは、勿論、一部分理想の高さに関係する。理想が低ければ低いほど、それだけ人

間は實際的であり、この理想と現実との間の深淵が彼にはより少なく絶望的に思われる。けれども主として、それは人間の力の分量に、エネルギーの蓄積に、彼の有機体が処理しつゝある營養の緊張力に關係する。

緊張せる生活はその自然的な補いとして創造、争闘の緊張、翹望を持つ――。女達が風呂に出はらった後の夕暮れの女給部屋で、ルナチャルスキイの、実証美学の基礎を読んでいると、こんな事が書いてあった。

科学的に処理してある言葉を見ると、どうにも動きのとれない今の生活と、感情のルンペンさが、まざまざと這い出て私は暗くなる。勉強したいと思う、あとからあとから、とてつもなくだらしない不道德な野性が、私の体中を馳りまわる。

見極めのつかない生活、死ぬか生きるかの二ツの真蒼な道……。

夜になれば、白人国に買われたニグロのような淋しきで、埒もない唄をうたう。

メリンスの着物は、汗で裾にまきつくと、すぐピリツと破けてしまう。実もフタもない此あつさでは、涼しくなるまで、何もかもおあずけで、カツ一丁上ったよッ！ か――。

何の条件もなく、一ヶ月卅円もくれる人があつたら、私は満々としたいゝ詩をかいてみたい、いゝ小説を書いてみたい。

バカヤロ、バカヤロ、お芙美さん！

海の祭

七月×日

ちつとも気がつかない内に、かけになつてしまつて、それに胃腸も根こそぎ痛めてしまったので、食事も此二日ばかり思うようになく、魚のように体が延びてしまった。薬も買えないし少し悲惨な気がする。

店では夏枯れなので、景気づけに、赤や黄や紫の風船玉をそえて、客を呼ぶのだそうなの。じつと売り場に腰を掛けていると、眠りが足らないのか、道の照りかえしがギラギラ目を射て頭が重い。

レースだの、ボイルのハンカチだの、仏蘭西製カーテンだの、ワイシャツ、カラー、店中はしゃぼんの泡のように白いものずくめ、薄いものずくめだ。

閑散な、お上品なこんな貿易店で、日給八拾銭の私は売り子の人形、だが人形にしては

汚なすぎるし、腹が減りすぎる。

「あんたのように、そう本ばかり読んでも困る、お客様が見えたら、おあいそ位云って下さい。」

酔っぱいものを食べた後のように齒がじんと浮いた。

本を読んでいるんじゃないんです。こんな婦人雑誌なんか、私の髪の毛でもありはしない、硝子のピカピカ光っている面を一寸覗いて御覧下さい。水色の事務服と浴衣が、バツクと役者がピッタリしないように、何とまあおどけた厭な姿……。

顔は女給風で、それも海近い田舎から出て来たあぶらのギラギラ浮いた顔、姿が女中風で、それも山国から来たコロコロした姿、そんな野性な一本の木が、胸にレースを波たゝせた水色の事務服を着ているのです。

ドミエの漫画！ 何とコツケイな、何とちぐはぐなにわとり鶏の姿！

マダム・レースや、ミスター・ワイシャツや、マドモアゼル・ハンカチの衆愚に、こんな姿をさらすのが厭なのです。

それに、サーヴィスが下手だとおっしゃる貴方の目が、いつ私をくびきるかも判らないし、なるべく、私と云う売り子に関心を持たれないように、私は下ばかりむいているので

す。

あまりに長いニンタイは、あまりに大きい疲れを植えて、私はめだたない人間にめだたない人間に訓練されて来たのです。

あの男は、お前こそめだつ人間になつて闘争しなくちや嘘だと云うのです。

あの女は、貴女はいつまでもルンペンでいけないと云うのです。

そして、勇カンに戦かつているべき、彼も彼女も……。

彼いつこの白き手のインテリゲンチヤ！

彼女いつこのブルジョワ夫人！

仲間同志で嫉妬に燃えています。

彼や彼女達が、プロレタリアを食い物にして、強権者になる日の事を考えると、宇宙はどこが果てなんだろうと考えるし、人生の旅愁を感じる。

歴史は常に新らしく生きる——。そこで磨れば燃えるマッチがうらやましくなった。

夜——九時。

省線を降りると、道が暗いので、ハーモニカを吹き吹き帰える。
詩よりも小説よりも、こんな単純な音だけど音楽はいゝナ。

七月×日

青山の貿易店も高架線のかなた。二週間の労働賃金拾壹円也、東京での生活線なんてよく切れたがるものだなア。

隣りのシンガーミシンの生徒？　さんが、齒をきざむように、ギイギイ……しつきりなしにミシンのペタルを押している。

毎日の生活断片をよく寝言にうったえる秋田の娘さん。

古里から拾五円ずつ送金してもらって、あとはミシンでどうやら稼いでいる、縁遠そうな娘さん、いゝ人だ。

彼に紹介状もらって、××女性新聞社に行く。本郷の迫分で降りて、ブリキの塀をくねくね曲ると、緑のペンキの脱落^{はげ}た、おそろしく頭でつかちな三階建の下宿屋の軒に、螢程な社名が出ていた。

まるで心ところ天てんを流すよりも安々と女記者になりすました私は、汚れた緑のペンキも最早何でもなく思った。

昼。

下宿の中餐をもらって舌つゞみ打つと、女記者になって二三時間もたゝない私は、鉛筆と原稿紙をもらって談話取りだ。

四畳半に膨大な事務机が一つ、薄色の眼鏡をかけた社長と、××女性新聞発行人の社員が一人、私を入れて三人の××女性新聞。チャチなものだ。又、生活線が切れるんじゃないかと思つたが、兎に角私は街に出た。

訪問先きは秋田雨雀氏のところ――。

此頃の御感想は……私は此言葉を胸にくりかえしながら、雑司ヶ谷の墓地を抜けて、鬼子母神のそばで番地をさがす。

本郷の混々ごみごみした所から此辺に來ると、何故か落ちついた気がする。二三年前の五月頃、漱石の墓にお参りした事もあつたが……。

秋田氏は風邪を引いていると云つて鼻をかみかみ出ていらつした。

まるで少年のようにキラキラした瞳、非常にエキゾチックな感じの人だ。お嬢さんは千代子さんとか云つて、初めて行つた私を拾年のお友達かのように話して下すつた。

厚いアルバムが出ると、一枚一枚繰つて説明をして下さる。此役者は誰、此女優は誰、その中には別れた男のプロフィールもあつた。

「女優つてどんなのが好きですか、日本では……。」

「私判らないけど、夏川静江なんか好きだわ。」

私はいまだかつて、私をこんなに優さしく遇してくれた女の人を知らない。

二階の秋田さんの部屋には黒い牛の置物があつた。高村さんの作で、有島さんが持つていらつしたとか、部屋は実に雑然と、古本屋の観があつた。

談話取りが、談話がとれなくて、油汗を流していると、秋田さんは二三枚すらすると手を入れて下すつた。

お寿司を戴く。来客数人あり。

暮れたのでおくつて戴く。

赤い月が墓地に出ていた。灯の湧いた街ではシュツシュツ氷を削る音がする。

「僕は散歩が好きです。」

秋田氏は楽し気にコツコツ靴を鳴らしている。

「あそこがすゞらん！」

舞台の様なカフェー、変ったマダムだつて誰かに聞いた。

秋田氏は銀座へ。

私は何か書きたい興奮で、沈黙つて江戸川の方へ歩いて行つた。

七月×日

階下の旦那さんが二日程国へ行つて来ますと云つて、二階へ後の事を頼みに今朝上つて来たのに、社から帰えつてみると、隣のミシンの娘さんが、帯をときかけている私を襖の裂けめから招いた。

「あのね一寸！」

向うから底声なので、私もそつといざりよると、

「随分ひどいのよ、下の奥さん外の男と酒呑んでるのよ……。」「

「いゝじあないの、お客さんかも知れないじゃないんですか。」

「だって、十八やそこいらの女が、あんなにデレデレして夫以外の男と酒呑めるか知ら…
…。」

帯を巻いて、ガーゼの浴衣をたゝんで、下へ顔洗いに行くと、腰障子の向うに、十八の花嫁さんは、平和そうに男と手をつなぎあつて転がっていた。

昔の恋人かも知れない。

只うらやましい丈で、ミシンの娘さんのような興味はない。

夜。

御飯を焚くのがめんどろだったので、町の八百屋で一山拾銭のバナ、を買つて来る。

女一人は気楽だなア。

糊の抜けた三畳の木綿の蚊帳の中に、伸び伸びと手足を投げ出してヤーマを読む。

したゝか者の淫売婦が、自分の好きな男の大学生に、非常な清純な気持ちを見せる、彪大な本だ、頭がつかれる。

「一寸起きてますか？」

もう拾時頃だろうか、隣のシンガーマシンさんが帰えつて来たらしい。

「えゝまだねむれないでいます。」

「一寸！ 大変よ！」

「どうしたんです。」

「呑気ねツ、下じやあの男と一緒に蚊帳の中へはいって眠つてゝよ。」

シンガーマシン嬢は、まるで自分の恋人でも取られたように、瞳をギロギロさせて、私の蚊帳にはいつて来た。

いつもミシンの唄に明け暮れる彼女が、私の部屋になんか、めつたにはいつて来ない行儀のいゝ彼女が、断りもしないで私の蚊帳へもぐり込むと、大きい息をついて、畳に耳をつけた。

「随分人をなめているわね、旦那さんかえつて来たら皆云つてやるから、私よか十も下なくせに、ませているわね……。」

ガードを省線が、滝のような音をたてゝ通る。

一度も縁づいた事のない彼女が、嫉妬ねたみがましい息づかいで、まるで夢遊病者のような狂体を演じようとしている。

「兄さんかも知れなくつてよ。」

「兄さんだつて、一ツ蚊帳には寝ないや。」

何か淋しい血のようなものが胸に込み上げて来た。

「瞳が痛いから電気消しますよ。」

彼女はフンゼンとして沈黙つて出て行くと、やがて梯子段をトントン降りて行つた。

「私達は貴方を主人にたのまれたのですよ。こんな事知れていゝのですか！」

切れ切れに、こんな言葉が耳にはいる。

一度も結婚しないと云う事は、あんなにも強く云えるものか……私は蒲団を顔へずり上げて固く瞼をとじた。

七月×日

——ビヤウキスグカヘレタノム
母よりの電報。

本当かも知れないが、嘘かも知れない。だが嘘の云えるような母ではない。出社前なので、急いで旅仕度をする、旅費を借りに社へ行く。

社長に電報みせて、五円の前借りを申し込むと、前借は絶体に駄目だと云う。だが私の働いた金はおもうと思えば拾五円位ある筈だ。不安になって来る。廊下に置いたバスケットが妙に厭になった、大事な時間を、借りる！と云う事で、それも正当な権利を主張しているのに、駄目だと云う。

これは、こんなところでみきわめをつけた方がいゝかも知れない。

「じゃ借りません！ 其代り止めますから今迄の報酬を戴きます。」

「自分で勝手に止されるのですから、社の方では、知りませんよ。満足に務めて下さつての報酬であつて、まだ十二三日しかないじゃありませんか！」

黄にやけたバスケットをさげて、私は又、二階裏へかへつた。

ミシン嬢は、あれから、下の妻君と氣持が凍つて、引越するつもりでいたらしかつたが、帰えつて見ると、どこかみつかつたらしく、荷物を運び出していた。

彼女の唯一の財産である、ミシンだけが、不格恰な姿で、荷車の上に乗っかっていた。全てはあゝ空しである――。

七月×日

駅には、山や海の旅行者が、白い服装で、涼し気だった。

下の妻君に五円借りる。

尾道まで七円くらい、やっと財布をはたいて切符を買うと、座席を取ってまず指を折った。

――何度目の帰郷だろうか！

つゆくさ
露草の茎

かべ
粗壁に乱れる

万里の城

何かうらぶれた感じが深い。昔つくった自分の詩のアタマを思い出した。

何もかも厭になつてしまふが、さりとて、ニヒルの世界は道いまだ遠し。

此生ぐさニヒリストは、腹がなおると、じき腹がへるし、いゝ風景を見ると、呆然としてしまふし、良い人間に出くわすと、涙を感じるし――。

バスケットから、新青年の古いのを出して読む。

面白き笑話ひとつあり――。

――囚人曰く、「あの壁のはりつけの男は誰ですか？」

――宣教師答えて、「我等の父キリストなり。」

囚人が出獄して病院の小使いにやとわれると、壁に立派な写真が掛けてある。

――囚人、「あれは誰のです？」

――医師、「イエスの父なり。」

囚人、淫売婦を買つて彼女の部屋に、立派な女の写真を見て――

――囚人、「あの女は誰だね。」

――淫売婦、「あれはマリヤさ、イエスの母さんよ。」

そこで囚人は歎じて曰く、子供は監獄に父親は病院に、お母さんは淫売宿にあ――
！。

私はクツクツ笑い出してしまった。急行でもない閑散な夜汽車に乗って退屈しているとこんなにユカイなコントがめつかった。眠る。

七月×日

久し振りで見る旅の古里の家。

暑くなると、妙に気持ち焦々して、シユンと気が小さくなるよ。どこともなく老いて憔悴している母が、第一番に言った言葉は、

「待っちゃったけん！ わしも気がこもうなつて……。」

キラキラ涙ぐんでいた。

今夜は海の祭、おしよろ流しの夜だ。

夕方東の窓を指さして、母が私を呼ぶ。

「可哀そうだのう、むごかのう……。」

二十号大に区切った窓の風景の中に、朝鮮牛がキリキリぶらさがっている。鰯雲がむく

むくしている波止場の上に、ドカンと突き揚った黒い起重機！ その頂点には一匹の朝鮮牛が、四足をつっぱって、ヴァウ！ ヴァウ唸っていた。

「あいば見ると、食べられんのう……。」

雲の上にぶらさがってあの牛は、二三日の内に屠殺されて、紫の印を押される事を考えているのか知ら……。それとも故郷の事を、友達の事を……。

視野を下に降ろすと、古綿のような牛の群が、甲板の檻の中で唸っている。

鰯雲が、かたくりのように筋を引くと、牛の群も去り起重機も腕を降ろして夕べの月仄かな海の上に、もう二ツ三ツおしよろ船が流れていた。

火を燃やしながら、美し紙船が、涯木を離れて沖へ出た。

港には古風な伝馬が密集している。火の紙船が、月の様に流れ行く。

「牛を食ったり、おしよろを流したり、人間も矛盾が多いんですねお母さん。」

「そら人間だもん……。」

古里はいゝナ――

寝床のない女

二月×日

黄水仙の花には、何か思い出がある。

窓をあけると、隣の家座敷に灯がついて、黒い卓子^{テーブル}の上に黄水仙が猫のように見えた。

階下の台所から、夕方の美味^{うま}そうな匂いと音がする。

二日も飯を食えないジンジンする体を、三畳の部屋に横たえている事は、まるで古風なラッパのように埃^{ぼんやり}っぽく悲しくなる。生^{なま}※が煙になって、みんな胃のふへ逆もどりだ。

ところで呆然^{ぼんやり}としたこんな時の空想は、まず第一に、ゴヤの描いたマヤ夫人の乳色の胸の肉、頬の肉、肩の肉、酢っぱいような、美麗なものへ、豪華なものへの反感！ が、ぐんぐん血の塊のように押し上げて、私の胃のふは、旅愁にくれてしまった。

外へ出る。

町には魚の匂いが流れている。

公園に出ると、夕方の凍った池の上を、子供達がスケート遊びをしていた。

固い飯だつて関いはしないのに、荒れてザラザラした唇には、公園の風は痛すぎる。子供のスケート遊びを見ていると、妙に切ば詰った思いになって、涙が出る。どつかへ石をぶつつけてやりたいな。

耳も鼻も頬も桃のように紅くした子供の群が、束子^{たわし}でこするように、キュウキュウ厭な音をたてゝ、氷の上をすべっている。

一縷の望みを抱いて百瀬さんの家へ行く。

留守。

知った家へ来て、寒い風に当る事は、余計腹がへって苦しい。留守居の爺さんに断わつて、家へ入れて貰う。古呆て妖怪じみた長火鉢の中には、突きさした煙草の吸殻が、しづきのように見えた。

壁に積んである、沢山の本を見ていると、なぜか、舌に※が湧いて、此書籍の堆積が妙に私をゆうわくしてしまった。

どれを見ても、カクテル製法の本ばかり、一冊売ったらどの位になるかしら、支那蕎麦に、てん井に、ごもく寿司、盗んで、すいている腹を満たす事は、悪い事ではないように思えた。

火のない長火鉢に、両手をかざしていると、その本の群立が、大きい目玉をグリグリさせて、私を笑っているように見える。障子の破れが奇妙な風の唄をうたった。

あゝ結局は、硝子一重さきものだ。果てしもなく砂に溺れた私の食慾は、風のビンビン吹きまくる公園のベンチに転るがるより仕方がない。

へっっ！ 兎に角、二々が四だ。弍銭銅貨が、すばらしく肥え太ったメン鶏にでも生れかわってくれないかぎり、私の胃のふは永遠の地獄だ。

歩いて、池の端から千駄木町に行く。恭ちゃんの家に寄る。

がらんだ家の片隅に、恭ちゃんも節ちゃんも凸坊も火鉢にかじりついていた。

這うような気持ちで、御飯をよばれる。口一杯に御飯を頬ばっている時、節ちゃんが、何か一言優さしい言葉をかけてくれた。

何か、胸がズンと突き上げる気持ち、口の飯が古綿のように拵がって、火のように涙が噴きこぼれた。

塩っぱい涙をくゝみながら、わんわん泣き笑いすると、凸坊が驚いて、玩具をほうり出して一緒に泣き出してしまった。

「オイ！ 凸坊！ おぼちゃんに負けないで、もっともっと大きい声で泣け、遠慮なんかしないで、汽笛の様な大きな声で泣くんだよ。」

恭ちゃんがキラキラした瞳で凸坊の頭を優しく叩くと、まるで町を吹き流して来る、じんたのクラリオネットみたいに、凸坊は節をつけて大声あげた。

私の胸には、おかしく温いものが流れた。

「時ちゃんて娘どうして……。」

「月始めに別れちゃったわ、どこへ行っただか、仕合せになったでしょう……。」

「若いから貧乏に負けっちゃうのよ。」

赤い毛糸のシャツを二枚持っているから、一枚節ちゃんに上げよう、白々とした肌が寒気だった。

寝転ろんで、天井を睨んでいた恭ちゃん、此頃つくった詩だと云って、それを大きい声で朗読してくれた。

激しい飛び散るような、その詩を聞いていると、私一人が飢えるとか飢えないとかの問題が、まるで子供の一文菓子のようにロマンチックで、感傷的センチメンタルで、私は私の食慾を嘲笑したくなった。

正しく盗む事も不道德ではないと思えた。

帰えって今夜はいゝものを書こう。コオフンしながら、楽しみに夜風のリンリンした町へ出た。

星がラツパを吹いている

突きさしたら血が吹きこぼれそうだ

破れ靴のように捨てられた白いベンチの上に

私はまるで淫売婦のような姿体で

無数の星の冷たさを愛している

朝になれば

あんな空^ほの花は消えてしまいうじやないか
誰でもいゝ！

思想も哲学もけいべつしてしまった

白いベンチの女の上に

臭い接吻でも浴びせてくれ

一つの現実

しばし飢えを満たしてくれますからね。

家に帰える事が、むしように厭になった。

人間の春秋^{くらし}とは、かくまでも佗^たしいものか！ ベンチに下駄をぶらさげたまゝ転がると、

星があんまりまともに見えすぎる。

星になった女！

星から生れた女！

頭がはつきりする事は、風が筒抜けで、馬鹿のように悲しくなる。

夜更け。馬に追われた夢を見る。

隣室の××頭痛し。

二月×日

朝から雪混りの雨。

寢床で当にもならない原稿を書いていると、十子遊びに来る。

「私どこへも行く所なくなつたのよ、二三日泊めてくれない？」

羽根のもげたこおろぎのような彼女の姿体から、押花のような匂いをかいだ。

「お米も何もないのよ、それでよかつたら何日でも泊っていらつしやい。」

「カフエーの客つて、みんなジユウね、××と鼻ばかり赤かくしていて、真実なんて爪の垢ほどもありやアしないんだから……。」

「カフエーの客でなくたつて、いま時は、物々交換でなくちや……せち辛いのよ。」

「あんなところで働くの、体より神経の方が先に参いっちゃうわね。」

十子は、帯を昆布巻きのようにクルクル巻くと、枕のかわりにして、私の裾に足を延ばして蒲団へもぐり込んで来た。

「あゝ極楽！ 極楽！」

すべすべと柔い十子のふくらつはぎに私の足がさわると、彼女は込み上げて来る子供の様な笑い声で、クツクツおかしそうに笑った。

寒い夜気に当って、硝子窓がピンピン音をたてゝいる。

家を持たない女が、寢床を持たない女が、可愛らしい女が、安心して裾にさしあつて寢ている。私はたまらなくなつて、飛びおきると、火鉢にドンドン新聞をまるめて焚いた。

「どう？ 少しは暖い！」

「大丈夫よ……。」

十子は蒲団を頬迄しずり上げると、虫の様に泣き出してしまった。

午前一時。

二人で支那そばを食べる。

朝から何もたべていなかった私は、その支那そばがみんな火になるような気がした。

炬燵がなくとも、二人でさしあつて蒲団にはいつていると、平和な気持ちになる。いゝものを根限り書こう――。

二月八日

朝六枚ばかりの短編を書きあげる。

此六枚ばかりのものを持つて、雑誌社をまわる事は憂鬱になつて来た。十子食パンを一斤買つて来る。

古新聞を焚いて茶をわかしていると、暗澹とした気持ちになつて、一切合切が、うたかたの泡より儚なく、めんどくさく思えて来る。

「私つくづく家でも持つて落ちつきたくなつたわ、風呂敷一ツさげてあっちこっち、カフェーや、バーをめがけて歩くの心細くなつて来たの……。」

「私なんか、家なんかちつとも持ちたくないわ。此まゝ煙のように呆つと消えられるものなら、その方がずつといゝ。」

「つまらないわね。」

「いつそ、世界中の人間が、一日に二時間だけ働くようになれば、あとは野や山に裸で踊れるじゃないの、生活とは？　なんて、めんどくさい事考えなくてもいゝのにね。」

階下より部屋代をさいそくされる。

カフェー時代に、私に安ものゝ、ヴァニティケースをくれた男があつたが、あの男にで

も金をかりようかしら……。

「あゝあの人！ あの人ならいゝわ、ゆみちゃんに参つてたんだから……。」「ハガキを出す。

神様！ こんな事が悪い事だとお叱り下さいますな。

二月×日

思いあまつて、夜、森川町の秋声氏のお宅に行く。

国へ帰えると嘘を言つて金を借りるより仕方がない。自分の原稿なんか、頼む事は、あんまりはずかしい気がするし、レモンを輪切りにしたような電気ストーヴが赤くかくかく燃えて、部屋の中は、私の心と五百里位は離れている。

犀の同人で、若い青年がはいつて来た、名前を紹介されたが、秋声氏の声が小さかったので聞きとれなかった。

金の話も結局駄目になつて、後で這入て来た順子さんの華やかな笑声に押されて、青年と私と、秋声氏と順子さんと四人は外に出た。

「ね、先生！ おしる粉でも食べましょうよ。」

順子さんが夜会巻き風な髪に手をかざして秋声氏の細い肩に凭れて歩いている。私は鎖につながれた犬の感じがしないでもなかったが、非常に腹がすいていたし、甘いものへの私の食欲は、あさましく犬の感じにまでおちてしまった。

誰かに甘えて、私もおしる粉と一緒に食べる人をさがすかな。四人は、燕楽軒の横の坂をおりて、梅園と云う、待合のようなおしる粉屋へはいる。黒い卓子について、つまみのしその実を嘔むと、あゝ腹いっぱい茶づけが食べてみたいなど思った。

しる粉屋を出ると、青年と別れて、私達三人は、小石川の紅梅亭に行く。賀々寿々の新内と、三好の酔っぱらいに一寸涙ぐましくなって、いゝ気持ちであった。

少しばかりの金があれば、こんなにも楽しい思いが出来る。まさか紳士と淑女に連れそつて来た私が、お茶づけを腹いっぱい食いたい事にお伽話のような空想を抱いていると誰が思うだろうか！

順子さんは、よせも退屈したと云う、三人は雨のそぼ降る肴町の裏通りを歩いた。

「ね、先生！ 私こんどの××の小説の題なんてつけましょう、考えてみて頂戴な、流れ

るまゝには少しチンプだったから……。」

順子さんの薄い扇が、コウモリのように見えた。

団子坂のエビスで紅茶を呑むと、順子さんは、寒いから、何か寄せ鍋でもつゝきたいと云う。

「どこが美味^{うま}いか知ってらっしゃる？」

秋声氏は子供のように目をしばしばさせて、「そうね……。」「私はお二人に別れようと思つた。

二人に別れて、小糠雨を十ちゃんの羽織に浴びながら、団子坂の文房具屋で、原稿用紙を一帖買つてかえる。――八錢也――

ワアツ！ と体中の汚れた息を吐き出しながら、まるで尾を振る犬みたいな女だと私は私を大声あげて嘲笑つてやつた。

帰えつたら、部屋の火鉢に、パチパチ切り炭が弾けていて、カレーの匂いがぐつぐつ泡をふいていた。

見知らない赤いメリンスの風呂敷が部屋の隅に転がって、新らしい蛇の目の傘がしつと

り濡れたまゝ縁側に立てかけてあつた。

隣室では又今夜も秋刀魚か、十ちゃんの羽織を壁にかけているとクツクツ十ちゃんが笑いながら梯子段を上つて来る。

「お芳ちゃんがつたねて来てね、二人で風呂へ行つたの。」皆カフエーの友達、此女は英百合子に似ていて、肌の美しい女だつた。

「十ちゃんも出てしまふし、面白くないから出て来ちやつたわ、二日程泊めて下さいね。」まるで綿でも詰つてゐるかの様に大きい鬚^{まげ}なしをセルロイドの櫛でときつけながら、

「女ばかりもいゝものね……時ちゃん此間あつてよ。どうも思わしくないから、又カフエーへ逆もどりしようかつて云つてたわ。」

お芳さんが米も、煮えているカレーも炭も買つてくれたんだと云つて十子がかいがいしく茶づ台に茶碗をそろえていた。

久し振りに明るい気持ちになる。

敷蒲団がせまいので、昼夜帯をそばに敷て、私が真中、三人並んで寝る事にした。何処か三畳の部屋いっぱいが女の息ではち切れそうな思ひだつた。

高いところからおつちるような夢ばかり見る。

三月×日

新聞社に原稿あずけて帰えつて来ると、ハガキが一枚来ていた。

今夜来ると云う、あの男からの速達だ。

十ちゃんも芳ちゃんも仕事を見つけに行つたのか、部屋の中は火が消えたように淋しかった。

あんな男に金を借してくれなんて言えたもんじゃないじゃないか。十ちゃんに相談してみようかしら……。

妙に胸がさわがしくなる。

あのヴァニティケースだって、ほてい屋の開業日だって云うので、物好きに買つて来た何割引きかのものなのなんだ。そうして、偶然に私の番だったので、くれたようなものゝ、別にあつちからも、こつちからも路傍の人以外に、何でもありはしない。

あんなハガキ一本で来ると云う速達、それにあつちの人はもうかなりな年だし、私は齒がズキズキする程胸さわがしくなつてしまった。

夜――。霰まじりの雪が降りだした。

女達はまだ帰えつて来ない。

雪を浴びた林檎の果実籠をさげて、ヴァニティケースをくれた男来る。神様よ笑わないで下さい。私の本能なんてこんなに汚れたものではないのです。私は沈黙って両手を火鉢にかざしていた。

「いゝ部屋にいるんだね。」

此男は、まるで妾の家へでもやつて来たかの如く、オーヴァをぬぐと、近々と顔をさしよせて、

「そんなに困っているの……。」と云う。

「拾円位ならいつでも借してあげるよ。」

暗いガラス戸をかすめて雪がちらしのように通つて行く。

私の両手を、男は自分の大きい両手でパンのようにはさむと、アイマイな言葉で「ね！」と云った。私はたまらなく憎しみを感じると、涙を振りほどこきながら、男に云った。

「私は淫売婦じゃないんですよ。食えないから、お金だけが借してほしかったのです。」

隣室で、妻君のクスクス笑う声が聞こえる。

「誰です笑っているのは！ 笑らいたければ私の前で笑って下さい！ 蔭でなぞ笑うのは

止して下さい！」

男の出で行った後、私は二階から果物籠を地球のようにほうり投げてやった。

女アパツシユ

二月×日

あゝ何もかも犬に食われてしまえ！

寝転ろんで鏡を見てみると、歪んだ顔が少女の^{むすめ}ように見えて、体中が妙に熱^ねっぽくなつて来る。

こんなに髪をくしゃくしゃにして、ガランスのかった古い花模様の蒲団の中から乗り出していると、私の胸が夏の海のように泡立って来る。汗っぽい顔を、畳にべったり押しつけてみたり、むき出しの足を鏡に写して見たり、私は打ちつけるような激しい情熱を感じると、蒲団を蹴って窓を開けた。

——思いまわせばみな切な、貧しきもの、世に疎きもの、哀れなるもの、ひもじきもの、乏しく、寒く、物足らぬ、果敢なく、味気なく、よりどころなく、頼みなきもの、

捉えがたくあらわしがたく、口にしがたく、忘れ易く、常なく、かよわるもの、詮ずれば仏ならねど此世は寂し。

チョコレート色のアトリエの煙を見ていると、白秋のこんな詩をふっと口ずさみたくなってくる、真まことに頼みがいなき人の世かな。

三階の窓から見降ろしていると、モデル女の裸がカーテンの隙間から見える。青ペンキのはげた校舎裏の土俵の日溜りひだまりでは、ルパシカの紐の長い画学生達が、之は又野方のほうず図もなく長閑なすもうの遊び。

上から口笛をプイプイ吹いてやると、カップ頭が皆三階を見上げる。さあその土俵の上に此三階の女は飛び降りて行きますよって吐鳴ったら、皆喜こんで拍手してくれるだろう――。

川端画塾横の石屋のアパートに越して来てもう十日あまり、寒空に毎日チョコレート色のストオヴの煙を眺めて、私は二十通あまりも履歴書を書いた。

原籍を鹿児島県、東桜島、古里、温泉場だなんて書くと、あんまり遠いので誰も信用してくれないんです、だから東京に原籍を書きなおすと、非常に肩が軽くて、説明も入ら

ない。

「オーイ」

障子にバラバラ砂ツ風が当たると、下の土俵場から、画学生達はキャラメルをつぶてのうに投げってくれる。そのキャラメルの美味^{うま}かったこと……。

隣の女学生かえつて来る。

「うまくやってるわ！」

私のドアを乱暴に蹴って、道具をそこへほうり出すと、私の肩に手をかけて、

「ちよいと画描きさん、もつとほおつてよ。も一人ふえたんだから……。」

「……………」

下から、遊びに行つてもいいか？　つて云うサインを画学生達が投げると、此十七の女

学生は指を二本出してみせた。

「その指何の事よ。」

「これ！　何でもないわ、いらつしやいつて言う意味にも取つていゝし、駄目駄目って事だつていゝわ……。」

此女学生は不良。パパと二人きりで此アパートに間借りしていて、パパが帰えて来ないと私の蒲団にもぐり込みに来る可愛い少女だった。

「私の父さん？ さくらあらいこの社長よ。」

だから私は石鱈よりも、このあらいこをもらう事が多い。

「ね、つまらないわね。私月謝がはらえないので、学校止してしまいたいだよ。」

火鉢がないので、七輪に折り屑を燃やして炭をおこす。

「階下の七号に越して来た女ね、時計屋さんの妾だつて、お上さんがとてもチャホヤしていて憎らしいたら……。」「

彼女の呼名はいくつもあるので判らないんだが、自分ではベニがねと云っていた。ベニのパパはハワイに長い事行っていたとかで、ビール箱でこしらえた大きいベッドにベニと寝ていた。

何をやっているのか見当もつかないのだが、桜あらいこの空袋が沢山持ちこまれる事がある。

「私んとこのパパあんなにいつもニコニコ笑ってるけど、とても淋しいのよ、あんたお嫁さんになつてくれない。」

「馬鹿ね！ ベニさんは、私はあんなお爺さん大嫌いよ。」

「だってうちのパパ一人でおくのはもつたないって、若い女が一人でゴロゴロしている事は、とてもそんだってさア。」

三階建の此ガクガクのアパートが、火事にでもならないかしら。

寝転ろんで新聞を見る。

きまつて目の行くところは、芸者と求妻と、貸金と女中の欄だ。

「お姉さん！ こんど常盤座へ行かない、三館共通で、朝から見られるわ、私歌劇女優になりたくて仕様がなのよ。」

ベニは壁に手の甲をぶつつけながら、リゴレットを鼻の先きで唄っていた。

夜

松田さん遊びに来る。

私は此人に拾円あまりも借りがあつて、それを払えないのがとても苦しい。あのミシン屋の二階を引き払って、こんな貧乏アパートに越して来たのも一つは松田さんの親切から逃げたい為だった。

「貴女にバナ、を食べさせようと思つて持つて来たのです。食べませんか。」

此人の言う事は、一ツ一ツ何か思わせぶりの言いかたになる。

本当はいゝ人なんだがけちでしつこくて、小さい事が一番嫌いだった。

「私は自分が小さいから、結婚するんだったら、大きい人と結婚するわ。」

いつもこう言つてあるのに、此人は毎日のように遊びに来る。

さよなら！　そう云つて歸えつて行くと、非常にすまない気持ちで、こんど会つたら優しい言葉をかけてあげようと思つても、こうして会うと、シャツの目立つて白いのなんかとてもしゃくだった。

「いつまでもお金かえせないで、本当にすまなく思っています。」

松田さんは酒にでも酔つてゐるのか、わざとらしくつつぷしてゴブゴブ涙の息をしていた。

さくらあらいこの所へ行くの厭だけど、自分の好かない場違いの人の涙を見ている事が辛らくなつたので、そつとドアのそばへ行く。

あゝ拾円と云う金が、こんなにも重苦しい涙を見なければならぬのかしら、その拾円がみんな、ミシン屋の叔母さんのふところへ、はいつて私には素通して行つただけの拾円

だった。

セルロイド工場の事。

自殺したお千代さんの事。

ミシン屋の二畳でむかえた貧しい正月の事。

あゝみんなすぎてしまったのに、小さな男の涙姿を見ると、同じような夢を見ている錯覚がおこる。

「今日は、どんなにしても話したい気持ちで来たんです。」

松田さんのふところには、剃刀のようなものがキラキラ見えた。

「誰が悪るいんです！ 変なまねは止めて下さい。」

こんなところで、こんな好きでもない男に殺ろされる事はたまらないと思った。私は私を捨てゝ行つた島の男の事が、急に思い出されると、こんなアパートの片隅で、私一人辛い思いをしている事が切なかつた。

「何もしません。これは自分に言いきかせるものなのです。死んでもいゝつもりで話しに来たのです。」

あゝ私はいつも、松田さんの優さしい言葉には参ってしまう。

「どうにもならないんじゃないやありませんか、別れても、いつ帰えってくるかも知れないひとがあるんです。それに私はとても変質者だから駄目ですの、お金も借りっぱなしでとても苦しく思っていますが、四五日すれば何とかしますから……。」

松田さんは立ちあがると、狂人のようにあわたゞしく梯子を降りて行ってしまった。

夜更け。

島の男の古い手紙を出して読む。

皆、之が嘘だったのかしら、アパートの頭のもげそうな風が吹く。

栓ずれば仏ならねどみな寂しか……。

三月×日

菜の花の金色が、硝子窓から、広い田舎の野原を思い出させてくれた。その花屋の横を折れると、××産園とペンキの看板がかゝっていた。何度も思いあきらめて、結局産婆にでもなってしまうと思って。たずねて来た千駄木町の××産園。

歪んだ格子を開けると、玄関の三畳に三人許りも女が、炬燵にゴロゴロして居た。

「何なの……。」

「新聞を見て来たんですけど……助手見習生入用ってありましたでしょう。」

「こんなにせまいのに、あいつまだ助手を置くつもりかしら……。」

二階の物干には、枯れたおしめが半開きの雨戸にボタンボタン当って居た。

「こゝは女ばかりですから、遠慮はないんですよ、私が方々へ出ますから、事務を取って戴けばいゝんです。」

このみすばらしい××産園の主人にしては美しすぎる女が、私に熱い紅茶をすゝめてくれた。下の女達が、あいつと言ったのが此女なのだろうか、高価な香水の匂いがクンクンして、二階の此四畳半だけは、ぜいたくな道具がそろっていた。

「実はね、下にいる女達、皆素性が悪くて、子供でも産^うんでしまえばそれっきり逃げ出しそうなやつばかりなんですよ。だから今日からでも私の留守居して貰いたいんですが、御都合いかゞ？」

あぶらのむちむちした白い柔い手を頬に当て、私を見ている此女の瞳には、何かキラキラした冷たさがあつた。話はいかにも親しそうにしている、瞳は遠くの方を見ている。

そのはるかなものを見ている彼女の瞳には空もなければ山も海も、まして人生の旅愁な
んて、支那人形の瞳のような、冷々と底知れない野心が光っていた。

「えゝ今日からお手助してもようございますわ。」

昼

黒いボアに頬を埋めて女主人出て行く。

少女が台所で玉葱をジタジタ油でいためている。

「一寸！ 厭になっちゃうね、又玉葱にしょっぺ汁かい？」

「だって、これしか当がつて行かねえんだもの……。」

「へん！ まるで犬ころとまちがえてやがるよ。」

ジロジロ睨みあっている瞳を冷笑にかえると、彼女達は煙草をくゆらしながら、
「助手さん！ 寒いから汚ないでしょうけど、こゝへ来て当りませんか！」

何か底知れない気うつさを感じながら、襖をあけると、雑然として前の玄関に、女が六
人位もさしあつて居た。

こんなどこから来たのかしら――

「助手さん！ 貴方お国どこ？」

「東京ですの。」

「テヘッ！ そうでございますの、一寸これやごまめだよ。」

女達は、ワツハワツハ笑いながら、何か話しあっていた。

昼の膳の上。

玉葱のいためたのに醤油をかけたの、京菜の漬物、薄い味噌汁。

八人の女が、猿のように小さな卓子を囲んで箸を動かせる。

「子供××××××××××と言つて、あいつ一日延ばしに私から金を取る事ばかり考えているよ、そして栄養食ヴィタミンBが必要ですか、奴淫売ドインバイのくせに！」

女給が三人

田舎芸者が一人

女中が一人

未亡人が一人

女達が去ったあと、少女が六人の女の説明をしてくれた。

「うちの先生は、産婆が本業じゃないのよ、あの女の人達前からうちの先生のアレの世話になってんですの、世話だけでも大したものでしょう。」

奴淫売ドインバイ！ と云い散らした女の言葉が判ると、自分が一直線に落ち込んだような気がして急に、フツと松田さんの顔が心に浮んだ。

不運な職業にばかりあさりつく私、もう何も言わないで、あの人と一緒になろうかしら――。

何でもない風ふうをよそおって、玄関へ出る。

「荷物を持って、もう帰るの……。」

××の写真を、まるで散しのように枕元に散乱させて居た女が、フツと起きあがって、それに座蒲団をかぶせると、

「ちよいと、先生がかえるまで帰えつちや駄目だわ……私達が叱られるもの、それにどんなもん持って行かれるか判らないし。」

何と云う救いがたなき女達だろう、何がおかしいのか、皆目尻に冷嘲を含んで私が消え

たら、一どきに哄笑しそうな様子だった。

いつの間に誰か来たのか、玄関の横の庭には、赤い男の靴が一足ぬいであった。

「見て御らんなさいな、本が一冊と雑記帳ですよ、何も取りやしませんよ。」

「帰えつちや、やかましいよ。」女中風な女が、一番不快だった。

腹が大きくなると、こんなにもひねくれて動物的になるものか、彼女等の瞳はまるで猿だ。

「困るのは勝手ですよ。」外の暮色に押されて花屋の菜の花の前に来ると、始めて私は大きい息をついた。

あゝ菜の花の古里。

あの女達も、此菜の花の郷愁を知らないのかしら……だが、何年か、見きわめもつかない生活を東京で続けたら、私自身の姿があんな風になるかも知れない。

街の菜の花！

清純な気持ちで、生きたいものだ。何とかどうにか、目標を定めたものだ。今見て来た女達の、実もフタもないザラザラした人情を感じると、私を捨て、去った島の男が呪ろ

わしくさえ思えて、寒い三月の灯の街に、呆然と私はたちすくむ。

玉葱としよっぺ汁。

共同たんつぼのような悪臭、いったいあの女達は誰を呪っているのかしら――。

三月×日

朝、島の男より為替来る。母さんのハガキ一通。

当にならない僕なんか当にしないで、いゝ縁があつたら結婚して下さい、僕の生活は自分、親のすねかじり、自分で自分がわからない、君の事を思うとたまらなくなるが、二人の間は一生ゼツボウ状態だろう――。

男の親達が、他国者の娘なんか許るさないと云つたのを思い出すと私は子供のように泣けて来た。

さあ、此拾円を松田さんに返えそう、そしてせいせいしてしまいたい。

せいっぱい声をはりあげて、小学生のような気持ちで本が読みたい。

ハト、マメ、コマ、タノシミニマツテ中ナサイか！

郵便局から帰えつて来ると、お隣のベニの部屋に、刑事が二人も来ていた。窓をあけると、三月の陽を浴びて、画学生たちが、すもうを取ったり、壁に凭れたり、あんなにウラウラと暮らせたらゆかいだろう。

私も絵は好きなんですよ、ホラ！　ゴオギヤンだの、デイファイだの好きです。「アパートに空間ありませんか！」

新鮮な朗らかな笑い声をはじけると、一せいに彼達の瞳が私を見上げる。

その瞳には、空や山や海や――。

私はベニの真似をして二本の指を出して見せた。

焦心、生きるは五十年

――改造社から続放浪記が出ます。よろしく、御愛読を乞う、筆者――

青空文庫情報

底本：「作家の自伝」¹⁷ 林芙美子」日本図書センター

1994（平成6）年10月25日初版第1刷発行

底本の親本：「女人藝術」

1928（昭和3）年10月号～1930（昭和5）年10月号

初出：「女人藝術」

1928（昭和3）年10月号～1930（昭和5）年10月号

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※「憂鬱」と「憂鬱」、「莫座」と「莫座」の混在は、底本通りです。

※編集部による「」内の注記、追加のルビは省略しました。

入力：kompass

校正：伊藤時也

2007年4月11日作成

2014年6月29日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

放浪記（初出）

林芙美子

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>